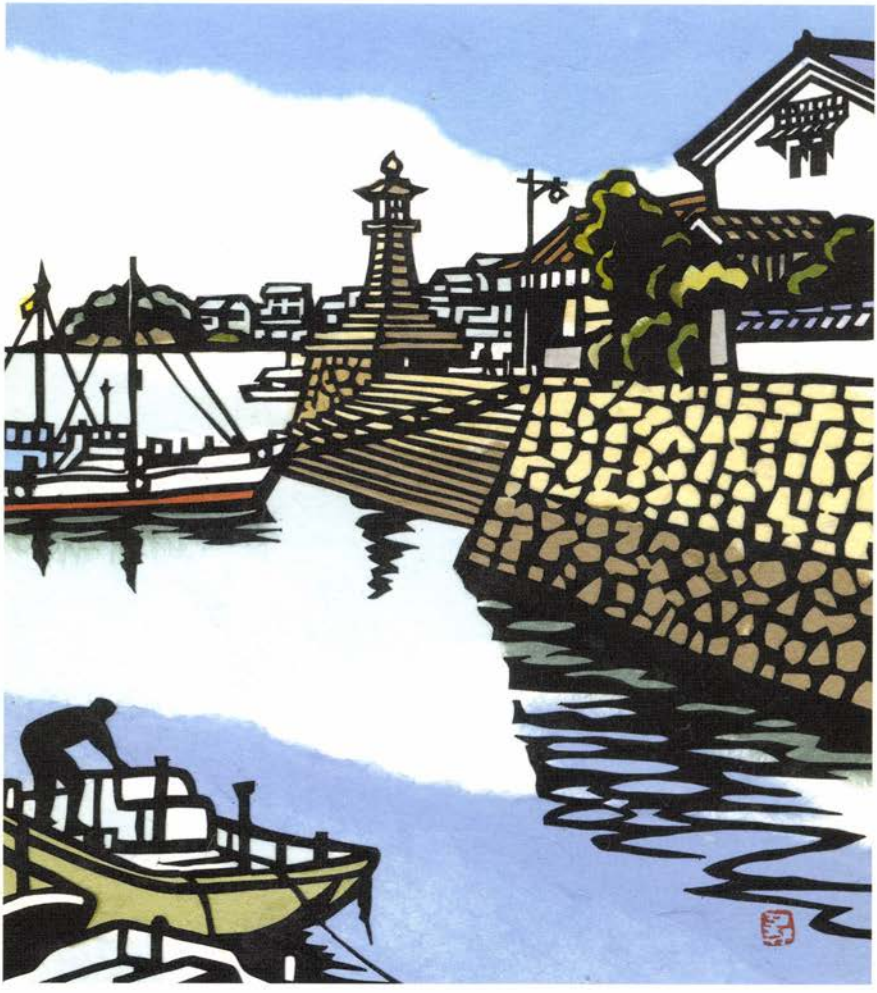
川柳塔

創刊大正十三年　通巻九六二号



No. 962

七月号

日川協加盟

選者交代のお知らせ

九月号（七月投句締め切り分）から来年八月号までの選者を次の通り交代します。

水煙抄　西出楓楽

檸檬抄　鈴木公弘
　　西口いわゑ）共選

川柳塔社

「檸檬抄」課題

鈴木公弘・西口いわゑ　共選

発表	月	課題	締め切り日
19年	9月	長い	7月15日
	10月	ぼちぼち	8月15日
	11月	飛ぶ	9月15日
	12月	サイン	10月15日
20年	1月	これから	11月15日
	2月	火	12月15日
	3月	欠ける	1月15日
	4月	横文字	2月15日
	5月	沖	3月15日
	6月	コピー	4月15日
	7月	ふらふら	5月15日
	8月	粒	6月15日

事務所移転のお知らせ

川柳塔本社事務所は移転致しました。19年6月21日から左記の事務所にて業務致しております。投句並びに諸連絡の際はお間違いのないよう御確認下さい。

川柳塔社

〒543-0052
大阪市天王寺区大道一丁目一四―一七―二〇一
電話　〇六―六七七九―三四九〇
FAX

主幹　河内天笑
理事長　西出楓楽

最寄駅　JR環状線　寺田町駅・天王寺駅
地下鉄谷町線　四天王寺夕陽丘駅
いずれも徒歩約15分

句会でどきどき

河内天笑

六月七日の本社句会は稀に見るいい句会でした。先月のこの欄「やれば出来る」の中でいい句会の条件をたくさん述べましたが、その殆どが実行に移されたいい会だと思いました。

岳人さんの懐古談も楽しいもので、各選者の披講も、皆さんの呼名も、脇取の耳の良さも全て満点に近く、恐らく先代先々代の主幹や柳宏子さんがその辺りで拍手を送っていてくれてたに違いありません。今月は路郎忌句会。また皆さんの力ですばらしい会に仕上げ路郎師を喜ばせてみたいものです。

扨、先月はいい句会にする演出のいろいろを述べましたが今回は〝句会の効用〟について考えてみます。

第一に句会には出席する事が基本です。句会の効用を弁えて居られる人はちゃんと都合をつけて出席されます。出席されますと一番に主催者に喜ばれます。盛会であることは主催者にとって無上の喜びです。次に「元気な姿を皆さんに見て貰えた」という喜びがあります。「〇〇歳過ぎてもこんなに元気」という誇らしさもあるのです。本社句会の出席を元気のバロメーターにされている長谷川春蘭さんは満九十九歳のご出席で頭が下がります。

次に自分の作品がいくつ抜けたかという楽しみの外に入選句の数だけ、自分では思いつかない着想に出会えるのも出席した人にしか味わえぬもので、ショックにも似たどき感が味わえるのです。

勿論発表誌を見れば載っているのですが、句会場で耳から伝わってくる感動に似たトキメキとは全く次元が異なっていて耳からハートの奥底に届くのが分かります。

私は自分の着想では出来ない作品が発表されると即座に一字たりとも違わずに書き写し、後でご本人にその作品の良さを伝えるのを楽しみにしています。これも一つの句会のたのしみ方なのです。

事情の許す限り句会に出席される事をお勧めします。「昼の句会なら出易いが夜は家族に心配かけるので」という声も時々聞かれます。平均年齢を考えれば尤もな事なので、今後の参考にして参ります。

先ず出席して、どきどきすることで句会の醍醐味を味わって下さい。それは若さを保つ秘訣でもあり、川柳人生を二倍楽しむことでもあります。

◆

自選句

人の顔した猛獣がうろつく世　天笑
悪徳をトップダウンで押し通し　〃
駅前は新手の詐欺で吸い上げる　〃
強妻のトップダウンで動く日日　〃
生きているこのすばらしさ大変さ　〃



座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思い　（路　郎）

私の句

耕せば浸みた先祖の汗に逢う　深田俱久

川柳塔　七月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「鞆の浦」

■巻頭言　句会でどきどき……河内天笑…（1）
路郎顕彰叫び続ける……早川清生…（2）
川柳塔（同人吟）……河内天笑選…（4）
川柳塔の川柳讃歌(31)……木津川　計…（50）
自選集……（51）
温故知新……（54）
水煙抄……奥田みつ子選…（55）
全日本川柳２００７年栃木大会……（77）
愛染帖……新家完司選…（78）
誹風柳多留一一篇研究　23……（82）
檸檬抄「痒　い」……川上大輪・松本文子共選…（84）

路郎顕彰叫び続ける

早川清生

七月は路郎師の亡くなられた月であり、その頃に湧き上る入道雲は、私にとってまさに偉大であった師のシンボルである。

雲の峯という手もあり　さらばさらばですという句は、生前何万句もお創りになった師の最後の作品である。

川柳塔が路郎継承を標榜する以上、路郎師の精神は私どもの中にしっかりと受け継がれていなければならない。かつて私が本誌に掲載されている同人たちの座右の句を集計したところ、同人が範とする作品の作者は薫風さんが一番多く、三割に達した。薫風さんの業績や人柄が改めて偲ばれる。路郎師は二位であったが一割にとどまり、没後四十年余の間に生じた路郎追慕の温度差に、私は歳月の重みとその非情さを痛感した。

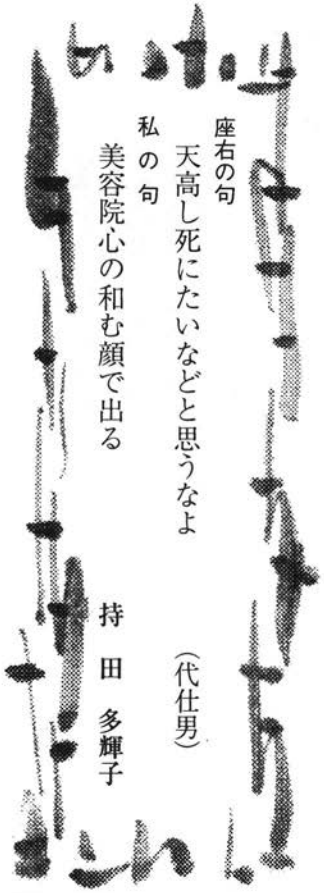
おれに似よ俺に似るなと子を思い

同人が推す座右の句の中で、師の句についてもっとも票数の多かった作品で、代表作ともされているが、次は

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

で、これは師が「川柳によって得た私の人生観

一路集
「地　球」……濱野奇童選……(86)
「脱　ぐ」……志田千代選……(86)
「ひたすら」……鈴木公弘選……(87)
初歩教室「浴　衣」……三宅保州……(88)
秀句鑑賞「同人吟　水煙抄」……森　茂美……(90)……福士慕情……(92)
■各地句会だより　松露川柳会……小西雄々……(93)
田中正坊氏を悼む……(94)
本田智彦・西出楓楽・川端一歩・江見見清
石川侃流洞氏　遺句抄……(97)
■エッセー　敬語の新分類……井上桂作……(99)
六月本社句会……(100)
各地柳壇（佳句地十選／瀧本きよし）……(105)
柳界展望……(120)
七月各地句会案内……(154)
■編集後記（ひとこと／野崎　勝）……希久子・朱夏……(156)



座右の句
天高し死にたいなどと思うなよ　（代仕男）
私の句
美容院心の和む顔で出る
持田多輝子

である」とされた句である。薫風文集によると、寺尾俊平さんは「六大家の中でも、こと作品に関する限りは、麻生路郎が第一等である」と言い

二階を降りてどこへ行く身ぞ

を推すが、これは同人の推挙の中にはない。

七月七日が師の命日であり、昨年のこの日私は本社句会で師の思い出を語らせて頂いた。この年は私が路郎門の不朽洞会に入らせて頂いてちょうど五十年目にあたり、私なりの感慨もあった。お話は三〇分ということであったが、限りない追憶をこじんまりとまとめるより、時間いっぱいお話をして、残りは次の機会にお願いした方がよいと考えた。

本誌五月号で山口光久さんが紹介しているように、川柳雑誌四〇〇号特集に蝟集した門人のうち、今もがんばっているのは私を含めて五人に過ぎない。路郎継承を唱えても、川柳塔同人のほとんどが師の顔すら知らない状況ではきわめて覚束ない話である。

路郎の語り部は薫風さんを措いて他にない。その薫風さんが逝ってしまった今、我々にできることは折あるごとに師の精神を顕彰することであろう。ゴム風船は吹き続けなければしぼんでしまう。吹けば吹くほど風船に書き込まれた「路郎」の文字が大きくひろがる。私はせめて、風船の吹き役の一人にでもさせて頂ければ光栄であると思っている。



河内天笑選

海の日はとにかく海を見に行こう
ひとつずつ片付いてゆくカレンダー
憧れの君も年金族になり
ＯＮとＯＦＦあれば多機能などいらぬ
怒らない約束だけは守れない
人間は猿に似てると思う猿

海南市　三宅保州

老いぐらしひねもすヨイショ　ドッコイショ
動物園の春は虎の子パンダの子
まわれ右じっくり歴史見直そう
悪人がこんなに増えていた日本
不義不実じっと見据える子供の目
老人も福祉ポストに託したい

大阪市　板東倫子

せかせかとしても一度のいのちです
ひとつまみほどの嘘でも安らぐ日
五月雨へ静かに芽ぶく音をきく

西宮市　西口いわゑ

美しい言葉を抱いている夕日
いとしさがギュッとつまっているハート
わたくしの裏も表も知るペンよ

鳥取県　佐伯やえ

花こそ命そむかぬ花とこの余生
不器用に生きて拾ったいい仲間
子宮の景色みごとですよとレントゲン
異状なしやっと笑える花の下
草かんむりをとれば値打ちのないわたし
いい酔いだ禁酒のことは明日にする

八尾市　高杉千歩

天邪鬼携帯欲しくなってきた
古写真これが私と思えない
付き合いのながいお方を先ず信じ
螺子巻いて夏を乗りきるストレッチ
雑学を拾うクイズを追いかける
団塊の親で信心怠らず

米子市　政岡日枝子

バーゲンを選ってる頭痛とまってる
関節痛段々老いていく過程
合わぬ靴はいては石が蹴りにくい
鍵穴を抜け出る家庭内事情
あれこれと花も起きたり眠ったり
ラッキーチャンス私の水も満ちてきた

豊中市　吉田あずき

花の下みな善人に見えてくる
好奇心死ぬまで自分試したい
コンビニへ寄る旅前も旅後も
ＩＴの世へは譲れぬ知恵袋
親の持つ鍵では開かぬ子の心
失敗の中から生まれ出た宝

鳥取市　春木圭一郎

嫌なこと遊びに変える工夫する
欠点も長所にとると面白い
休憩はしっかり取って力抜く
クヨクヨとするな何とかなるだろう
まあいいやみなに好かれることはない
悩んだらとことん仕事することだ

豊中市　安藤寿美子

いい天気私の葬式プラン立て
若葉みな天をめざして競うなり
山ほども咲く花かるい眩暈する
ケータイは不要私をほっといて
連休がすんだ巻寿司作ろうか
つくり笑いしてる私が厭になる

愛知県　早川遡行（盛夫改め）

便箋の罫を食み出す男文字
太陽の真下で稼ぐ泡銭
按摩機で鼾をかいているいのち
医者代が高くて呑んで寝て直す
携帯を持たないボクも頑固者
昔本屋今百均で待ち合わせ

弘前市　髙瀬霜石

湯が沸けばどうにでもなる妻の留守
待ちぼうけしたことがあり早く行く
喧しいプラス志向はいいのだが
一応の勝ち負けはある離婚劇
推敲をしましょうポストまでの距離
わがままを言ってるきっと大丈夫

八幡市　結城君子

連休が終ると日本晴つづく
道問えば桜に出逢う国にいる
半分は残すお膳に礼をいい
敗戦を知ってる人とうまが合い
優越感かくして愚痴も聞いてあげ
八十歳過ぎて退屈しない日々

松山市　髙橋宏臣

数え唄男の愚痴はこぼすまい
火の中へ飛び込めなくて火傷する
捨てられた案山子が知った青い空
褒められてお洒落心が踊り出る
日常に風を入れてる途中下車
寝てばかりいるのに猫の身の軽さ

弘前市　高橋岳水

柏手を打って心の染みを抜く
喉越しのビールは人を選ばない
見合いから芽吹いた愛の物語
断ち切れぬ思いと歩むおぼろ月
ライバルに贈る言葉を化粧する
喉元の微罪を何で漱ぐべき

松江市　津川紫晃

誰よりも上手に折れるだまし舟
投票所の立ち合い人も無党派か
飛びたいが母の翼はまだ温い
噂なら自然に消えていった風
独りじゃないこんなに広い空がある
走馬灯過去が私を離さない

吹田市　穴吹尚士

浮気して関白の座を滑り落ち
情熱のネジをせっせと巻き直す
アナログのままのんびりと老いてゆく
ボランティアして輝きを増す余生
涙腺の蛇口が甘くなっている
半額の魔法に妻はすぐかかる

堺市　石堂潤子

シルバー席に狸寝入りの長い脚
鳥たちの声を貰った朝散歩
二人居の厨にちょっと花を挿し
よう飲まんのに焼酎の香に惹かれ
図書館のソファーで暇を咀嚼する
元気そうと言われて元気そうにする

米子市　澤田千春

忘れずに心の窓を磨きたい
無口だが心の炎える人が好き
ブローチでぐっとデザインひき立った
ラッキーは続かぬものよ目を閉じる
故郷へ便り書きたくなるランプ
暗い道コンビニの灯があったかい

高槻市　西谷治三郎

広告を金出して買う新聞紙
喜寿過ぎて顔ぶれ減った飲み仲間
研究を純喫茶でした頃が華
騒ぐ子の親は試食で忙しい
よそ行きに破れジーンズ着る息子
杖片手ブランドリュックで八十路行く

芝を読むキャディ助言で準優勝
虎連敗ペットもそばに寄りつかぬ
欲ばりの僧の法話に足しびれ
連休に子等が住む街確かめる
父の日の日程ちゃんと空けておく

神戸市　伊勢田　毅

百歳のばあちゃん填るメロドラマ
アクセルとブレーキ妻の意のままに
物音に様子うかがう覗き窓
辛抱と正直だけの怒り肩
門柱へ今日も一日無事でした

神戸市　山口光久

男はつらい黙って重い荷を背負う
指切りが出来ぬ約束するメール
人間が好きで黙っていられない
神様も気まぐれなのね運不運
夕張の支援にメロン一つ買う

神戸市　両川無限

九条は若者たちへの贈物
予定表日々休日を埋めつくす
関節に今朝の機嫌をきいて立つ
玄関を初夏の装いクレマチス
夢のつづきが見られないので起きようか

神戸市　山口美穂

足らぬとこ補い合って夫婦して
お互いが貴重な存在として生きる
高齢者家族でいつもよくしゃべる
神の手に委ねられてる生命線
現状のままで時間が止まるなら

神戸市　山田婦美子

窓際に妻を座らす愛もある（スペイン旅行）
凸凹で補い合って旅続く
中世が生きてる街のスリ注意
フラメンコがんばる日本人に会う
群青の空忘れたくない忘れない

神戸市　田中章子

生かされた意義をしっかり考える
療友と電話で競うリハビリ度
快方に向かう患者は丸くなる
深夜走るナース天使の羽根をつけ
深夜便上手にねかしつけてくれ

神戸市　木村貴代子

自転車に乗れなくなった八十路坂
過去のこと棚のこけしが喋りだす
貧しさが食べ放題を皿に盛る
暖冬異変北も南も氷とけ
炎天をしのいだソバの白い花

相生市　中塚礎石

芦屋市　黒田能子

感激の出来る間はまだ若い
ユニークなお人　周りを困らせる
よく響く声で内緒の話する
手術台ひょっとするかもしれません
満腹になるとテーブルそっけない

尼崎市　田辺鹿太

嬉々として歩けば靴も鳴るだろう
台本がないから夢は面白い
晴れた日はふと童謡を口ずさむ
花を愛で花を惜しんで春が行く
父ちゃんの迷路の先にある呑み屋

尼崎市　軸丸勝巳

昭和の日孫に戦争語り継ぐ
父母の墓姉も逝ったと掌を合わす
躓いたように咳き込む風邪の床
起きて食べ薬を飲んで寝る日課
四連休安全大事家で飲む

尼崎市　春城年代

芽山椒摘んで料理の腕を足し
ベランダの家庭菜園葱坊主
菖蒲湯の肌ちょっと若返ったかと
五月晴れ米寿が集うクラス会
夜気入れる窓に雑多な音も来る

尼崎市　春城武庫坊

陽気な草と陰気な草に春が来る
全身の捻子がゆるんでゆく月日
思い出が身辺整理遅らせる
えんど豆食欲そそる立夏の陽
ベランダで風のシャワーを肌に受け

尼崎市　長浜美籠

利かん気の児が頼もしい紙カブト
言い訳にあの手この手を使われる
芽吹きどき噂聞く人流す人
雑学も思わぬとこで身を助け
潔白と信じていない妻の勘

伊丹市　山崎君子

藤ゆれる正坊さんの訃報聞く（正坊さん逝く）
数々の旅の情けよ惜しい人
連休は身辺整理留守番と
母の日の幸せいっぱいショッピング
里は緑今年も届く春茗荷

三田市　堀　正和

試食してメニューを決めるバイキング
晩酌へはずみをつけたい噂
割り勘でたっぷり愚痴を聞かされる
赤札にまた欺されて粗大ゴミ
カネオクレタノムとメール打ってみる

三田市　北野哲男

錆びさせてならぬお方に酒を注ぐ
抓ってる目元に色気漂わせ
味方だと信じた人の丁寧語
負け組が主流を占める縄のれん
言葉でのキャッチボールも減る夫婦

三田市　久保田千代

助け合う人の輪花が咲いた街
追伸にある真心があったかい
逆風にまたさからっている若さ
選り好みしてから縁も遠ざかり
反省が浮き沈みして終い風呂

三田市　石原歳子

スカンポの歌口遊む群生地
小遣いがもとで小波立っている
泥遊びさせたいけれど土がない
傘立に幸せをみる傘二本
丸まった影みてピンと背を伸ばす

川西市　米原雪子

もったいない言葉がうけた選挙戦
腐るまでもったいないと捨てられず
列島が寒暖の差でいじめられ
持ち前の笑顔で無理を通させる
連敗を代打が救うホームラン

川西市　西内朋月

木刀を一本家に置いてある
火葬場の待合室でよく喋る
妻よりも長生きをする不しあわせ
ニートには関係のない五月病
浅はかな知恵に壊れていく地球

西宮市　牧渕富喜子

あきらめがいち番こわい深呼吸
進むにも退くにも勇気ちょっといる
こりごりの話肴にのんでいる
こどもの日仏さまにも柏もち
大丈夫影がしっかりついてくる

西宮市　坪井孝一

マイペース真ん中へんを目指してる
団塊の父もう鈴を付けられた
乾杯と朝日バンザイ待っている
悩む事持って悪友やって来る
花買う人みな幸せと限らない

西宮市　井上松煙

通り抜けさくらの雲に迷い込み
青春の降りたった駅懐かしむ
ダイエットにスリムな胡瓜食べている
ウォーキング楽しくないが続けてる
傘寿すぎまだ軸足が決まらない

おといの笑顔が今日は喪主の座に
賛美歌も献花も夢の中のこと
言葉にはならず肩抱き手を握り
お裾分けできる幸せ豆実る
大声で笑いうれしさ確かめる

西宮市　亀岡哲子

漫画しか当分読まぬ病み上がり
致死量にならぬ毒なら食べている
先輩に万年筆で出す返事
生産性ばかり言うなよ日なたぼこ
ラーメンと水でも溜まる皮下脂肪

西宮市　片山忠

五月闇この坂越せば明けるだろ
五月晴散歩の靴も白にする
送り梅雨田圃の残る市制なり
棚田百景汗掻いて観て日帰りす
野鳥たちの憩いの浜を狭うして

西宮市　山本義子

ピアスより補聴器欲しい耳となる
窓際の座に人間味おいてある
辛抱の世代も敗ける花粉症
飢餓の子の澄んだ瞳が眩し過ぎ
病んで知る人の情けと冷たさと

西宮市　菊池トミヱ

褒めないと食べないと言う兄卒寿
案じつつ電話口では強い事
あれこれと迷いやっぱり日銀券
老人ポスト奇特な人もそのうちに
呆けよりも冷たく響く認知症

西宮市　秋元てる

余所行きの言葉で司会舌が吊り
同窓会いとしい友の姿消え
蚤の夫婦強い絆の金婚日
週末に雑魚が囲んだ麻雀台
主語のない会話で夫婦恙ない

姫路市　古川奮水

つばめ来て山が本気で笑いだす
ぴかぴかの自転車群れる新学期
下校の児列が伸びたり縮んだり
道草を誘う菜の花れんげ草
溌剌と初夏の日差しに若葉萌え

兵庫県　大谷幸次郎

国旗掲揚国歌斉唱おどおどと
岐路に立つ男無心で賽を振る
瀬戸際に立っても男背伸びする
うとうとが生む追突の大惨事
遺されたペンシル光る五月闇（正坊さん逝く）

奈良市　米田恭昌

奈良市　天正千梢

都井岬　親仔の馬はつつがなし（旅　3句）
一人旅地図をも一度読みなおし
みず満たし命はぐくむ千枚田
返り血は承知でペンをはしらせる
弥陀の手をバッグに入れて旅に出る

奈良県　渡辺富子

五月病田舎の空気吸いに来る
菜の花の海で溺れてひとりきり
苺ジャムたっぷり塗った子育て記
失意の日故郷へ向かう汽車を見る
脱線の講義へ眠けとんで行く

生駒市　飛永ふりこ

花水木視界いっぱい夢溢れ
脱皮するつもり必死に四股を踏む
ゴーヤーの苦味ちくっと疲れ取り
明暗を分ける気迫の数秒よ
新緑とみすゞの詩に浄化され

香芝市　大内朝子

二度と無いこの瞬間をひからねば
どん底を歩いた足の知る情け
よく笑う母の遺伝子生きる糧
昔から知っていたよな初対面
山ほどの試練に絶えてきた笑顔

橿原市　居谷真理子

また一つ解かれて老母は軽くなる
荒ゴミも貧しくなって町老いる
五階から見れば上見ぬ人ばかり
薫風に二つだけ買う柏餅
幾人も人を育ててきた名馬

大和郡山市　坊農柳弘

梅雨晴れ間夏の序曲の虹が立つ
紫陽花の色香惜しんで梅雨明ける
人許す愛の起伏の雨上がり
我武者羅に生きた男の向こう傷
阿波踊り誘われ上手な宿ゆかた

和歌山市　木本朱夏

神さまの予定で春がまだ来ない
声嗄れるまで神さまを呼んでいる
譲らない神ばかりいて血の大地
神さまの死角で種を蒔いている
うしろ手に神が隠している答

和歌山市　喜田准一

ぶっちゃけて終えば楽になるだろう
こだわった枝葉の声がでかくなる
他愛ない嘘を悔んで歯を磨く
風通し良過ぎて意見まとまらぬ
聞き方に回り会議が弾み出す

肩書きをひけらかしてる春の鬱
肩の凝る話くどくど真面目すぎ
義理チョコのお返しが来た母の日に
米研いで待っているのに空を斬る
錯覚が続き死ぬこと忘れてる

和歌山市　福本英子

万緑のシャワーに出合う散歩道
ふる里の梁の太さも忘れがち
公園から子供を消した数え歌
はしゃぎ過ぎが足腰にくる二　三日
今年こそ太めの人魚になってやる

和歌山市　古久保和子

夫の背に三歩後れる夢の中
ひとり旅歩く道辺に四季の花
生きがいに知恵と健康カルチャーへ
真央ちゃんの涙の銀にもらい泣き
偏食が私の命左右する

和歌山市　松尾和香

君子蘭見事に咲いて人許す
お互いの傷み分け合う長電話
衣替え捨てたいものがたんとある
母や姉をしのぶ琴爪そっとはめ
床の間のお琴ひき手を待ったまま

和歌山市　細川稚代

金物の盗難事件多発する
タミフルで異常行動多発する
裏金でプロ野球界揺れてきた
幹部とは頭を下げる時顔を見せ
世界的最悪乱射時勢です

和歌山市　宮本三喜夫

徒花と知りつつ夢を追いかける
おおらかに包んでおこう寒い口
良い方にとられにこにこする伏せ字
三隣亡列組んでくる多事多難
巣ごもりのニートも誘う花の春

和歌山市　武本碧

そう酒が好きと言わせただけの恋
冷凍がはじまる愛を失なって
憎いから殺すだなんてそんなこと
負けたのは天狗の君にいいくすり
しつこいと言えばケンカになるだろう

和歌山市　堀畑靖子

銀髪にひと筋紅を入れましょう
ポロシャツのボタンをひとつだけ外し
逢いにいくバスは緑の中走る
魚河岸のめし屋に落ちていたほっぺ
食べっぷりの良さに少うし惚れました

和歌山市　楠見章子

和歌山市　上地登美代

アメリカと喧嘩をしない処世術
おおきにと郵便局にある素顔
辛いという字を幸せと書き直す
まるく掃くことも上手に生きる知恵
ゴーヤの日ゴーヤ拝んでから食べる

和歌山市　玉置当代

平凡な暮らしが好きな豆ごはん
巣立つ春虚しさだけが残る部屋
満身に春風吸ってペダル漕ぐ
マナーの悪さ花は上から見て嘆く
青葉風受けてふたりの万歩計

和歌山市　榎原公子

いっときのしあわせを蒔き春が咲く
五月雨へ今だいまだと立ち葵
母の日をうすむらさきにクレマチス
沈んだり浮いたり心うらはらに
掃除機が唸り隣も大丈夫

海南市　堂上泰女

父さんのいびきに今日も耳へ栓
肩こりが続く病の床の上
ちょっとしたすきを病魔に狙われた
鶯の笹鳴きだけが楽しみで
ぎりぎりの生命を運ぶ救急車

鳥取市　上田俊路

大学にも麻疹休講だってある
いざと言う時には鬼になる覚悟
民族の掟にゆれている地球
脱帽をして君が代の嘘を聴く
誉められてからは脱げないこの仮面

鳥取市　平尾菜美

私の無邪気ステップ踏んでから
板つきの貧乏手足よく動く
考えをめぐらす海に葦といる
窓を打つ風にガラスの夢破れ
一角の思い涙が身に沁みる

鳥取市　加藤茶人

目が覚める今日も生きてた大あくび
妻も子も忘れ演歌の詩に酔う
犬の世話出来ても義母の世話は嫌
消費者を惑わす数字一九八
母の日に比べ父の日花は何

鳥取市　吉田弘子

清貧に生きてぜい沢遠くいる
真剣に思う長生きの良し悪し
子育ての頃が華だと人生譜
オクターブ上げて憤りをぶっつける
にぎやかな人だストレス溜めぬだろ

鳥取市　福島庸二

見たくないまたもトップの頭下げ
情報の過多にマウスも疲れ気味
引いて見て相手の心見えて来る
ここ勝負押してだめならさらに押す
静寂に癒しの時を取り戻す

鳥取市　鈴木公弘

寓話を泳ぐ薫風のこいのぼり
藪になるので竹の子は抜いておく
改革と民主主義とを取り違え
神かつぐ話に熱を抱くまつり
温暖化してよいことと悪いこと

鳥取市　宮脇道子

皺の手を撫でて振り向く生きた道
老い一人町の行事のお弁当
幸せは風に乗ります子等の家
良く堪えて子等の顔見て消えた過去
人相も暮しも身に付く生き字引

鳥取市　垰　寛子

姉さんと呼ぶ老紳士リュック背負う（二十年ぶりに義弟（83歳）と再会）
あふれでる話肴の半生記
プール王者の亡兄のお膳は肉　卵
そのうらめしさ今老僕を泳がせる
あれ以来を語りつくせぬままで酔い

鳥取市　山本益子

思い遣り腸内美化へまず野菜
我流日記内緒の話イニシャルで
入学式にぎやかに呼ぶクラブ入り
子供の日喜ぶ靴の整然と
面接日心そわそわ汗ひやり

鳥取市　冨山檳榔樹

おばんざいさわやか酸味リフレッシュ
地蔵盆赤いシャッポに子の笑顔
ほんのりと柚香の酸味に風薫る
車椅子膝にひい孫孫が押す
初夏の風透明感でスキンケア

鳥取市　夏目一粋

劣性の遺伝子継いで来たさだめ
一通の手紙の中に丸裸
すこしずつ褪せてゆきそう空元気
清貧の頃はからだが炎えていた
独り言なんだか齢を感じだす

鳥取市　倉益一瑤

荒海を泳ぐ溺れてなるもんか
晩学のメガネたくさん買って来る
エンジンが午後からかかる定退後
イケメンの鼻の高さが気に入らぬ
脱線に父は無言で釘を打ち

鳥取市　近藤佳子

たんぽぽよ翔べ新緑の風にのり
飲めたならきっと私は泣き上戸
子を産まぬ乳房豊かに大写し
方言をたらふく食べたクラス会
お念仏風の心になってくる

鳥取市　有沢せつ子

誕生を知った隣の鯉のぼり
子供らは親をモデルにして育つ
狼の寓話を言って児を諭す
フレッシュなセールスマンがよく粘る
にわか雨止むまで店の客のふり

鳥取市　録沢風花

ごみの日は無銭飲食するカラス
メタボリック症候群になるカラス
もてなしも松竹梅とあるこの世
銀座よりひなびた路地のほうが好き
美しい国になるまで見届ける

鳥取市　岸本宏章

謎ひとつ男のロマン掻き立てる
幸せな雨だ大地が吸ってくれ
夕張に学ぶところはたんとある
ごみひとつない床の間が落ち着かぬ
南極の氷が牙を研いでいる

鳥取市　岸本孝子

足腰の機嫌をとって行楽地
子はかすがい昔ばなしになってきた
年寄りが集ってはずむお湯の宿
夫婦茶碗何度も替えて金婚譜
ほほなでる風で気付いた季の移り

鳥取市　土橋睦子

風よりも早い噂をもてあます
本心を打ち明けてから楽になる
次の世に滾らす種を蒔いておく
絶好のチャンスとねばるから嵌る
知恵かして私ひとりじゃ荷が重い

鳥取市　奥谷彩子

グリーンのシャワー森林浴に弾む靴
朝刊を世相斜めに切って読む
荒れた子へ母の港は凪いで待つ
顔見える位置でケータイかけている
熱血の教え生徒に伝わらず

鳥取市　土橋はるお

バス停に古い週刊誌が溜る
別嬪の横に空いてる枠がある
紙漉くやメダカを掬うように漉く
凝り性の肩にはいつも弥陀の手が
トイレだけ使いに入る道の駅

結晶は玉虫色の騙し合い
伏せ字ある改造論に鳴る拍手
従業員募集ブームよありがとう
連休は菊の挿し木と決めている
ショッピングカー杖の代わりに押している

鳥取市　武田帆雀

ひざ痛を除けば手口みな達者
花つけた草は抜かないことにする
振り向けば恥ずことばかり積んでいる
完治せぬ病があろうはずがない
マイホーム持って節約強いられる

鳥取市　福西茶子

閉校で古里の名がまた消えた
体育館子供のコダマ消えたまま
通学路今は無言に閉校す
倶会一処柳聖路郎傍に見る
温家宝黄砂視察に来日す

鳥取市　池原天馬

毎日が命日肝に銘じてる
イケメンの父に反感持っている
粉飾を暴かれ駄々をこねている
改革の大きな渦に逆らえぬ
たまに来てなつかぬ孫とたわむれる

鳥取市　中村金祥

薬玉が割れて一万人目です
セキュリティー鍵は暗証番号で
花吹雪浴びて車椅子弾む
好き勝手自由気儘も窮屈だ
仕事着を脱げば普通のおばあさん

鳥取市　西川和子

踏ん切りがつけば心も軽くなる
披露宴知らぬお客と盛り上る
夢追いがはしゃいでばかり星の夜
美しい言葉で夢を演じ切る
人生のドラマ知ってる深い皺

鳥取市　福田登美

ときめいて心通わす手話の指
婆ちゃんも気前よくなる年金日
葉桜へペダル踏む足軽くなる
ライバルの笑みがわたしを悩ませる
人生の何丁目かな神まかせ

鳥取市　永原昌鼓

時計にはお礼を言った事がない
嘘つかぬ奴は人間様じゃない
火葬場の煙地獄か極楽か
のら猫が何故か私を見張ってる
飽食の若者達はボロが好き

鳥取市　中宇地秀四

倉吉市　野口節子

出る釘の痛さも知って黄昏れる
自分史のところどころが消えている
運命の凄い力に泣き寝入り
借金を催促したら凄まれた
ロマンチストの夫と秋刀魚食べている

倉吉市　最上和枝

心地よい風呂で善悪解かしきる
ほろ酔えば軍歌十八番のお爺さん
握る手を開けば嘘がころげ落ち
耳に住む音痴の亡母の子守歌
貧乏に耐えた時代は若かった

倉吉市　山中康子

雑念を入れぬ早朝のおつとめ
ベテランへ届かぬペンをにぎりしめ
謝って胸のつかえがどっと下り
顔相をころっと変える白と黒
ちぎれ雲母を慕って幾千里

倉吉市　山本玲子

垣のバラ太陽浴びてワッと咲く
足早な夕立雲と駆け比べ
絶壁に想像超えた磨崖仏
もうそこに米寿の音と常備薬
雲行きが変るかもねと呆けた振り

倉吉市　米田幸子

年頃のリンゴに虫が付きだした
ばあちゃんは元気リンゴも丸かじり
古稀の坂越したらみんな枯れすすき
三世代我慢袋はおんぼろろ
末っ子は何時も我慢の子であった

倉吉市　猪川由美子

一人相撲取っては更に草臥れる
ああ少子両の乳房を一人占め
子沢山育てる策の制定を
我慢がまんで心うっ血爆発だっ
スタミナの配分老いの日を生きる

倉吉市　牧野芳光

言い訳の底が見えたら座を外す
杉木立いつか誰かが天を突く
くもり後晴れ人生もそのように
飽きもせず幻を追う日暮れ道
こげ飯と鰯で育ち憂いなし

米子市　白根ふみ

差し引きをするとラッキーなどちびり
非常袋に飴もワインも詰めている
もしもの老母をふる里においている
ご近所はもしもがひとりごそごそと
おたがいに鍵をかけてるお隣も

松林ラッキー票で生き残る
ラッキーな風に誘われ花月亭
金庫の鍵より仏壇が安心だ
食料とバイオガソリン綱引きだ
母の日のコンビニ棚が味気ない

米子市　野坂なみ

コンビニをまったく知らぬおばあちゃん
ラッキーと一人はしゃいだ遠い日よ
ロマンスグレーそれも一つの魅力だな
認知症に希望ワクチン開発だ
デザインがいい嫁からのプレゼント

米子市　光井玲子

こりもせずもしももしもで生きのびた
うちの土ミミズいるから大丈夫
今度こそラッキーチャンスのがさぬぞ
鍵かけぬ心は何時も持ち歩く
もしも今酒とさくらがなかったら

米子市　中井ゆき

鍵っ子にしていないのに淋しがり
沢山の鍵を信じて生きている
棚ぼたのもしもを待って傘寿すぎ
私のもしもに残すものがない
将来を担う子供を護らねば

米子市　木村富美子

杖なしの試歩をラッキーだと思い
幸せの鍵は自分の胸の中
たそがれて無口になった星がふえ
朝ぐもり靴もうかない顔をする
傘を杖やっとお寺へたどりつく

米子市　門脇晶子

老いの身仕度ゆったりとした服を買う
コンビニで立ち読み若い者まねる
カギ握る友が認知症になったよ
充電をしたくて本屋さんのぞく
ゆっくりと我が家の風呂で疲れとる

米子市　青戸田鶴

鬼婆と出合うと息が止りそう
福祉の手借りて生きてて悪を吐く
表情一つ変えず悪口聞く悪女
何の因果これほどまでにいじめられ
骨肉の争い他人うれしそう

鳥取県　下田茂登子

GWやっと解放孫の守
初夏の風キウイの花芽捥いで去る
産卵し金魚の憐れ共食いす
枯れ松に上りあでやか藤の花
初夏の陽を浴びて魚釣る夏帽子

鳥取県　竹信照彦

五月病案じて泳ぐ鯉のぼり
マニフェスト流れる汗で消えかかり
みどりの日昭和　国民どれがどれ
老いの身に優しい日差し探してる
柿若葉猫は欠伸をのんびりと

鳥取県　深田倶久

めでたさへ水増し料は苦にならぬ
ぴったりと合わぬ嬉しいマタニティー
ドジばかり踏むがぴったり夫婦です
ネックレス褒めて器量は口にせぬ
学べよと辞書に発破をかけられる

鳥取県　石谷美恵子

福耳はひそひそ話好きらしい
父の背が手本を示す人の道
合いの手を入れてまあるく輪になった
勝ち馬に乗って強者の顔になる
実の成らぬ淡い恋ですちぎれ雲

鳥取県　盛田夢路

沈黙も軽いジョークで座が和む
大役を軽い気持で受けた悔い
本心をぴったり見抜く鏡です
イケメンを追っかけ妻が帰らない
ＩＱは高いがモラル欠けている

鳥取県　山下節子

朝の窓開けて目に沁む柿若葉
山寺の縁日朝の鐘透る
一流を海賊版がバラ撒いた
土砂降りが怒ったように家叩く
良く撮れた写真他人に見せたがる

鳥取県　松本よしえ

嘘だっていいから少し夢をみる
にぎやかな家もいつしか母ひとり
補聴器が悲しみばかり拾ってる
慰めの嘘をついても許されず
大勢の友いるようでひとりぼち

鳥取県　田村邦昭

悩み事朴葉で包む過疎の知恵
若者に心の過疎化深い闇
断層の逆鱗に触れ大地震
大山も爆発するか雲が変
薄氷ほどの情けや金利まで

鳥取県　谷口次男

捕まらぬように隠しておく尻尾
思い切り笑って今日を消化する
口を出た言葉千里を走り出す
チャンスだと見たら火の中水の中
ひと呼吸おいて言葉を整える

松江市　三島淞丘

松江市　川本畔

大切な人にも鍵は半開き
蹲けば土の匂いと負の形
七十のもしもはスリル「ウッフッフ」
葉がくれに笑っているよ風だろう
三分間待っておくれ歯を磨く

松江市　松本知恵子

安堵して水田に五月の顔映す
一大事見抜かれていた換気扇
手作りの愛の置き場所冷凍庫
予定には無いいたずらな通り雨
百年後ハーンのぺんは見抜いてた

松江市　佐野木みえ

アイリスの古代紫凛として
さすがだね島が沈むよ牡丹園
見上げてよなんじゃもんじゃの花が咲く
銀山の五百羅漢に会いに行く
仮面つけ覗いてみたい胸の内

松江市　安食友子

己の座エレベーターと似ています
此畜生急須の口が欠けちゃった
ドライブへ絵になる山が唆す
文に書く出雲弁にはシャッポ脱ぐ
天仰ぎ追想してるブルースよ

松江市　銭山昌枝

鉄線がお隣ばかり向いて咲く
両隣から届くぼた餅ざざえ飯
杖ついた影がゆらゆら従いて来る
誕生日遺言状を書き替える
不真面目に生きてストレス溜まらない

松江市　小川注湖

千鳥足チャイム問答鍵が開く
時々は回り道してわれを見る
舵は妻に任せ人生銀婚式
チンジャラこの音聞いてやめられぬ
レンタルであなたと寝てた夢を見た

雲南市　毛利幸

早乙女の紅のたすきが惑わせる
むっくりと芽生えが土を盛り上げる
もやもやの裏に本心隠される
悩みなどビールの泡で吹き飛ばす
盗み酒味を一層引き立てる

出雲市　森茂美

朝刊をとる玄関に伸ぶ日脚
美談には悲しい話ついている
逢う人に元気を貰う山の道
造船の町に冷たい月が出る
春の草負けちゃならぬと伸びる庭

出雲市　富田蘭水

未来派の新人風をよく通す
日の丸を立てず憲法論じてる
川幅に合った横隊鯉のぼり
長生きがしたく酒まで止めている
日に一度畑を見んと落ちつかず

出雲市　園山多賀子

時どきはロボットになり畏まる
老春と言う卒寿には艶がない
振り向くな亡夫の叱咤が温かい
花茗荷忘れ上手になって老い
卒寿なお未完の夢を追い続け

出雲市　竹治ちかし

落してはならない鍵を見失う
鍵穴を互いにのぞき合っている
ラッキーが過ぎると身内でももめる
生きている実感妻の小言聞く
今一度のろしを上げて出方見る

出雲市　小白金房子

当然の話こだわる老夫婦
眼裏に心許した遠い人
ひと言がはげしい女の八つ当り
名湯を巡る我が家の仕舞い風呂
手から手へ万札初夏の旅に出る

出雲市　持田多輝子

健康が取り柄リズムは崩すまい
日本の文化明治の手織り縞
割烹着似合う女にある気品
似合うかと猫に聞いてるネックレス
山の宿受けつぐ民話自在鍵

出雲市　石倉芙佐子

遠い森になんじゃもんじゃの花は咲き
人形のようにはならぬ白い薔薇
宇宙船私をおいてけぼりにして
泣かまほし貴方の風は何処に吹く
甘海老に目刺しの強いラブコール

出雲市　佐藤治代

牡丹見に行った話とおまんじゅう
元気よく育つ雛見る病みあがり
珍しい人に出逢った嬉しい日
ストレスが溜まりうつろな空掴む
言わないと決めてたはずの愚痴を吐く

出雲市　岸桂子

石段を登る青空近くなる
アリバイは暦の中に書いてある
病院の匂いをつけて家に着く
ストレスを流す名画を見て帰る
野良犬の尻尾は甘えなど持たぬ

鍵穴のむこうに母が居る安堵
子の帰郷心の鍵を開けて待つ
試供品私の肌が試される
春の陽を浴びてよちよち孫の試歩
ふる里で昔話をして帰る

出雲市　多久和　敬子

山の詩　謳う山の土になる
どの鍵も開けて聞きたい春の音
ジグザグの心を癒やす花筏
薫風に脱ぎ捨てていく迷いなど
早苗田に映す私の影法師

出雲市　小豆澤　歌子

なるほどね受取り方に十色あり
想像力たくましいから気が揉める
桃色の噂話にホッチキス
ありがたい十本の指よく動く
あの時の電話の声が最後とは

出雲市　伊藤　玲子

同じ音鳴らす母娘で鍵をもつ
たそがれて涙の色も淡くなる
裏表なくてわたしがにくめない
朝市の泥つき野菜買ってくる
笑わぬと一日損をしたような

出雲市　吉岡　きみえ

一軒おいた隣の人と馬が合い
頷いているが納得していない
有頂天まだ綻びに気が付かず
古書市でやっと見つけた初版本
頑張って一人で貼ったサロンパス

島根県　伊藤　寿美

世のためにできないことが老いの悔い
身に合うの生き方欲しい老いの夢
老眼鏡も柳誌の文字もちさくなり
健康法こまめにツボを押し始め
責任の有無無雑作な多数挙手

岡山市　井上　柳五郎

バーベキュー禁止もしかり花の寺
曲者と箒をとれば朝帰り
夫婦喧嘩姑不意に来てうろたえる
なにはさてタイムサービス遅れない
恥ずかしさ知って少女の大人びる

倉敷市　撰　喜子

絵手紙に花一杯の母達者
人情の溢れる句会老クラブ
夢と欲未だ捨て切れず喜寿の坂
万緑に喜寿の紡いだまり弾む
転ぶたび思いたくない事思う

真庭市　福嶋　智恵子

何気ない言葉の中にトゲがある
朗報も訃報も同じ耳で聴く
久々の雨に洗われ緑萌え
公約はだんだんうすれゆく怖さ
少子化に五月の空も淋しがり

真庭市　国米きくゑ

まん丸い地球に蹴躓くばかり
生き伸びる商法もある蔵ざらえ
お経より納得させる体験記
リハビリの教室優等生が居る
連休へ奥津足湯へ行ってくる

美作市　小林妻子

合鍵に心寄せ合う共稼ぎ
歩くだけ歩けば妙薬なる余生
新緑に歩幅も軽い万歩計
あちこちに名刺を配る下心
もっと知恵ほしくて辞書を繰っている

美作市　福原悦子

花暦ひとつ散らして春がゆく
あたためた夢の発芽を待っている
きな臭いニュースばかりがてんこもり
戸袋を開けると今日が満ちてくる
カチンコが鳴るひとり芝居の幕があく

美作市　大石あすなろ

行間にあふれるほどの愛と憎
寂しくはないかと覗くおぼろ月
自分史の終りを花の章として
悔いのない人生なんて絵空事
屑籠でうごめいている未完の詩

美作市　山本玉恵

カーネーション今年も赤を買うている
還暦の生かされている生きている
継続は力夫婦も松の木も
わたくしの歩幅で今日も歩き切る
暖冬へまず節水を志す

竹原市　岩本笑子

菜の花の真っ只中に生を受け
肚据えて向き合う命六十一
風向きは変る助走を怠らぬ
今生の名残りの舞いの花吹雪
魂に監視カメラを三つ二つ

竹原市　石原淑子

青い空ばかり書いてるクレヨン画
加減乗除脳に体操させてやる
手を入れぬ球根なのに咲いてみせ
履くことは無くとも並ぶ妻の靴
私のドラマいつまで続くかは未定

竹原市　時広一路

東広島市　福島万年

負けたのに国旗国歌もそのまんま
戦してまた負けるのか改憲論
起立　礼　国歌斉唱海ゆかば
点滴が一巡りして尿バッグ
美しい国年寄が笑わない

宇部市　平田実男

青いとは思っていない青リンゴ
条件のない条件に縛られる
美しい国は総理の夢の夢
顔パスが効いてた頃をなつかしむ
留置所のような所で喫うている

美祢市　安平次弘道

琴線にふれると夢が遠くなる
冬眠のうちに着きます小宇宙
どう準備しても戦は間に合わぬ
深い井戸の底にあるのは何だろか
いつからか毒を抜かれたのはわたし

松山市　宮尾みのり

ピラフなど邪道と嘆くコシヒカリ
ぼんやりもいい雲流れ風香る
好きだからあなたの水にすぐ馴染む
山懐へ抱かれに戻るのは男
計画は万全晴れを願うのみ

松山市　古手川光

図書館へ時どき行って昼寝する
おーいお茶堂堂と言う自販機へ
錯覚じゃないです方向音痴です
またかいな私を嗤う広辞苑
雨予報当り予報士ほっとする

大洲市　中居善信

山並みも田畑も変化無く過疎化
洗っても洗っても指土匂う
阿吽とは小さな息も見逃さん
空蝉のあれはまぼろし燃えた夏
俺は俺手こずる男ではあるな

西予市　黒田茂代

春一番ショールそろそろ薄物に
春の地図拡げて夢を追う旅に
花の旅三日心も桜色
神々の山実感アルプスの雪景
薔薇が真っ盛りわたしの誕生日

東かがわ市　清川玲子

人情は人一倍を持つ頑固
あこや貝と運命共にする絆
七癖をそっくりついでいく絆
鬼づらの裏の素顔がやさしすぎ
取り柄ない人が持ってたいい素顔

しくじりの中から明日の夢拾う
好きだからいつも貴男にイケズする
欲の穴掘れば掘るほど深くなる
一堂に笑顔が揃う五〇〇号（おっぱこ吟社会報五〇〇号）
母逝って錆びて動かぬ父の貨車

東かがわ市　川崎　ひかり

美しい国だが人の住みにくし
風速四〇招かざる夜の訪問者
遺憾だと言えば日本事もなし
年金で四角四面という暮し
口惜しさは一瞬のこと冷凍魚

東かがわ市　神保　坊太郎

血のめぐり良くするケンカして夫婦
腹八分こころ豊かに食べている
大腿骨頸部骨折九十五
九十五騒いで部屋を追い出され
老母手術姉妹の予定皆狂う

東かがわ市　池内　かおり

ケイタイに妻の視線がつきまとう
生きる術鈍感力が見直され
思い切り呑ませ本心たしかめる
叱るより優しい言葉ものを言う
くれなずむ空に流るる千の風

東かがわ市　伊勢　八重子

優しさは修羅をくぐって来た強さ
合併が伝統文化の姿かえ
ゴミ分別寝込んだ妻に聞いて出す
生きてきた過去に一つの染みがある
弱点を上手く突いてる言葉尻

東かがわ市　原　賢

野心家の話黙って聞いている
まだまだの元気を笑う傍観者
雑音を拾い心が病んでいる
追い風が止んだ時こそ正念場
牡丹満開大根島のあでやかさ

高知市　小川　てるみ

親の役目終った頃は粗大ゴミ
よさこいの本場の熱気原宿へ
千枚田千の命の風が吹く
夕茜赤い夕日の満州を
弟よもう母さんに会えたかね

高知県　赤川　菊野

沖縄の海は青くて哀しすぎ
生きているただ生きている朝の膳
遠慮して生まれたように障害児
ぼろぼろの手帳と話す老いの部屋
破局にはさせぬ子どものやさしい瞳

高知県　小澤　幸泉

唐津市　宗　水笑

選別をされた真珠にまじる屑
ライバルの出世に拍手する度量
ゴキブリに走り負けする老いの脚
憎まれ役仮面を脱げば笑い皺
美人の湯美人はあまり見かけない

唐津市　井上勝視

妻の側安心をして酔うている
婦唱夫随洗いものから慣らされる
明るくて達者が宝紅生姜
旧悪の時効を妻は認めない
落ち込めば妻が一本つけてくれ

唐津市　坂本蜂朗

妻と母両手に提げて弥次郎兵衛
お見合いの度にハードル高くなる
振り向いてくれぬセクハラだと思う
グリーンから少し外してみせる技
お祭りは見ずに地酒を褒めてくる

唐津市　樋口輝夫

拉致の子よ帰れと祈る老いた母
アルコール好きだと知った式のあと
威勢よくお肩を叩く子の打算
見ないふり出来ず奥歯を噛む男
命懸け仕事しますと赤い嘘

唐津市　山口高明

飢餓の子へ届かぬ支援赤い国
千日の功徳授かる鈴鳴らす
友人の義肢に合わせる坂の道
自殺する名所も流行廃りあり
学業も一時中断離着音

唐津市　市丸晴翠

省エネに役立つ祖母の知恵袋
アンテナの錆を落としに美術展
背伸びして川柳仲間と肩を組む
ぽっくりと行けるのはどれ阿弥陀籤
杉の子は育ってからも世話が焼け

熊本市　永田俊子

反論が出来ない貧血のわたし
慎重派途中下車して考える
カード無用石橋叩く戦前派
メーデーに蟻も歌うか労働歌
マンション林立活断層の苦笑い

熊本県　高野宵草

失敗を未然に避けた神の加護
落ち着かぬ夕餉モゾモゾする禁酒
肩の荷が降りて今宵は眠くなる
やっと咲く牡丹狙った雨の神
護憲してやりたいやがて逝く身でも

熊本県　岩切康子

四月雪青空に映える阿蘇の嶺
罪のない草に良し悪し畑仕事
少しでも新地を好む葱移植
黄砂曇り夫の空咳気にかかる
眼の疲れこの新緑で取り戻そ

シドニー　坂上のり子

ああ九条悲劇の歴史忘れたか
日本人の哀しさ忘れ易い癖
鶴彬の苦痛じわじわ押し寄せる
正座出来るかどうかが今日のバロメーター
英語浴びちょっとおじ気ていた昔

砂川市　大橋政良

青嵐草のうねりを呑んでゆく
平凡な暮らしにもある虚と実と
風を踏み火を踏み修羅場きりぬける
合掌の手のひらに描く未完の絵
無視された目が脳裏から離れない

弘前市　福士慕情

春だ春だと雪の下から福寿草
マンサクが目覚めて山はホッとする
ウグイスの初声を聴く岩魚釣り
風薫る野山に蛇のいる怖さ
生い立ちを伏せておきたい揚羽蝶

弘前市　須郷井蛙

朝夕の散歩健康器に優る
リモコンの母が一家を取り仕切る
赤字でもボーナスしっかり公務員
これからは節約本がよく売れる
次々といじめ法案出してくる

弘前市　櫻庭順風

地図を手に探し探して亡父と会う
藪拓く大事に使う形見分け
藪拓くサラリーマンの向こう見ず
藪拓く鋸と鋏の無鉄砲
藪拓く休日なんてあるものか

弘前市　今愁女

渋滞を呼んだ桜花も幕を閉じ
さみだれに読書も飽いた午後の鬱
なめくじの所かまわず梅雨あがる
紺から白登校の子等も衣更え
絵画展おとこは裸婦画観て飽かず

弘前市　岡本花匠

春もみじ五体和らぎ闊歩する
約束へ妻の身支度急ぐ朝
庭に雉あら珍しや好奇の瞳
廃車してバスやタクシー頼る脚
性悪を背負う凡夫の神頼み

考える前に進んでいる手酌
トラブルは減農薬と手抜きミス
失敗の裏には慣れと言う油断
食前の散歩疑問のダイエット
立ち直るまでは驕りに気付かない

弘前市　相馬銀波

今朝もまた墨塗りしたい記事を読む
この指に止まれとんぼも倖せも
過去形にどっぷり浸る同窓会
過去形の一番さきにあるめんこ
試着室自己陶酔の貌になる

黒石市　佐藤古拙

いい話タンスの中へしまい込む
強くなれ耐えて生きよと教えられ
いい笑顔元気と勇気与えます
憧れた自由を古希が持て余し
性格が飼い主に似るペット犬

十和田市　阿部進

転がるだけの人生が好きになる
うつ病になっていたのが午後の雨
喉元で遊んでいます花言葉
おむすびは三角になり転げない
このへんで句読点を打つ還暦

平川市　小寺花峯

無理をせず生きる信条花に負け
花に生きる何より楽し老いの日々
団塊で老人会が活気づく
老人会花作る友ふえ始め
街路樹の根元何時でも花で埋め

さいたま市　八田敏

多数決正解なんてありゃしない
出不精も話題は尽きぬ長電話
完走を目前にして気の迷い
借金を国債として言い変える
捨て石に大事なヒント隠れてた

さいたま市　星野育子

ストローの帽子に風が頬を撫で
風呂敷に感心されるマイバッグ
時差ボケを敗因にする第三者
独り棲む母口ずさむ数え歌
隣席の香水思考を鈍らせる

日高市　根岸方子

掃除機がごろ寝の夫追いかける
柵に耐えた奥歯が抜けていく
公園のデート藪蚊に攻められる
白黒をつけて戻れぬ位置にいる
無意識な言葉に本音浮遊する

柏市　河野桃葉

カタログに弱い財布の紐締める
初心者へすぐ返事来るEメール
フルタイムでも母さんはパート給
竹すだれ今年も下げて見飽きない
根は同じ特攻隊と自爆テロ

柏市　永峰宣子

六協議譲り合わねば纏まらず
機器疲労鉄にも寿命あると知り
キヨスクが消えて早起き家で飯
風邪引いてとうとうやめた蛍族
特待生抜けて高校野球らし

佐倉市　岡井やすお

助走力つけに若葉の旅に出る
嫁入りに和英辞典と聖書連れ
六十の手習いカメで良しとする
中吊りの芸能ニュース目を凝らし
原油高活躍してる足温器

東京都　長谷川康子

ひとりぶん炊くブランドの米を選り
綺麗ごととても本音と受けとれぬ
多機能のミシンが使いこなせない
痩せたのはいいがズボンの裾を踏み
気を貰う安い小さい薔薇だけど

東京都　岸野あやめ

向日葵の横を通れば皆笑顔
新緑は風の強さをまだ知らず
頷いて聞いてる母が老いてゆく
足が地に着いた頃には下り坂
二番手でいるからまわりよく見える

東京都　清原悦子

薬草教室の先生駄洒落ずき
薬草園なんじゃもんじゃの花ざかり
南国の花果物のよう垂れる
趣味三つ抱えて今を旬にする
一夜干ししたら話が読めそうで

東京都　小川賀世子

飽食のペットメタボの仲間入り
酔った振り憂さの限りをぶちまける
渋滞を追い越してゆく万歩計
禁煙を時々止めて生き返る
取敢えず薬を処方して名医

国分寺市　野崎勝

柏餅五つ　子供の声がない
ジャガイモの花にもとまる揚羽蝶
ポリシーのない毒舌に苛まれ
つくづくと心は毀れものである
好きなことしたか出来たか陽が沈む

八王子市　播本充子

心して何度も読んだバカの壁
孫曽孫より今は白髪の子がいとし
親バカですの孫の十人みな善い子
娘は六十路親の三倍まわる口
かわいい片言さっぱり分らん初曽孫

武蔵野市　亀井円女

切り返す言葉などない母の言
時々は敬遠される几帳面
不器用でいつもの通り正攻法
ハンカチの効果神宮ほくそ笑む
根性論唱え教育するコーチ

横浜市　菊地政勝

タイミング回転ドアはむずかしい
女とはまた学びます処方箋
家にいてケイタイいつもオフばかり
買って来ちゃぁ先送りする冷蔵庫
雪の壁氷雨がヒトを寄せつけず（室堂ツアー）

横浜市　小野句多留

菜園のよろこび土や陽と遊ぶ
ばあちゃんをほろりとさせる肩たたき
あの世はこの世彼岸へ小さい善を積む
千の風に救われながら今日も無事
閉じられた改札エイッと通り抜け

富山市　島ひかる

おやつには煮干を食べることにする
一輪のバラに華やぐ台所
単身もいいなと思うこともある
いつだって若いつもりのスニーカー
国産の安心を買う夏野菜

可児市　板山まみ子

待望の連休まずは掃除から
子と孫と少し異国へリフレッシュ
病院の待ち合い我慢我慢のみ
門扉付け孫の脱出防止策
新人が雰囲気変える職場内

可児市　鶴留百合

昔から格差はあった小作人
どの写真見ても笑わぬ父の顔
母の日は回転寿司の皿の数
帽子だけ増えた夫の定年後
まだ若いエレベーターを待てぬ足

犬山市　関本かつ子

一分の介護息子の腕で逝き
春爛漫弥陀に抱かれて姉が逝く
虚しさへ脱毛症という証
青い空やっぱり弾む苺畑
マッサージ受けて草取りまたしゃがみ

犬山市　吉田幸子

犬山市　金子美千代

良くなった証拠憎まれ口たたき
男とは手のかかるもの毛布掛け
大好きな五月私の誕生日
三駅を新車のペダル風を切り
寝転んだ草のクッション鬱が飛び

静岡県　薗田獏沓

介護する母に光はやわらかい
ぶらんこを一生懸命影と漕ぐ
母の文またも短かし花菜漬
どん底に耐えて愛しい子が育つ
健康美男仕立てのシャツを着て

尾張旭市　三浦きぬ

一芸に秀でて終わる人眩し
身辺の整理出来ないまま逝きそう
知らぬ顔ばかり一票どうしよう
愛猫のトラは出窓をひとりじめ
亡夫の名を呼べば少うし若返る

京都市　高島啓子

カレーお代わり五月病など知りません
古本市売るほどあるが買ってくる
形から入りなんとか様になる
かまきりの姿有事に備えてる
異性には少し姿勢が甘くなる

京都市　桝本宏子

全快は望まぬ老化現象だ
いたずらももみじの手なら許しとこ
平和惚け後ろ姿は隙だらけ
冗舌なり女が嘘を通す時
セールスマン無口ですごす休息日

京都市　三宅満子

団塊の年金族が闊歩する
また一つきらめく星が天界へ（正坊さんへ）
朝日には隠し事など出来ません
老眼鏡かけたら見ない顔のシワ
トラパレード五条通りであったらな

京都市　西村益子

子が来ると母はいそいそ肉買いに
定年の夫違った人に見え
同い年とわかり長引く立ち話
青空と風で歩いた駅ふたつ
雑草もご縁と思う花盛り

亀岡市　井上森生

童心の自分に逢える旅を練る
万緑の生きる力に包まれる
いつまでも若い熱中が出来るから
生き活きて果ては宇宙の塵となる
感動が生まれるように精一杯

長岡京市　山田葉子

ときめいてコップの中で揺れている
亡夫からの宿題がまだみつからぬ
不義理することにも慣れて梅雨明ける
穏やかな海に突然叛かれる
耳打ちの秘密花粉となって飛ぶ

大阪市　神夏磯典子

レーダーにお喋り雀ひっかかり
百均の器に見えぬ活造り
何食べてはるのか艶のお坊さん
長寿を喜んでいるのは鍼灸師
錯覚の時間を伸ばすうまい酒

大阪市　前たもつ

お別れはとても寂しい知恵袋（正坊氏を悼む　3句）
斯くあるべし正坊さんに教えられ
正坊さんきっと宿題やり遂げる
王監督ガムなどかんだことがない
人間の真似上手になって喜寿が来る

大阪市　谷口義

カルチャーは姿を変えて参ります
年金で暮らしているという姿勢
古くてもうちのミシンは立っている
立話家に入ってけつまずき
フランスパンだけ立っているパン屋さん

大阪市　川久保睦子

ロゼワイン飾りの言葉いりません
シクラメン季節はずれに一つ咲く
どんな風も好きです赤いイヤリング
マンションに裏口もなくノンキャリア
代役に主役が食われ失語症

大阪市　古今堂蕉子

駅にいる迎えに来いと酔うた人
買う前に相談せよと妻の言
立ってたら使われるので寝転んだ
顔でなく度胸で勝負する私
化粧して鏡に一寸様子する

大阪市　川端一歩

師の百句写して重いなと思う
葉桜になった古木がまた綺麗
弱いなァうまい話に耳が立つ
あじさいの押し花添えてある手紙
誤字脱字正坊さんに叱られる

大阪市　鶴田遠野

肩書きだけは栄転にして左遷
シャッター通り繁栄の錆ついたまま
思い知る夜の長さよ休肝日
認知症親しき人が名を尋ね
還暦になって踏み出す未知の国

大阪市　川原章久

湯三昧八十路手を取るフルムーン
釣り馬鹿を呼ぶ声選ぶ海の風
駆け込み寺ＤＶセンター有りまっせ
欠伸する後発薬の処方せん
ゴミの山烏アホーと鳴いて飛ぶ

大阪市　岩崎公誠

独学で鳥もトンボも空を飛ぶ
未練などさらさらないという未練
耳痒い億円くじをぱっと買う
蓋開けて覗くと知恵は空だった
大方はただの客のせ昼のバス

大阪市　小谷集一

親馬鹿の顔が一番僕らしい
よく笑う人へ幸せ降って来る
売り言葉まあるく返す買い言葉
笑わせるネタを仕込んで行く見舞い
立て板に水反論を押し流す

大阪市　小糸昭子

時間ですヘルパーさんも私もホッ
かしこくも昭和天皇本音が出
足の上猫はふとんで横に寝る
天才と努力家最後は五分と五分
煮え切らぬ返事にカッとする悪女

大阪市　松尾柳右子

愛こめて犬の訓練励む女
せせらぎの聞える宿に癒やされる
祝日の電車賑やか若い声
家族連れ多い公園五月晴
空豆に幼き日々が甦る

大阪市　津守なぎさ

動かずに一日暮れる本の虫
その内が口癖になる重い腰
いくつでもかすかな風にゆれる恋
老春をかすかにゆする風がある
満開のつつじが路地をぬりかえる

大阪市　渡部さと美

孫の手紙返事に困るきれいな字
お笑い下さい足引きずって夢を追い
旅帰り母に嬉しいふき　えんど
見上げると疲れをいやす藤ゆれる
母の日は品替え好きなプレゼント

大阪市　清水絹子

豆御飯満面笑みの帰国の子
嫁の立場思えば無理も言いにくい
温暖化日ごと列島脅かす
美術展三度巡りも独り来て
うとうととしても寝てない子の帰り

大阪市　津村志華子

真夜中は月もうとうとしはじめる
バーゲンで宝探しの顔になり
ゴミの日は溜めた不満も捨ててます
さんざんに貶して値切る強かさ
ストレスがガリガリ飴を噛んでます

大阪市　小泉ひさ乃

杖頼るふたり夢見る世界地図
風をよみ頷くだけの会議室
酒好きにほどほどにとは無理なこと
五十年ずっと愛した訳じゃない
バッシング耐える自信がついてくる

大阪市　近藤正

イラク戦仕掛けた側がガタガタに
正坊さん引き受けました彬の碑（正坊さんの死を悼む）
年寄りをまだいじめるか市民税
美しい国に寄り添うイージス艦
九条はそう易易と変わらない

大阪市　大川桃花

頼り無い柱で子等がたくましい
社長室粗末な椅子にある初心
おいしい水戴く森の贈り物
五百羅漢笑っているのはきっと母
杉木立天を支えているように

大阪市　奥村五月

風あたり避けて横向く風見鶏
子にすがり入るお風呂に涙ぐむ
麻酔とけて後は気になる手術代
好景気やっとニートにサヨウナラ
取りあえずチラシが決めるお献立

大阪市　岡本久峰

生かされているなと思う五月晴れ
振り込め詐欺いつまでつづくぬかるみぞ
うるさ型に先手を打って黙らせる
お隣さん自由の空気どないどす
死にぞこない書きたいことがたんとある

大阪市　井丸昌紀

生きてる証し頭ズキズキ
午後六時上司なかなか帰らない
体重計試しにそっと片足で
年毎に内緒にしたい事が増え
浴びるほど飲んでも消えぬわだかまり

大阪市　福岡末吉

気を貰う元気はつらつ影法師
背を撫でる仮寝の妻の愛おしく
人間味溢れることば胸をつく
三枝の礼繁昌亭に光さす
夫婦船手を取り支えつ未来（あす）へ発つ

大阪市　中村叡子

特待生親が自慢の宝の子
辞書調べ鉛筆持つ間もう忘れ
これでもか値下げ通販追いかける
京町屋通り抜けする長い路地
紫陽花が葉先ぎっしり蕾蓄め

大阪市　池上清治

知り人にとんと会わない里の駅
義理悪い人に出くわす朝の駅
国宝の匠の技に目を見張り
優先席読めないヤング座ってる
一桁の足し算で脳活性化

大阪市　榎本舞夢

まだ役に立って居ります古女房
札束に埋もれよろこぶ白昼夢
スマートに老後生き方変えて見る
同窓会メイクをがらり変えてゆく
見られてるなんて知らずに裸婦になる

大阪市　伊藤博仁

おいしいで済むリポートに手を上げる
鍋料理の本読んでたら夏がきた
黄砂症と言われぬ前にマスクする
鼻歌のでかさにそっとあたり見る
せっかちが埋め戻してる鉢のゆり

大阪市　星野きらり

脇役で我慢しなさいカスミ草
ていねいに継ぎ当ててます古い辞書
母の日よ老いても嬉しカーネーション
朝歩き会釈を交わすにっこりと
踏まれてもタンポポの意地アスファルト

大阪市　升成好

力にはなれぬ話を聞く辛さ
先人の知恵だと思う二十四気
減るものでないほほ笑みを出し惜しみ
口数も減らして欲しいダイエット
聞く耳をもって話に花が咲き

大阪市　熊代菜月

花畠空から今日も訪問者
糸桜天より垂れている如く
アリ達の訪問受ける母の墓
山坂をいくつ越えたか夫婦道
火遊びの夫にお灸すえた頃

大阪市　榎本日の出

親を越し遠く離れてゆくパワー
集まって来たのはみんな年配者
元気ならひとり暮しで天下取る
虎の子を甘い言葉が持ってゆく
森林浴すればなぜだかホッとする

貴方とならば茨の道も怖くない
フルムーン夫は遠い人となり
銀行に足も遠のく預金高
父の座に猫が寝そべる春日和
追伸に母の愛情滲み出る

大阪市　西川更紗

五感萎え第六感が冴えて来る
山開発故郷の川は病んでいる
ふさぐ人励ましに行き励まされ
戒めの母の言葉に血が通う
こだわりを捨ておおらか天仰ぐ

大阪市　中村れんげ

身の老いに合わせカロリー微調整
急激な変化鏡が老いていく
あすのためするべきことがこんなにも
梅雨寒の晴れ間に届くサクランボ
宵やみに心ゆるめる月見草

池田市　栗田久子

つい口が滑ってしまった立話
孫一人増えそう予算立て直す
入学の孫を上座にする夕餉
おみくじに出ていたチャンス今かしら
噂など気にせず真赤な紅を引く

和泉市　横山捷也

年金の歩幅が軽い青い空
肩書きを外す団塊族の朝
心配も愚痴も無いまま日向ぼこ
数え唄ふる里遠き母の墓
窓際の温さは老いの宝物

和泉市　西岡洛酔

たらればの夢で凡人生きている
イエスノー言えハイだけじゃ分からない
もったいないもったいないで戦前派
オリジナル料理なるほど旨くない
金釘流いいえ独創的ですよ

泉佐野市　山本蛙城

病人が笑い安心して帰り
悲しみを乗り越えて来たい笑顔
泣き言は言わず背中で堪えている
かたまった脳でヒントが浮かばない
前向きに行こうと決めた誕生日

大阪狭山市　矢野梓

負け将棋酒に溶かしてから帰る
三浪は絶対阻止の窓明かり
孫帰る風呂場に玩具浮いたまま
読むつもりばかりの本が並ぶ棚
夜食くる頃だマンガは仕舞い込む

茨木市　藤井正雄

交野市　森本弘風

森林浴毛虫ぶらぶら道ふさぐ
お向かいのミニの生足まぶしすぎ
譲られて歳思い知るどっこいしょ
減量へ協力してる妻の留守
独り居の母は頑固でわからず屋

交野市　山川日出子

亥の秋にロボオーケストラのデビュー待つ
百年も寺庭で咲くさるすべり
青い目が足湯で笑う道の駅
グライダーうまくとんだらアドレナリン
侘しいな気象用語の宵消える

交野市　田岡九好

女房の助手で生きんと思いたり
本を捨てながら心に死後の見栄
辛抱が切れてモナリザ高笑い
息子の目ぼけていぬかと見ている目
薄皮を重ねるように黄昏れる

河内長野市　山岡冨美子

蝋燭はひかえめにする誕生日
怖いものなくなり怖くなる自分
自分より他人を疑いがくぜんと
物差しをその都度変えてゆく乱世
処方箋ふえていとしくなる命

河内長野市　坂上淳司

格安券シドニー往復二万円（シドニーひとり旅）
シドニーの四月爽やか秋の風
北側に窓庭わかるけど不思議
日曜日休む電車に泡を食う
踏台が欲しい男性用トイレ

河内長野市　植村喜代

行けるまで元気で行く気同窓会
母思うとき手作りの柏餅
毎日毎日見ているだけの岩湧山
赤ちゃんの一歩一歩に夢がある
老人は一歩一歩で元気出る

河内長野市　村上直樹

朝な夕な水車のような母だった
帰巣本能バタンキューでも妻の許
風さやか雲雀も恋のジャズダンス
一キロも減って小躍り二キロ食べ
いい目覚め神がチャンスをまたひとつ

河内長野市　水谷正子

汗なくて貰う年金すぐに消え
水ぐるま回り早苗に活入れる
葡萄取る姉さん被り皆美人
解説者気の毒虎がまた打たれ
色褪せた旗翻る売れぬ家

河内長野市　井上喜酔

連休はみどりの風に疲れ切り
仲直り握手をしても腹見せず
土性骨温和な胸の奥に秘め
藤棚の初夏の香りへ深呼吸
チャンスには張り子の虎で情けない

岸和田市　岩佐ダン吉

共に泣く友がひとりは居てくれる
やんわりと言えば話はよく通る
安っぽい笑いふりまくバラエティー
雑踏の中でひとりの旗上げる
お天道さん見てると母が小煩い

岸和田市　井伊東吉

新緑に明日の活力貰い受け
連休の皺寄せどっと月末に
どっと来てさっと引揚ぐ核家族
ひとつ済みひとつ忘れる歳となる
上着シャツズボンの外へ出せと孫

岸和田市　雪本珠子

まな板のリズムでわかる朝の顔
一病とひと日ひと日を大切に
川柳と出合い人間大好きに
さよならをするたび脱皮するわたし
愛猫も診察券を持っている

岸和田市　小島笑司

日傘さす母の背に降る蝉時雨
公園の体操済んで蝉時雨
終戦を蘇らせる蝉時雨
孫たちが氷頬張る蝉時雨
タイガース勝とが負けよが蝉時雨

岸和田市　原さよ子

草餅を仏と分けて三時のお茶
お人好し胸襟ひらきすぎた悔い
ボケ防止骨身おしまずボランティア
連休へ結局母が残ってる
年金が泣く三月ののし袋

岸和田市　森元ふみよ

梅雨寒に綿入甚平亡母の香が
国際化ハゲタカファンド牙を研ぐ
武士道が姿を消して銃闊歩
自衛官国秘洩らして首飛ばず
十八歳肉体成魚あたま稚魚

岸和田市　堤楢代

欲捨てたつもりやっぱり比べてる
連休はなんだか尻が落着かず
飼主に似てきて犬も花粉症
好き勝手暮してなにかもの足らず
燃える事ないかと探す老いひとり

岸和田市　土橋房枝

母さんの鈍感力に愛がある
やわらかい母の諭しに逆らえず
いつまでも心に残る受けた愛
花を愛で今日一日は心満つ
犬の名で挨拶仕合う散歩みち

堺市　村上玄也

厳めしい顔強そうで淋しそう
礼儀正しい学童に会う田圃道
苦労した過去偲ばせるお人柄
知らぬうち監視カメラに覗かれる
裏金はないがへそくりある我が家

堺市　加島由一

サラダ誉め一気飲みする発泡酒
プレハブは風の言葉をよく聞ける
寂聴に笑って生きる勇気わく
医者になれ弁護士になれ塾へ行け
カバン持ち赤絨毯を夢にみる

堺市　和田つづや

とっくりの二本こんなに癒される
百色のこころで人と交ろう
不器用が不器用なりの群れの中
人の腹読めない僕が腹黒い
つれあいの琴線どんな音だろう

堺市　西村りつえ

初対面響き合いそで買い被り
新緑のパワー頂く薬づけ
カーネーション嫁から届き絆しめ
お笑いの狙った受けがこけている
社運かけCM競う夏の陣

堺市　山本半銭

花に酔い人にも酔うて春惜しむ
花の里花の苗木がよく売れる
湧き水の滴り落ちる間の祈り
レモンリーフ仏花に添えて偲びけり
診察券自慢するほど持っている

堺市　柿花和夫

心にも補助食品が欲しくなる
帰るとこあるから飛べる渡り鳥
地上波のために細ぼそ溜めている
宝刀があくびしながら出番待つ
ドジやけどアンタらしいと励まされ

堺市　矢倉五月

CMの罠にシミ皺また嵌り
ぼろくそに叱られついて行くと決め
教科書で無くてマンガが出た鞄
送り出す玄関先でまだしゃべり
読み返しまた励ましを貰ろた本

堺市　奥　時雄

美人辞め趣味の教室遠ざかる
カタカナで意味も業種もわからない
弁護士は正義に悖ることも言い
ドキドキとする外国のエアポート
船旅で恋しくなった散歩道

堺市　源田　八千代

新名所美多彌神社に文学碑
仲人の句碑堂々と宮の杜
句碑移す集いで土地の歴史知る
輪唱の乙女の頃や若葉風
みどり児の笑みふくよかに初節句

堺市　志田　千代

三猿はもう守らないことにする
売れ残りのりんごせっせと磨かれる
頬ずりをしたら子猫がひっかいた
励ましがいつか小言になっている
欲しくない顔してティッシュもらってる

堺市　宮本　かりん

上機嫌のわたしへアホーと鳴く烏
乗りこえたらしい屈託ない笑顔
いつまでの命か預金出し惜しみ
ジャンケンに負けて勝ち取る残り福
誉めようがなくて不思議な味ですな

四條畷市　吉岡　修

日没に五体のばした山の影
ゆるやかな語りに心ほぐされる
穴ぐらの王に桂馬の飛び道具
生放送生放送と言いたてる
鏡面は伏せて神獣磨いてる

吹田市　山本　希久子

誤解とけて雨のち晴れの現在地
第二の人生探るパソコンを開く
認知症の母に喜怒哀楽があり
目立たない席居眠りにちょうど良い
これからを生き抜くオリジナルプラン

吹田市　瀬戸　まさよ

夕日の美何万回だが見飽きない
妻だけはパパと呼びますこのぼくを
姑のコーラス嫁も英会話
退屈と連れ立って行く喫茶店
もらい泣き気が晴れました映画館

吹田市　太田　昭

ぐうたらな男鼻毛を抜きもせず
わが家の地図そろそろ持てと妻が言う
死んだ気になれず生きた気にもなれず
逆らえば妻は他人の貌になる
薔薇の字を書ける私は惚けて無い

正論で煮ても焼いても食えぬ国
入院で妻の優しさ垣間見る
病室を覗かないでよ烏たち
そうですね言うて窺う妻の顔
向かい合う美人の欠伸貰います

吹田市　野下之男

諦める覚悟を決めた青い空
頬撫でる風に幸せ思いつつ
最後まで悔い残るので手は抜けぬ
ゆきずりの風とおしゃべりしたくなる
ひと色をたしてすこうし玉光る

吹田市　大谷篤子

診察と言ってもパソコン打つばかり
触診は一切なしで画像のみ
聴診器要らないらしい新医療
疑いを微塵も抱かず割る卵
花の種蒔いて余生の彩りに

吹田市　須磨活恵

美しい国にと先ずは塵拾う
みどりの日草の命を取る畑
心にもサプリメントを振り掛ける
美しく老いる勉強ならしたい
条件を並べ過ぎてる適齢期

吹田市　木下敏子

料理から皿まで食むか魯山人
夜行列車ロマンチックでいいが無理
ジョークだと思うでしょうがこれ本音
バラのアーチくぐりあなたに逢いに行く
読む人のいない日記だ焼きすてる

高石市　浅野房子

草笛を吹くと子どもら覗き込む
腰痛へもっと歩けと医者が言う
追い風を待ちくたびれたシャボン玉
青春の熱気を部屋に置き嫁ぐ
表面はしっくり家庭内別居

高槻市　井上照子

サングラスかけて美人の真似をする
坂道は辛いがバス停その向こう
コーラスの輪の端にいる背伸びして
おトイレも楽しい風呂も恐くなる
けちんぼの兄もかかったうまい詐欺

高槻市　左右田泰雄

独り者に当ったペアの招待券
カーテンを開けて眩しい朝寝ぼう
痛いとこ突かれとっさに話題替え
キムチ鍋温め直して帰り待つ
何の木か気にしたこともない並木

高槻市　富田美義

面倒を見すぎ鏡も疲れ果て
生傷の絶えぬ夫婦にある歴史
かすかなる殺気ただようフルムーン
どうでも良いことがゆっくり忍びよる
意地悪な風に鏡を覗かれる

高槻市　乙倉武史

美しいお国づくりの魁に
飛鳥美人化粧直しに十余年
迷い込んだ蠅一匹を追い回し
運動は適度に疲労せぬように
年寄りの冷や水無視をされている

高槻市　執行稲子

君が代が好き私のお国です
濃い色のルージュに理性つぶされる
思いやり欠けていたのか眼がきつい
贔屓目が国産を愛で血も騒ぐ
がっくりと肩落すのは親のエゴ

高槻市　佐甲昭二

あいまいな話がはずむ日向ぼこ
危なげなボールをかわす処世術
それからの話が弾む回り道
ときめきをサプリメントにして生きる
斬られ役上手に倒れ盛りあげる

高槻市　生田義一

花の下旧友と手をとり無事祝う
花吹雪無情の黄砂にさえぎられ
後十年生きていたいねこのままで
手を上げて笑顔でおじぎ散歩道
負けがこみ六甲おろしもしめりがち

高槻市　峯村勲弘

手拍子を取ると顔まで綻びる
片言でジージと呼ばれほいほいと
居酒屋で愚痴を飲み干す平社員
目立たないように諭吉を透かし見る
貧乏性貸したお金は忘れない

高槻市　傍島克治

はらはらと歩き始めた孫を追う
今日もまたど忘れごっこ老夫婦
口下手で真実までも嘘にされ
喜寿も過ぎ仮面が重くなってきた
賽銭はやっぱりはずむべきだった

高槻市　杉本義昭

良心のとがめる音で目が覚める
勝敗の妥協許さぬ白い線
生命線伸ばしどっこい生きている
淋しい日字数が倍になる日記
繁昌のいつも反対側にいる

高槻市　大崎侑子

お愛想の作り笑いはお手のもの
東京駅一人まごまご田舎者
美しい国にちらちら銃の影
無人駅コスモス咲いてゴミは無し
作り手の魂秘める古陶磁器

豊中市　藤井則彦

マニュアルの作り笑いに会釈する
折角のヤル気が萎える但し書
駅伝の襷に籠もるチーム愛
じいちゃん似と言われ迷惑そうな顔
積ん読の背表紙にまた睨まれる

豊中市　江見見清

待合室みな立ち上がる呱呱の声
孫叱る子へ一言を我慢する
美容院に行った行事があるらしい
ネクタイを締める日いつも悲しい日
アメリカ人いつか誰かを撃つのかな

豊中市　山門タミ

頑張ってなだめすかせどきかぬ足
神様は同じ人相造らない
後遺症右も左も耐えている
カレンダー私だけの暗号符
終焉の予定は未定生かされて

豊中市　水野黒兎

花粉症むかしは杉も愛された
ライバルをほめて大人へ脱皮する
竹とんぼ昭和の空を探す旅
バス停へ走ったあげく回送車
祭果てヨーヨーもはや弾まない

豊中市　岸田知香子

お針箱ミシン離せぬ八十路坂
雲隠れしたい行先物色中
日差し延びされども遊ぶ子姿なし
目に青葉竹の子木の芽旬の味
ネクタイを嫌い地下足袋長靴派

富田林市　藤田泰子

スローライフ時計を少し遅らせる
語尾少し上っています低気圧
趣味五つ五つの貌を持っている
勝っても負けても気分が悪い勝負ごと
人任せ信じた私がアホやった

富田林市　中井アキ

内装は嫁の好みに変えられる
公園のベンチで花とにぎりめし
お若いと言われ無理する昨日今日
争いが嫌で一目散に逃げる
連休にアリバイのない独り住み

富田林市　稲川恵勇

香水の罠にはまって山を売り
ロボットに仕事とられて青テント
怒られてなんぼと胸に言い聞かせ
返り咲く夢ふくらますコップ酒
正論の頬なでにくる袖の下

富田林市　片岡智恵子

老成した大人と自負し生きている
青信号決して油断しなさるな
発覚しない献金の袖あまた
洗濯機回して今日も風に乗る
九条を揺さぶる核の灰の影

富田林市　池森子

スキップをしながら春は去ってゆく
納税の義務に年金追われてる
響き合うのに時間がかかる笛太鼓
妻が逝く僕のその後が狂い出す
病名は語らず知らず逝った父

富田林市　大橋鐘造

真っ直ぐな道を歩いて来て迷う
二の舞に疲れた仮面干してある
生きている証に旨い飯と酒
血圧を美人ナースが上げにくる
ど忘れを武器にまあるく生きている

寝屋川市　江口度

出て来ないベルへ文句を言いつづけ
良いことばかり考えているお父さん
弟から手紙返事をすぐに出す
靴下を穿いたら出先忘れてた
考えること多く煙草に火をつける

寝屋川市　平松かすみ

コマーシャル若くなりますなぞり書き
頑固者同士で一歩譲れない
雀にも恵んでやろうお仏飯
コンビニのレジ唇にピアスして
ジェットコースター若い命が散るニュース

寝屋川市　籠島恵子

思わくが外れたためがね拭いている
不揃いの苺の中にいるわたし
笑われて生きてきたのに懲りてない
失礼なパソコンだまた無視をする
葉ざくらや聞いてしまった裏話

寝屋川市　森茜

きき耳をたてているのは花水木
母の日も母は少しもじっとせず
泉から湧き出るような語彙を待つ
青信号点滅しだす締切り日
バイブルとなる私の愛読書

生半可な返事で人をまどわせる
団塊の世代最後を翔んでいる
ない袖はふれず思案の日日続く
はいはいと皆を助けている笑顔
延命の治療は拒否と書き記す

寝屋川市　冨山ルイ子

言い訳は繕いながらぼろを出し
食べるだけ食べると眠る猫と僕
喋るだけしゃべって呑んでさようなら
人様の長寿いいようにも見えぬ
いつか来た小径で探す青蛙

寝屋川市　太田とし子

病院を卒業しました一年生
歩くことこんなにうれしい杖を突く
強情を直せと一病あたえられ
八重桜私を待っていてくれた
デイケアの情けに酔った万華鏡

寝屋川市　坂上高栄

デジタルが刻むわたしの負の部分
身辺整理散骨のこと書き足して
いくつもの踏絵をふんだ歳月よ
飢えた日がもったいないを口癖に
帰したくないので喋べり続けている

羽曳野市　吉川寿美

歌麿の美人このごろ胡座かき
お多福のうしろすがたに惚れなおし
チャンネルを壊れるほどに回す日々
たたき漫才ぼやき漫才ネタ切れず
地球上の氷が溶けて目が覚めた

羽曳野市　三好専平

曼珠沙華枯れた姿も見ておこう
気まぐれな愛とは知らずついて行く
逃げ道を塞がれてから出る度胸
人間の仕業に鬼も呆れ果て
気まぐれの旅で拾った人の情

羽曳野市　酒井一壺

春愁や軽いジョークが胃にささる
歳の所為などとあっさり言わないで
役立たぬのが一番に駆けつける
日々平穏白紙が続く日記帳
計算に疎くて余命計れない

羽曳野市　安芸田泰子

渋滞のニュースみている豆ごはん
問題になるまでとんと知らなんだ
私の指も乾燥注意報
残り時間愚痴っていては詰らない
四十日の留守味噌壺にいいきかす

羽曳野市　徳山みつこ

パソコン嫌い今までもこれからも
庶民の義憤ぶち上げる場所がない
美しい国増やして欲しいゴミ捨て場
消去キー持つパソコンに嫉妬する
家で食べると消化不良を起さない

枚方市　寺川弘一

腹八分心得ているグルメ通
たんぽぽにしゃがめば祖父もしゃがみ込む
シルバーの時給がポイ捨てを拾う
立話バギー夕陽に吠えている
満腹の脚がはみ出す花筵

枚方市　丹後屋肇

雑草の踏まれて強くなる命
勝ち組になってモラルが軽くなる
陰ながら励ますという軽い嘘
だんだんと酒が話を膨らます
自己主張出来ぬ男の生返事

枚方市　伊達郁夫

昨日の夢つづき見たくて目をつむる
伊勢神宮何年振りのお参りか
外宮内宮玉砂利踏むも心地よく
鳥羽の海はるか見下し露天風呂
朝の湯は鷲の声聞きながら

枚方市　森本節子

新緑の芽ふく我家の植木鉢
人生をかみしめ飲んでる午後三時
妻元気すごいパワーをもらってる
五月晴れ年金生活旅の宿
まだ元気あるぞカラオケ唄ってる

枚方市　二宮山久

カマキリの強気が欲しいがしんたれ
定年後妻が上司に成り済ます
人間にもある4H派4B派
石仏ちょっと拝んで登山口
パソコンが言う事きかぬ太い指

枚方市　海老池洋

ひたすらに生きて明日へ夢を追う
不安には打ちひしがれぬ強い意志
はかなさは見向きもされぬ枯れたバラ
逆境を味方に変えて再起する
励ましが却って重く伸し掛かる

東大阪市　北村賢子

奨学金返し終えたと孫の婿
五月晴れお医者三軒回ります
孫連れて乗った遊具に手を合わす
母の日もなかった母の割烹着
辞書にない母の教えが生きている

東大阪市　笠井欣子

筍は先祖の匂い母の里
母うたういつも浪速の子守唄
落椿並べて飾るおままごと
生きてきて度胸が座る女坂
笑い皺気にせず笑うことにする

東大阪市　米田水昇

高い銭払うてもろた花名刺
お野菜に拘りあって遠くまで
暖簾分け受けて立ちます腕っ節
またしてもカタログたんとほり込まれ
引越しに疲れるほどの不用品

東大阪市　安永春

五線譜はおたまじゃくしの社交場
実線より破線で生きた半生記
事成すに先ず味方から欺かん
不都合はお国訛りで話す母
飼い主さん預ってます迷子犬

東大阪市　佐々木満作

表まで書いてお喋りするハガキ
初夏の風野仏さんも目を細め
これ以上想うと崩れそうな恋
友達に留守が多いと言われてる
魔がさした事にしておく一目惚れ

藤井寺市　鴨谷瑠美子

栄転も左遷も新たなる五月
居酒屋に賞罰なしの首ならぶ
けだるさよ春の眠気がまだ残り
名も知らぬ花が心を和ませる
色気抜きの話大声で笑う

藤井寺市　髙田美代子

雑草も今最高の見頃です
野菜作り荷造り上手くなってきた
敗北をはっきりさせたのは涙
老舗ずし回る寿司屋に嫉妬する
妻の愛野菜料理を押しつける

藤井寺市　太田扶美代

露店風呂日本はやはり長寿国
お歳にはとても見えぬと言うお世辞
冷や汗が言い訳の嘘知っている
しぶちんも可愛い顔の無理は聞く
今だから言えるあの事こんなこと

藤井寺市　中島志洋

やまぬ雨今日は一日中無口
想い出の中にいとしい人がいる
ライバルの老いた姿は見たくない
家系図の中はメデタイ人ばかり
夜の海ちょっとハイネになった僕

藤井寺市　鈴木いさお

藤井寺市　若松雅枝

カーナビを頼りに新米運転手
母の日にあんま機贈ってきた息子
少しだが財布潤う年金日
エレベーター一人で乗った恐怖感
三世代それぞれにある悩みごと

藤井寺市　楠昭子

保母さんがどの子も愛を分け与え
積んだはずなのにさっぱり老いの知恵
体だけいたわり過ごす老夫婦
笑顔の面付けてみんなの和を保つ
同じ指それぞれ芸を持っている

守口市　井上桂作

食べて寝てこれでよいのか古希うれし
奇跡あれひたすら老いを待つばかり
にえきらぬ男が増えて女子は泣き
四万十で泳いだ河童まだ元気
アメリカの裏切り憂う核協議

八尾市　吉村一風

ストレスを持つな持つなと酒が言う
梅干しの茶漬けに想うあれやこれ
カタカナ語増えて子らとは距離の空き
好調へ心の捻子を締め直す
老いの坂誰も後押しなんかせぬ

八尾市　宮崎シマ子

鹿の肉初めて食べた八十歳
還暦の娘に甘えられまだ母だ
母の日のカーネーションはもういらぬ
海から戻る男を待っている港
七夕に別れた女に逢いに行く

八尾市　長谷川春蘭

行先を違えて野火の叩かれる
ひな納め四角の部屋となりにけり
先来の赤き靴ありひなまつり
卒業月街の電話の皆長し
草萌ゆる少年走り犬走り

八尾市　山本宏至

千円でスクリーン見る夢旅行
友情のぬくさに心満ちてくる
幸せをつかむ話に憧れる
こぼれ種花壇の隅で自己主張
新人がライバルになり追ってくる

八尾市　村上ミツ子

メタボリック進行形ですわたし
春眠へついでに昼寝しておこう
団塊のパワーぐいぐい押してくる
スタートで転びそれからマイペース
添削へあるだけの辞書引いてみる

五月の風がオペにも耐えた妻を撫で
手術後の妻と会話が増えてくる
千年の大気を吸って生きた杉
白内障治し五感の風を読む
ロッカーの悲劇をなくす児へポスト

大阪府　籾山隆盛

自分のこと自分ですると心掛け
垣根越し散歩帰りにもらう花
歳聞いて驚かされる声のはり
他人はひと気楽気ままなマイウエイ
仲の良い夫婦もバラバラで浄土

大阪府　米澤俶子

一呼吸おくとユーモア逃げてゆく
定年後話があると妻が言う
妻の方に少し傾くやじろべえ
一張羅着ると座席にすわれない
仲人の嘘で結ばれ共白髪

大阪府　澤田和重

さあ船出男の顔が引き締まる
朝夕に父母の面影見る鏡
不公平鏡を見つめ出る吐息
親からの形見の顔に誇り持ち
生きて来た歴史を語る顔の皺

大阪府　前田ゆい

タイガース大吠え溜めて春眠す
父の日も変らぬ父の背が謙虚
温暖化日本海にも熱帯魚
プライドが喉に軋んで痒くなる
薬漬けリスク信号点滅す

大阪府　桑田ゆきの

野良仕事陽を背に老いへ骨の元
子の成長家族旅行も過去のこと
腰痛が鎌で草刈る根だめし
田ごしらえ夜来の雨に池と化し
残り時間わからないから持てる夢

大阪府　野田栄呼

番傘川柳本社８月句会
水府忌並びに岸本吟一追悼句会

日　時　８月６日（月）　18時
会　場　大阪市港区弁天１―２―１
地下鉄中央線弁天町すぐ
ＪＲ環状線弁天町駅すぐ
三井アーバンホテル
℡（06）６５７７―１１１１
お　話　「つららは水に」森中惠美子
宿　題　「写　真」　瀬川　幸子選
「慌てる」　本庄　東兵選
「　煙　」　中田たつお選
「おおらか」　奥田みつ子選
「　恋　」　礒野いさむ選
ほかに　席題　一題（各題二句）
しめきり　18時50分
会　費　１０００円

川柳塔の川柳讃歌 ㉛

木津川　計

欠席と書いて理由を考える

三宅保州

返事はむろん、礼状も難しい。不承不承でも引き受けたからには文句を言えた筋合ではない。ではないが「この度はご快諾いただき…」との礼状をもらうと「ん？」となる。「お受けいただき…」が無難だろう。

出欠を問う返事に「欠席」とだけが返ってくると何の意趣返しか、と心配する。「嘘も方便」と言うではないか。それらしい理由を保州さんに倣い、書き添えた方がよい。

格差から俺の細道ゆく財布

谷口次男

『奥の細道』をはじめ、芭蕉は晩年の十年ほどを旅に過ごした。貧しい旅装であった。ほとんど行脚僧の出で立ちと言うべく、手甲、脚絆に草履ばき、笠をかぶり、杖を携え、ひたすら歩いた。「腰にただ百銭を貯へて、柱杖一鉢に命を結ぶ。なし得たり、風情終に菰をかぶらんとは」。「菰かぶり」即ち乞食の姿である。自ら好んだ芭蕉はいいとしよう。次男さんは心ならずも市場原理主義に敗れ、格差の底辺に追いやられたのだ。〝俺の細道〟は細く、財布も乏しい。嗚呼。

陽だまりに集まってゆく弱き者

松本知恵子

アメリカ映画「陽のあたる場所」はハイソサエティーを意味していた。強き者にはさんさんと陽光がふりそそぎ〝弱き者〟は陽も差さない湿地帯で花も咲かない枯れすすきの境涯を送る。又もつく嗚呼の溜息である。

そんな〝弱き者〟の冬はことに冷たく、わずかな陽だまりに寄り添って暖をとるしかない。この六月、住民税がまた上がる。〝弱き者〟のブルースばかりが広がる。

大雑把小刻みにするわが身体

川本畔

目を醒ましている赤児は手足を前後左右に動かし続ける。横に寝て同じ動作をおとなが真似たら疲労困憊、息が続かない。年をとるほどに敏捷さはなく、大儀故に大雑把になり、手はふるえて小刻みになる。

僕の知る歯科の名医は六十五歳で院長を子息に譲り、「手許がふるえる」から大雑把ですむ患者だけの治療をされた。ご同輩、老いとは大雑把と小刻みの身体行動ですぞ。

いつまでも私を咲かす水を呑む

政岡日枝子

絶対年をとらない方法をお教えする。①週に一度百貨店に行く。②月に一度封切られた洋画を見る。③孫と住む。④張りのある日々を送る（趣味、学習、ボランティア、スポーツなど）。⑤恋ごころを抱く。

恋ごころをなくすと人間は枯れる。花に水やりを怠っても同様だ。日枝子さんは安上がりである。水道水で彼女は綺麗に咲く。食料も衣裳も小遣いも一切要らず、水さえ呑んで咲くのだから、この国の需要は半分を失う。さて、日本の景気はどうなりましょうか。

華やかに散って見せます姥桜

夏目一粋

岡田嘉子は美貌だった。八十九歳、老衰で息を引きとるまで華やかであろうとした。伝えられるところによれば、耳が遠くなっても「補聴器してると老人に見えるんですもの、イヤよ」と話した。姥盛りをはるかに過ぎて、なお美への思い入れを失わなかった。

植木の花に「綺麗ね」と声をかけると、花はうれしく、翌年はもっと綺麗に咲く。姥桜もむろん、況んや女盛りにおいてをやである。

（『上方芸能』誌代表）

自選集

板尾岳人

つゆ晴れ間物干竿に母の傘
モナリザの指先にある不眠症
母の日に漬物石を磨かねば
誕生日長靴買うてくれました
昔からアイスクリーム好きでした

奥田みつ子

反骨にペン一筋の道光る（悼　田中正坊氏）
冗談にぼかした本音宙に浮く
赤紙の脅威が迫る孫世代
真実を明かせば友に傷がつく
言霊やいい事ばかり口にする

河井庸佑

冷静さ欠いた仕草へ自己嫌悪
親ならばこその苦言を逆恨み
今日もまたノルマ達せぬ万歩計
原点に戻って探る打開策
住みにくい格差の風が吹き抜ける

川上大輪

強かに砂漠で生きている水母
原因は睡眠不足愛不足
音信は不通で春が遠ざかる
無造作にくるんで捨てる言葉尻
とりあえず進むすべてはそれからだ

木村あきら

休んでは居れぬ地球は回ってる
お国自慢サヌキウドンに在る誇り
筋交いを入れて耐震恙なし
安売りに曳かれ不要の品も購う
五円玉投げて願いは五ツ六ツ

小島蘭幸

もう帰る頃　大根をすっておく
カレー焼肉今日は創作料理です
玉子焼くのも魚焼くのも難しい
豆ごはんはとっても奥が深いです
ポテトサラダのポテトを擂っている無心

小西雄々

土用波むかしは魚捕れた町
見栄張った祖父へ寺への重い寄付
別れたい女との距離ひろがらぬ
縄のれん今夜聞き役ぼくの番
軍神もイラクのテロへ目をさます

もったいない腹減らしだと歩いてる
この頃は財布ふくらむことがない
殿様のお宿だったというのれん
避難口確かめ宿のゆかた着る
渋滞も計算に入れ旅を組む

小林由多香

親睦を図ろう森の握り飯
少年の蕾を風は裏切らぬ
ありがとうしようさくらが散るのです
葉ざくらのベンチはは恋う話など
海の子へそっと手渡す浮き袋

斉藤姦

禁煙一年綺麗な肺になりました
祖父に似ず体育系の孫五人
出血八年小さい旅をしてみたい
暖冬が今年の花見狂わせる
花の名がカタカナだけの花屋です

塩満敏

スーハースーハー五月の坂のぼる
美人とはあまり会わない散歩道
一円も落ちてはいない散歩道
転ばないように撥ねられないように
新緑の道で狸が轢かれている

新家完司

句読点打てば私に先がない
認知症ですとひとまず逃げておく
ふりむけば紆余曲折の泣き笑い
東京へ行き渋滞に巻きこまれ
浅草でお上りさんになっている

玉置重人

片意地がまだ治らない土ふまず
あの頃はもしもの夢を抱いていた
ラッキーでした賑やかに囲まれて
いたずらな目が母親に甘えてる
枝ぶりはいいが越境して困る

恒松叮紅

七曲り犬鳴山は札所みち
届かない賀状へ菓子を道連れに
木の芽立ちいとおおらかに泳ぐ鯉
晴天を信じツアーの上高地
携帯が使いこなせぬカメラ好き

津守柳伸

パソコンを習ろてみようか妻の乱
生き返る若さあなたは未亡人
複製画さっそうとして床柱
タバコ屋が消えてニュースが遠くなり
千円札賽銭箱で落ち着けず

遠山可住

空は青　山も背のびをするらしい
紫外線　影にもはっきり貧乏神
齢のせいにされ何度目の途中下車
目薬がゆくさきざきへついて来ぬ
手慣れ旅　浄土へもきっとペンと酒（嗚呼　正坊さん）

都倉求芽

無病息災平均寿命越えてゆく
あの島へ泳いで行ったことがある
友だちと仲よしをする雨の午後
天からの命令だから稲植える
やすらぎをもらい感謝の掌を合わす

土橋螢

五月雨や大人にもある反抗期
満腹になると言葉も丸くなる
若葉風五歳は若くしてくれる
綺麗ごと言って空しさつのるだけ
火も水もくぐった人の太い首

西出楓楽

文明の利器と信じているテレビ
養殖は文明お刺身バイキング
文明の進歩か弾の命中度
文明のパイプ漢字であった頃
カタカナと数字が重い文明論

仁部四郎

柑橘の匂い広がる妻の部屋
弾き語り窓辺は雨の降るところ
糸笛を塑像の如く聞いている
一日の半分ほどは自嘲なり
春夏秋冬あと幾たびの悔悟録

波多野　五楽庵

眸にやさし島の牡丹に深呼吸
それぞれの美学麒麟と象の良さ
友だちの作詞よと言う歌に酔う
夕映えの浜辺でモナリザの微笑
名医との出会い心に花を抱く

林瑞枝

医者行きの日課八十生きている
リハビリを一週間に三日詰め
のめるだけまだ達者やとのんでいる
新緑のひときわ映えて通り雨
田舎はいいな余生を畑仕事

宮口笛生

大和三山そのかがやきを待つ夜明け
味方より敵に大きな道ゆずる
散るいのち咲くのもいのち朱に燃える
やり残しばかりで蓋がしまらない
念仏の声は一念燃えている

宮西弥生

穏やかに暮らし貸し借りない暮らし
夢楽しい天まで昇る我が時間
戦友の墓を訪ねば陸軍上等兵
カタカナの文化論なんかは希薄だな
見解の相違ぼんやり考える

森下愛論

天衣無縫政治の舌は気にならぬ
ミサイルに明日の地球は曲げられる
点滅の尾灯と共に愛も去る
嘘幾つ賽の河原に山と積む
バラバラの意見遺言迷うてる

八十田洞庵

僕だけは癌よターゲットにするな
ボス猿の夢はハーレムだと思う
水増しで美談ばかりの自叙伝よ
君のミス気付かぬ振りをして上げる
イケメンよ無職でめしが食えるかい

両川洋々

真似ごとで切り抜け背筋寒くなる
減らず口叩き立場を悪くする
思考力も衰えて来た老いの坂
根の深い恨みを買っていた駄洒落
オッチョコチョイもいてお互いの輪が和む

阿萬萬的

温故知新

家族五人住み付く家を見て歩き
見返してやれと大きな方にきめ

大阪市　中島生々庵

二十五年互いに年齢をとっただけ（銀婚二句）
峠なおきつく銀婚笑い合い

出雲市　尼　緑之助

プロ選手になって孝行してあげる
無愛想に男兄弟対談し

下関市　広津　柳慶

奥様に上着持たせて酔いつぶれ
出迎えをすっぱ抜く気の途中下車

広島市　国広　半休

歯の浮く様な讃辞を棺の中で聞き
先生が批判されてる参観日

岡山県　直原七面山

『川柳雑誌』麻生路郎主宰
三五〇号（昭和三一年七月）



奥田みつ子選

海色のインキで綴る私小説
さりげない妻の一言勇気生む
昭和の日昭和は遠くなりにけり
腹くちくなると性善説信じ
菜種梅雨蛇の目が映える城下町
平均寿命神は女性に依怙贔屓

岐阜市　平野あずま

淋しさも悩みも消えて満ちた旅
淡路の宿で子と孫曽孫楽しい夜
何の徳有ってか卒寿まだ達者
人ごとと思った九十我が身とは
婿とデュエット照れつつ唄う伊豆の宿
気を若く夢を追いましょもう一度

鳥取市　山口千代子

晴れ晴れと北京留学古稀近し（66歳北京留学）
黄砂舞う北京の空に鳥が飛ぶ
人の波十三億の一部分

宝塚市　丸山孔一

桜散るように死ぬるか終れるか
若鮎が跳ねて光を撒き散らす
清流と田んぼの跡にネオン咲く

北九州市　岡田幸生

個性的な方ねと言われ蔑まれ
パソコンがもうよせやいと言う頭脳
分が悪くなると黙って父散歩
母の日は贈り父の日メールだけ
立ち読みにどうぞと椅子のある本屋
呑み込んだ愚痴が燻る喉仏

鳥取市　山岡紀子

這い這いもあんよも畳あたたかい
転ぶなと九十歳の母が言う
謎めいたメールに脳がはしゃいでる
うっかりと謎の笑顔に乗せられる
現役で六十路の坂をジャンプする

田辺市　大峠可動

老々日記墓穴は文字に伏せたまま
春しぐれ雲の涙を捨てたのさ
幸せは未来の先にその先に
その先は読めず未来はなお読めず
自我の跡射止めた花の華も散り

泉佐野市　稲葉洋

唱和する経に疲れを解く遍路
発願も結願もまた己が胸
結局は祈るしかない医の限度
執念と未練諸手に明日の計
傍よりも離れて気付く事がある

香南市　桑名孝雄

マージャンゴルフ必須時代の夢の跡
反省はしても後悔しない酒
B面が意気地を見せた立志伝
老人力はやり言葉に踊らされ
鈍感力ぼくに長所がひとつ出来

大洲市　花岡順子

どうせなら笑って暮らすアイウエオ
彼と逢う優しい色を足して逢う
回復の兆し明るい顔にする
何事も腹におさめた頼り甲斐
貫禄はないけど筋は通してる

札幌市　三浦強一

新子座の旅興行は黄泉の国
べい独楽を孫に教える昭和の日
拉致の子の帰らぬ海が哭いている
いざなぎにおいてけぼりの年金者
母看取る妻には頭上がらない

今治市　塩路よしみ

生ある限り自作自演の笛を吹く
風は気まま風紋を描く夢をかく
春へ少し翔んで見ようか薄化粧
三世代こころ配りの距離を置き
美しいいのちに迷う花鋏

大阪市　三浦千津子

新しき道へと巣立つ子の羽音
画帳手に時間惜しまぬ一人旅
こだわりを少し残して歩み寄る
止まり木の父子の対話静かなり
饒舌の後の虚しさ桜散る

日立市　加藤権悟

ジャンケンに負けて悔しい役がつき
少年の天に豊かな芽が伸びる
ふるさとにまだある父のせいの丈
正論を吐くとけむたい人にされ
忌憚ない意見部長の胃にささり

横浜市　巖田かず枝

五月晴れ男子誕生うれしい日
出産の立ち合い絆深め合う
ひ孫抱き胸いっぱいの老母の顔
出産も育児も恋も命がけ
亡き父の五十回忌に孫生まれ

池田市　上嶋幸雀

もう何も望むものなし五月晴れ
五月病呑み込み泳ぐ鯉のぼり
頑な心を溶かす風みどり
母の日もキッチンやはり妻の城
万歩計五月の空に急かされる

府中市　馬場利子

精一杯生きて笑い袋を膨らます
ユニークな風が丸い背追いかける
朝顔と毎日お喋り夏帽子
乗り切った坂へ明日の山が待つ
試着室初夏の彩柄地味好み

大阪府　神野千恵子

きらきらと玉の汗したいい笑顔
友という宝はいっぱい持っている
数だけで国が動いてゆく恐さ
回り道してストレスを置いてくる
痛いとこ衝かれてなぜかほっとする

堺市　大久保伸子

介助犬盲導犬の持つ誇り
年金と身長低くなるばかり
風の音散る花びらの吐息とも
わくわくと年とるごとに夢増やす
自負心がまだあり肩にのしかかる

三田市　阪本藤朗

診察券五体のあちらこちら用
句読点時には神も間違える
人形の瞼も重い夜の部屋
昼寝から覚めてこの世でほっとする
特養を見舞って希望置いてくる

和歌山市　たむらあきこ

瞼閉じる見えないものを見るために
アングルの違いでもめる女偏
静けさが欲しくて雑踏を歩く
静寂がひろがる父の柩から
たましいのなかに潜んでいた阿修羅

豊中市　松尾美智代

ジャスミンの香りに私生き返る
畑を打つ今年も実り願いつつ
昼下がり猫の欠伸が私にも
生きてゆく刺激をもらう本を読む
わずかずつ子離れの距離開けてゆく

新しい家で勿体ないを捨て
一病が二病となって生きる意地
連休を外して老いの旅仕度
夕張よ黒いダイヤで沸いたころ
妻の愚痴同じ台詞に恙なく

札幌市　小沢　淳

若い葉に後を頼んで花芯落ち
味付けがしょっぱい時の台所
妻の口と講和条約結べない
菖蒲湯の一日おくれそれもよい
ほっぺたをつるんと撫でる山の湯で

取手市　葛西　清

感動の本は二度読み三度読み
正直な汗は老後に光り出す
百歳を気力で追っている明治
厚切りの沢庵旨し明治の歯
信念で生きる明治に愚痴はなし

草加市　飯土井健夫

松坂が打たれて酒がまずくなり
渋滞も交通事故も無い茶の間
春眠を誰気兼ねなく高鼾
要る物を捨てねば部屋は片付かぬ
雑学を醗酵させた知恵が冴え

東京都　井上つよし

地球上あっちこっちで不整脈
還暦を迎え九条自己主張
嫁姑視界良好梅雨も明け
家計簿が怖い数字を連れてくる
しかっては誉めしかってはまた誉める

昭島市　野口　忠

連休は日常のことウォーキング
公園の昼の花には影がない
輝く時間だけを働く花時計
ユーモアで許容範囲を膨らます
悲しい人がこんなにもいる星の数

立川市　柏野遊花

家族という宝大事に生きていく
叱る役誉める役あり子は育つ
配慮したはずの言葉が人を刺す
ドッカンと病魔突然やってくる
団塊世代死ぬまで競走なんですか

横浜市　川島良子

花咲いた時は日本も美しい
いつか咲く花だ静かに待っていよ
お料理の腕競いあう花の下
花見日和いえ通院に良い日和
ＯＢ会メールは訃報ばかりなり

横浜市　長島亜希子

横浜市　金森徳三

便利さが事故につながる恐ろしさ
前線が南か北で選ぶシャツ
けちったら格差激しい船の旅
年金の格差実感貧富の差
おつかれに行く連休を見て疲れ

藤沢市　加藤スズコ

桜茶に心もしまる挙式前
おはようの声爽やかに朝が好き
陽も誘う今日は遠出の車椅子
連休終るおつかれさまと雨しとど
大正生れ昔話の泣き笑い

佐渡市　髙野不二

連休をあてにしている田植どき
祝われた喜寿から少し年を取り
うまいもの食ってはいない血糖値
声変りして電話にも出ない孫
ビール党焼酎党の親子酒

京都市　清水英旺

昭和の日わが半生の走馬灯
ブラインドを鳴らして五月の風さやか
薫風をやり過せずに立ち止まる
七十翁若い職場で年の功
アナログもスローライフで生きられる

大阪市　森田明子

哀しみを抱いて熟成させている
体温も伝えたいから手紙書く
とりあえずお茶入れ替えて策を練る
善人に埋もれ意地悪したくなる
どきどきと画面見ているラブシーン

大阪市　中井崩

ささやかな怒りあしたのエネルギー
ワイドショー同じ噂の午後の風
笑顔よし瘢癪玉を抱いたまま
泣き笑いまだ煩悩が飛び跳ねる
母の日に一年分のお世辞聞く

大阪市　岩崎玲子

ピエロにもなれず川面にうつる影
川岸の葦に昔を聞いてみる
淀の風吹かれ一日洗ってる
なに語る川面にうつる月あかり
この川も海に続いて仲間入り

大阪市　尾崎黄紅

いたずらといじめの違いむかしいま
叙勲者はみな裕福なひとばかり
五打席で一安打さよなら打った
ビルが建つ長屋連中どこ行った
善人の嘘とはすぐに解る嘘

身の内が空になるほど笑いたい
美しく老いたしわたし色のまま
湯気の立つ料理並べて待ちぼうけ
油断した後ろ姿は正直だ
アルバムが教えてくれる幸の数

大阪市　原田すみ子

輪の中を盛り上げている誰だろう
いい顔をして見せる子の愛らしさ
子守唄先に子もりが眠くなり
香ぐわしい花のありかをたどって見
あかね雲人の描けぬ神の色

大阪市　平嶋美智子

地団太を踏んでもチャンス振り向かず
いつまでも夢捨てきれぬ床柱
スマートに別れた後の阿鼻地獄
日めくりに明日の運勢のぞき見る
早すぎたムチに途中で息が切れ

大阪市　伏見雅明

顔と顔阿吽の息の妻と僕
お互いに板に付いたと鼻眼鏡
閑中に忙もあります老い楽し
花便り聞くとそわそわ落ち着けず
蝶タイの孫に財布の紐ゆるみ

大阪市　田浦實

心斎橋どんどん老舗消えてゆき
汗流せファンドの風を追わないで
母の日に姉妹揃って母の墓
悔い重ね生きる証にしています
嫁いだ娘急に来たわけ聞いてやる

大阪市　寺井弘子

もう何も言わぬと決めた皺の口
死ぬまでの時間命と教えられ
予後の身の一歩確かむ万歩計
おかえりと燕のペアー迎え見る
減量の冊子横目に蓬餅

泉佐野市　備後三代子

年金が年金看てる長寿国
電池替え今日も翔んでる妻は古稀
夕焼へ今日のひと日に手を合わす
骨密度気になり励む万歩計
里の駅友と喋っている訛り

河内長野市　針生和代

支え合えば楽に歩ける道なのに
喜怒哀楽椅子は何でも知っている
お世辞では心の乾き癒せない
一安心いつもと同じ朝の音
老いふたりたまにはひとり伸ばす羽

堺市　羽田野洋介

堺市　荻野像山

来年も無事な積りで宿予約
諍いは言うた聞かない聞こえない
ストレスを肴にすれば飲める下戸
仏壇に供えた酒が空になる
こっそりと開けてもばれる酒の瓶

吹田市　早泉早人

五月雨をぼんやり見てる万歩計
脳トレに今日も四コマ読んでいる
ぬれ落葉踏みに踏まれて立ち上がる
自分流愚直に生きる暮らしぶり
ときどきはキャンパス覗きネタ拾う

吹田市　二宮栄子

連休を骨抜きにしてる子等帰る
和太鼓をたたく男の背に惚れる
無口な息子無理しいなやと電話口
逆風の無理を承知の橋渡る
夢を追いつづけて古希の坂に居る

吹田市　藏田光子

静寂に居住まい正す水の音
早乙女の田植姿は過去となり
鮮やかな生を感じる柿若葉
到来の菓子を愛でつつ新茶淹れ
稜線が日々まるくなり五月晴れ

高槻市　笠原乃りこ

竹の子を木の芽で和えて日本人
ひりついた脳をなだめた白つつじ
恋の句を作るに不足我が春よ
ゴッホの黄西に飾って福を呼ぶ
どん底で生きる自信のある世代

豊中市　荒巻夢

忘れたい過去も大事なわたしです
臆面もないけど一途猫の恋
人生を垣間見せてる深い皺
蹴とばそか優先席の長い脚
アリガトと母が言ったと便り来る

豊中市　谷川勇治

わたしにも魔法の鍵が一つある
砂時計倒していても日が暮れる
初蝉や里の父母草取りか
8・15ひっそり歌う海行かば
使用期限過ぎた男に何がある

豊中市　神野宇乃子

花水木もう日本語が話せます
棘があるのは当然と思うバラ
桐の花桜の後で上品に
あじさい寺年に一度の御開帳
黒百合に秘めた想い出君の名は

ガーデンショーかぼちゃの花も弾んでる
とっておき話が弾むティーサロン
優しさを交わす架け橋ティーサロン
病む母のすっきりとした立姿
下手な嘘のたりと越えて咎められ

富田林市　古田千華

おふくろがオカンに変りメール来る
背中をそっと叩いてくれた通夜の友
話相手の子も一人ずつ親離れ
油断したらたまに天から夫の声
怠け病これも加齢と医者が言い

寝屋川市　森田麗

住宅が迫り竹藪嫌われる
きょうだいの筍好きにまず届け
筍の貰い手決めて掘りに行き
電話して筍掘りに来てもらい
筍に目のない人が五六人

寝屋川市　北田ただよし

適量を悟りきれずに飲んでいる
点滅の向こうをのぞく好奇心
門灯が瞬きしてる時間切れ
やりくりに消費期限の今日を買い
菜園の汗を近所へお裾分け

羽曳野市　森下一知

老眼でナノテク話解らない
正義漢ひとり日陰の道を行く
貸し借りが竹馬の友を別れさせ
連休は読書にあてる老いの知恵
赤い糸鎖になって締め付ける

羽曳野市　永田章司

母の日に贈る幸せ品定め
五月晴れ大志いだけと鯉泳ぐ
還暦の息子夫婦と秘湯旅
孫二人両手に花の散歩道
好物をどっさり作りチャイム待つ

枚方市　二宮紫鳳

愛しいが愛は届かず甘え下手
一筆箋の優しい言葉熱くする
父の色紙が故里の風連れてくる
今日よりあした違う眼鏡で生きてみる
心模様扇がひらり風に舞う

枚方市　小林わこ

老い二人元は他人と思えない
誉めるとこ無いらし耳をほめられる
悲しいのに笑ってしまう時がある
月あかり老いも若きも美男美女
軽いうそハートの裏が痛痒い

藤井寺市　俣野登志子

踏んばって歩いていても芯がぶれ
頑な意地も孫には溶けていく
花一輪心の中に彩を足す
時折は自分をさらす吹き溜り
花散らし浮世の風に添うて舞う

八尾市　脇　俊子

子供らの科学の芽摘むＩＴ化
ゼロからのスタート怖いものはない
運転のうまい妻にもある不覚
おはようとおやすみ親子にもルール
手を借りる頼み上手も老いの知恵

八尾市　松葉君江

母の日へ一輪持って子らが来る
叱られる一歩手前で止す次男
情熱が溶けだしらしくなる夫婦
サクランボ期待するほど実が落ちる
原点に戻ると山が見えてくる

八尾市　寺川はじむ

欠伸する泣くも大物初節句
未だ生きる冷やそうめんを流し込む
価値観の違い織り込むいい仲間
餓鬼大将手作りかぶと粽食う
回り道した人らしい物わかり

八尾市　田中トシエ

相談は返事をくれぬ亡父とする
スタートに立ってゴールの恐さ知る
定年後楽しい夢をくれた辞書
孫連れて花も見頃の墓参り
百均で散財をして家平和

八尾市　田邊浩三

気が付けば危ない国に成っていた
週末は椅子が足りない晩御飯
ここに来てまだ捨てられぬ欲の皮
新緑とつつじ鶯フルコース
目に青葉心も弾む五月晴れ

八尾市　前田紀雄

先輩の助言にいつもありがとう
剣ヶ峰男度胸を試される
神の目は真心だけに光射す
あの世から呼び戻したい人たんと
スタートは皆幸せな披露宴

八尾市　西川義明

民宿のような連休落ちつかず
また誰か褒めつつ通る庭牡丹
まだ当てにされて畑の主となり
無農薬野菜ほめあう集荷場
たっぷりと降る雨嬉し農休み

大阪府　畑中節子

義理の世へけじめをつける風の距離
問いつめる言葉に匂う人間味
目標を米寿において凛と生き
風みどり愛の深さを陽に透かす
ない袖を振ってうれしい母達者

相生市　村木信子

生き残るものひっそりとクラス会
一期一会お地蔵さまと夕日見る
いろは坂越えて明日見る山桜
通り雨気品忘れぬかきつばた
春の野をゆるりゆるりと老いてゆく

篠山市　谷田多美子

ワキもツメも甘いんだろう狙われる
他人事でない言い方にある親身
負けてても終わりまで見る虎ファン
心身が健やかなれば愚痴はなし
まだ課題残っています三ツ四ツ

三田市　臼井二英

茶柱が立ったいい日と思いたい
野仏と並んで緑浴びている
七十の年には重いロースカツ
塾があるカラスと一緒に帰れない
運命とつい言い訳に気がとがめ

西宮市　藤本直

花鋏花の色合い見極める
イヤリング耳がいやいや言うてくる
雑音に真実の声一つ聞く
古代人めいて匂玉頸にまく
恐竜の化石丹波の町おこし

西脇市　七反田順子

大自然山の緑に血がさわぐ
黄のジャンバーさあボランティア早い朝
打ち込めるなお染筆の有り難さ
よう画いたな大中小の立ての筆
孫帰省連休の風ありがとう

加東市　岩本美緒子

子も孫も都会にとられ過疎に老い
声変わりもう言いなりにならぬ孫
全身を耳にして聞く春の詩
てのひらに包み切れない義理の数
石地蔵誰がかぶせた赤頭巾

奈良市　乾春雄

檜製ちょっと贅沢風呂の椅子
老いの字がやたら気になる去年今年
パリパリの浴衣うれしい旅の宿
そこここに雉の鳴く声夏はそこ
鴇色がやさしく癒すもちつつじ

奈良市　矢野良一

奈良市　阿部茶々

白和えはまだ近づけぬ母の味
皆巣立ちやっと手にしたマイルーム
桜島時に私も噴火する
懐かしい映像あらたなる発見
忘れないあのゲーブルのあの微笑

和歌山市　堀　冨美子

とりどりの花や燕に癒される
新しい命育む夏の花
療友に花手向けられ夫の墓
嘘ちょっぴり交ぜたジョークに座が和む
ノスタルジア夫婦の生きた五十年

和歌山市　土屋起世子

初給料泣いた孫から贈り物
子育てに介護私の師であった
ふる里へ絆の紐を締めにゆく
花ざかりが続くと思った身の迂闊
青葉若葉老いてる錆びを落とす旅

和歌山市　田中すず

さざ波が絶えず立ってる身の回り
舞い戻る過去に無常がおいてある
糠床に亡母のルーツがあるらしい
生き方の模索へ夕日沈み出す
お蔭さまで来た人生を問い直す

和歌山市　柏原夕胡

逢いたくてケータイ鳴るの待っている
神頼みしたくらいでは儲からぬ
ジャンケンポン何を出しても負けている
死ぬほどに恋に狂ってみたい夏
わたくしの素顔を知ったひとが逝く

和歌山市　坂部かずみ

五月晴れ心明るくガラス拭く
老犬と炬燵で見てる海開き
口笛を吹いて女は叱られた
脱ぎ捨てた仮面に汗が付いている
枠外に飛び出したいな鯉幟

和歌山市　山田侃太

結婚をしようシジミのお味噌汁
転び方知って仲間が増えてきた
目が合って食器洗いは僕になる
車ですお冷やにします屋台村
泣くもよし語るのもよし屋台村

海南市　小谷小雪

嫌なこと言われるたびに強くなる
静寂の海に誘うモーツァルト
遠足のリュックも風と遊んでる
ドレス試着気分は既にシンデレラ
麦の穂もそれぞれの空めざしてる

一億円持つと三億欲しくなる
泳がせてみれば男がよく見える
蘭鋳に秘密の午後を覗かれる
真四角な男の影も真っ四角
便箋に命が宿る草書体

紀の川市　宇野幹子

思い切ることをおぼえて古希になる
前向きの言葉が好きでメモをする
骨になるまでは重たい石で良い
のんびりと生きて喜劇の泣き笑い
下手で良い下手が好いとは仲間内

和歌山県　森下よりこ

産児制限そんな時代に生まれたが
若返るチャンスをくれたクラス会
一人ぐらし心の紐を締め直す
私のとなりに誰かいるけはい
連休のプラン立ててる農作業

鳥取市　横田春名

向日葵を心に咲かせ欝散らす
磨いてるつもり心よすぐ曇る
痛くない顔して傷を抱いたまま
アルバムの亡母と会ってる母の日よ
苦労人一言やる気出さしてる

紀の川市　辻内次根

雲行きがあやしくなって後すざり
孫達と別れを惜しみ投げキッス
恨みごと思い余って投げつける
そっけないだけど本心好きなんだ
知らぬ間にボケがそーっと忍び寄る

倉吉市　酒井芙美子

ラッキーな運が私を変えてきた
寝たきりにならない鍵は先ず一歩
うまくうそつかれたふりで丸い仲
にぎやかに家族に笑いくれる嫁
ひたすらに家族を守り自信わく

境港市　遠藤那珂子

苦労した膝がこの頃笑いだす
野良仕事終えて夕食味が良い
ライバルと減量競い歩いてる
花の中気分洗われ若返る
自分だけ持つ物差しは離さない

鳥取県　橋谷静江

二日目はガイドの声が子守歌
フリーでも基本の姿勢崩さない
立ち上るまで手を出さぬ児への愛
活気ある人は明るい方へ行く
ばあちゃんのテンポで居間は和んでる

鳥取県　岡本幸枝

赤い靴洋画の魅力ひもといた
石の花観てからロシア夢の国
パートする母の帰りを待つ瞳
有夫恋手元に淋し春四月
熟睡の朝のハミング軽やかに

鳥取県　岩崎和子

母の日は若いTシャッおねだりし
あなたとはビール枝豆そんな仲
妻というプライドだけで身を包む
頭から足の先まで医者と友
やんわりと親の生き方採点し

松江市　松浦登志子

お隣と野菜作りのあれやこれ
雑草の元気と古希がこんくらべ
かろやかに靴弾ませて花の下
柔らかい顔になってる花の前
一日の感謝つづって日記とず

松江市　山根邦代

春うらら何処へ行っても家族づれ
八十路坂足を鍛えて旅プラン
前向きに充電しつつよい知らせ
一人居は千の風から待つばかり
残り火はめそめそせずに花咲かせ

出雲市　荒木英子

船頭多く進むどころかもめている
あれこれと夢追いながら八十路来る
泡風呂に旅のドラマも消えて行く
古傷に触れずに置こう好きな人
わだかまりゴミと一緒に灰にする

出雲市　川島和歌子

目が覚めて今日も生きてた先ず祈る
苦労する事も大事と見ない振り
拳骨を忘れた親に子の未来
母の日に届いた服が若すぎる
お互いにきつい冗談言える仲

雲南市　武島ちよえ

キジの声聞いて精出す万歩計
ハイカラな家大黒柱見当らぬ
老人会昔話ができるから
戦友の電話の向こうで声うるみ
三年日記あと一年を書き足そう

雲南市　福間博利

先ず牛と語りて今日が始まりぬ
ソフトタッチで接し応える乳の量
たっぷりと乳出した牛撫でやる
牛撫でてやると大きな眼を細め
連休を孫の達者が振り回す

安来市　原煩悩児

ひたすらに祈るしかないガンその後
生命とや夢追う旅は終らない
世は変わる平成の子のおおらかさ
あの頃は寝ると疲れもすぐ取れた
生活の奢りできつい紫外線

府中市　藤岡ヒデコ

踏み込まぬ距離で付き合う両隣
錆び止めを塗っても効かぬもの忘れ
明日を信じ米とぐ幸よ八十路坂
これだけは譲れぬ意地の線を引く
幸せへなぜか孤独の風が吹く

宇部市　高山清子

贅沢は元気で生きる事と知る
思いやり言葉に少し乗せてみる
笑うのも怒るも夫が居てくれて
バリトンの声朗朗と湯殿から
優れもの愛も怒りも尾で知らす

東かがわ市　赤澤貞月

手の中に魂を持つ舞踏会
凡庸の中の非凡を見付け出す
役に立つ科学行き過ぎ多過ぎる
幸せであるから思い切り笑う
春よ春舌に嬉しい味の春

今治市　渡邊伊津志

車にらみ信号渡る都会人
信号でお辞儀していく山鹿の子
都会人近所付合いわずらわし
山鹿では隣近所はみな家族
上達法読んだら最後下手になる

シドニー　三谷たん吉

砂漠化の進む農地に牛細る
無為無策無水大陸人が成し
内陸へパイプで雨水送りたし
改憲を付和雷同が押す怖さ
靖国も合祀談合してたらし

シドニー　森本クックバラ

クリーナー買うときだけはうれしそう
ガラクタもしまい運んで次の家
引越しの度に増えてく開かず箱
引越しで張り切る父が役立たず
窓ふきのように自分も磨きたい

シドニー　藤原ポン吉

くされ縁運命だとも言うらしい
スキンシップきつい言葉もマイルドに
肩にふれ親しみいつもより沸いて
おめでたのブームの波に乗りそこね
ほめられた笑顔をいつも大切に

シドニー　内山佳代子

積み上げた苦労も人は運と言い
美しい国より優しい国を待つ
まごころの扉を開ける春の風
母病んで娘ナースに憧れる

尼崎市　河津正治

百均の傘に春雨そっと降る
葉桜になれば落ちつき人も木も
でしゃばりの雑草も育てる陽の情け
人間も虫も好みの花を知る

大阪府　高木道子

弱虫を認めたくないから生きる
五十年やっと見えます夫婦愛
母の日を姑と一緒に祝ってる
師が逝って筆の動きが止まってる

藤井寺市　伊藤アヤ子

スカートを引っぱるママの長話
花の芽を抜いて得意のお手伝い
おしゃべりな人にぶつかるショッピング
無為な日が食欲だけを助長させ

横浜市　中尾哲代

選手みな平成生まれ逞しい
花見酒幹事泣かせる春嵐
テーブルに旬の山菜箸進む
救急車走らず平和昼下り

箕面市　寺井柳童

白米がやっぱりうまい老いの口
表の間女賑やか気にかかる
子に託すもしもの時に読む封書
毎日の時間を埋める趣味をもつ

米子市　小塩智加恵

何一つ言う事なくて今日も暮れ
自画自賛危機乗越えて添い遂げる
自分流個性貫き八十路入る
憲法を変えて戦争したいのか

尼崎市　小池幸子

連休は猫と静かなお留守番
今日だけは人に見せたい日記帳
母さんの温みが残る形見分け
母も逝き実家の敷居高くなる

藤井寺市　吉田喜代子

年金では長生きできぬ軍資金
参院選安倍も小沢も命懸け
兄弟は他人になるか遺産分け
吠える犬相手にしない強い犬

岸和田市　坂口英雄

姿見の猫背も生きた証です
口卑しい食べても食べる日の孤独
肩の荷を下し一人の身の軽さ
万緑の草木に生きる糧もらい

大阪府　小栢こずえ

朝食を美味しく食べる工夫する
ふらふらになるまで続く介護の日
健康で長寿勝ち取る戦です
九条は戦後日本の宝もの

河内長野市　木太久　正一

深呼吸肩書き抜けずあがいてる
約束の朝には鏡手に余り
老い仕度忘れた分の若さある
逝く春を癒す緑に感謝する

池田市　多田　契子

コート脱ぎ春が来たよとスニーカー
颯爽とひたすら歩く定年後
セールスにまた乗せられて化粧品
千の風ただひたすらに草を引く

和歌山市　根田　よしこ

七夕の色紙に九条平和書いてある
亡夫の時計句会に何時も一緒です
母さんの団子なつかし半夏生
ちぢみ行く背丈いとしい命抱き

大阪市　吉田　富美

活躍をして来たシャツの泥まみれ
頼られていると思えば出る力
おふくろと言う名で母の底力
気がつけば背なに夕日を浴びながら

雲南市　菅田　かつ子

家系です嘘の書けない申告書
鈍感力読んで反応にぶくなり
お誘いはことわれません上司です
力士みな人には言えぬ野心もつ

寝屋川市　岡本　勲

一本のカーネーションにある温み
邪魔だけど孫の手伝いほほ笑みて
バーゲンもどこふく風と老いたのか
いたずらがすぎて困ると犬のこと

八尾市　中島　春江

もう帰るもう帰ろとて呑んでいる
古里の訛りにつられ話しかけ
選挙戦無駄なはがきが今日もくる
護身術老いゆっくりとゆっくりと

加東市　安達　厚

母の日に一家とビデオみる至福
ハリウッド映画の本にのめり込む
見守ってくれる家族へうた残す
どの屋根も美的に魅せて日は昇る

松江市　柏井　日出子

ひと言が多いばかりに角が立ち
少子化で鯉も泳がぬ子供の日
老いてなお感性磨く日々重ね
盛衰は時の流れと身に滲みる

寝屋川市　小嶋　みさと

牡丹咲く瞬時の命輝いて
食糧難減反裏目早や迫る
西日射す窓に若葉の影やさし
富士登山薄い気圧に堪えて行く

大阪府　西川冷子

教育も家庭も愛の花咲かせ
表面の笑顔出せても悟られる
顔硬い親の心を子は察知
信じてる子供の才は数値出ず

門真市　矢阪英雄

新緑の山のうねりに眼を洗い
ちまき食べ菖蒲湯好きな母偲ぶ
孫を師にカタカナ言葉習って生き
茶摘みする指に音符を弾ませる

府中市　岩本雅代

みどり児と花見の平和ありがたし
花見にも一期一会の喜寿の春
桜にも七つ釦の悲哀あり
妻の目をかいくぐり呑む酒うまし

枚方市　小川良吉

命日に供えて欲しい豆ごはん
降りるまでしゃべりが止まぬシルバー席
祭日の国旗　不思議な物らしい
酔うたふり本音ちらりと聞かされる

三田市　上垣キヨミ

八十路坂すてきれぬまま欲を追う
兄弟会姉の米寿を先ず祝う
ときめいて縄の梯子に揺れている
カーテンの色と彼女に癒される

大阪府　若月祐作

ダイエットもったいないに負けている
ケイタイの絵文字のハート勘違い
羊羹で和む二人のおやつどき
夫の手料理褒めて奥様カルチャーに

泉大津市　助川和美

無医の村みどり溢れているばかり
若葉映え同窓会の古希若し
街に住み向う三軒独り者
職退いてガイドブックの積み重ね

豊中市　源田啓生

善い人が集い議論が深まらず
八起き目のチャンスは妻が吟味する
遠慮なく踏めと踏み絵の亡父が言う
塩すべて敵に贈って好々爺

羽曳野市　吉村久仁雄

人の世に春夏秋冬似ていたり
誓詞読みそれから永い戦なり
年毎に忘れたいこと増えてくる
昼の月何か忘れているようで

奈良市　尾畑なを江

ママの手の中が一番子の寝顔
貧富の差気にせず過疎は平和なり
美しい国に格差はまだ消えず
仏心を極める滝がそこにあり

栃木県　岡野すみれ

年寄りも忙しくなる花続き
糖尿の所為でブラック味覚え
図書館の椅子は居眠り装置付き
ストレスの渦中へ向かう月曜日

北名古屋市　片岡文男

湯桶抱き名産店をはしごする
くま取りの顔もあざやか親子鷹
思い出が後先になるローカル線
思い出を抱いてる指環光ってる

大阪市　吉川弘泰

耳掃除しただけ耳鼻科異常なし
美しい日本洞爺湖だけですか
自転車もエヤー満杯レッツゴウ
ハイビジョン女優埋めてる顔のしわ

大阪市　平井露芳

初咲きあり庭いっぱいの春満たす
しがらみも捨てて歩けた心地よさ
心の友に逢えばストレス逃げて行き
犬までが私の散歩シラン振り

大阪市　吉内福世

列島は赤字忘れて花に酔う
さくら餅つい手の出てるダイエット
候補者の空約束の票あつめ
飛鳥美人染みつけられて歎いてる

大阪市　澤田定子

銀行が挨拶にくるボーナス日
今日もまた墓と仏壇セールビラ
ない知恵をあるとみせてる老いの知恵
脱線はいつもきまってネオン街

大阪市　太田としお

九条を曲げて昭和をやり直す
咲いている内はチヤホヤ散ればゴミ
知恵が勝ち情が薄れてゆく地球
歩には歩の言えぬ正義の貌がある

茨木市　島田誠一

年金の財布でおごる回る寿し
肩で風切った今では息が切れ
酒飲んで男の四季の花が咲く
窓際に夢を追ってた人の席

河内長野市　宮守正博

師匠の座育てた弟子に追い越され
二世帯の家は建てたが嫁は来ず
満月に二人の長い影ぼうし
日本国菊の紋章生きている

河内長野市　黒岩靖博

河内長野市　内海綾乃

我慢してリハビリするよ歩くため
自転車こぐ孫に寄りそう祖父らしき
父と孫立体パズルカシャカシャと
カラオケでマイク離さぬお父さん

岸和田市　中岡香代

朝うつろ夜は元気で眠れない
旨いエサ犬猫食べて超肥満
ハンディーも見方かえればオリジナル
世界一幸せなとき出産後

岸和田市　米富淳風

たまの客家中磨く怠け者
男の子教えもせぬにあぐらかき
予約でも不意でもどうぞ福の神
たまに会う和服美人につい見とれ

高槻市　安田忠子

床の間の桜お茶席盛り上げる
転校の孫乗せていく千の風
ためらって買わなかったら友着てる
青空を味方に歩む我が人生

高槻市　植地勇

おまけされ余分に物を買って来る
喋るより働く事を教えられ
ハイキング顔の小虫に悩まされ
納得に時間の掛かる事多く

藤井寺市　津田シルク

ふたつ三つと蕾数える手が温い
誰にもある一つ二つの微罪なら
歌聞けば頭の中はスクリーン
病歴は数えきれぬが今元気

藤井寺市　増井ヨシ枝

朗らかな胸に漂う悩みあり
つつじの香ちょっぴり甘い散歩道
退屈な時にかかった長電話
お偉い方と知らず話した春帽子

八尾市　平川幸枝

春先の脳はあちこち故障する
老体のリズムを知って楽になる
軽いのり長生きしてねと言われても
手のつかぬ月日は希望埋めてある

八尾市　笹倉ひろし

薫風を呑んで旅立ち準備する
辛抱の数だけ知恵がついてくる
縄のれん上司肴に愚痴が咲く
新学期かわいい児らの手が挙がる

八尾市　今川孝子

孫にならハートメールを送ります
幸せとみまちがってた友離婚
まずいなァ娘に通帳を教えてた
酒と飯夫定年肩が凝る

孫守は冷房のある場所が良い
浮かんだらすぐ書きとめな忘れ去る
退職後肩書早くおろすが勝ち
頭がいる軽い笑いが作れない

神戸市　武田恵美子

遠足の列を迎える鯉幟
遊具事故死者で連休幕となる
また戻る来た土の道歩も馴染む
近道を辿ったはずが袋小路

尼崎市　桑原東園

傘寿過ぎ転ばぬように油断なく
もちの木の並木道あり道後の町
つつじ咲く今満開の青い空
月桂樹花芽の消えて葉芽になり

尼崎市　古川正子

思案顔猫も迷いがあるらしい
同窓会出世しすぎた奴は来ぬ
静止衛星空から子供の見張番
交差点人が流れてぶつからず

尼崎市　加川靖鬼（靖真改め）

車窓から景色ふるさと近くなる
山間で泳いで見せる鯉のぼり
エビネ咲く木陰幸せ夏を呼ぶ
よい雨に時期かとさがすワラビ出た

加東市　黒崎美紗子

平和になり背中合せの家族ふえ
野菜植えあれもこれもと夢広げ
蒔かぬのにあちこち花が咲く畠
実る日を計算しつつポット苗

篠山市　永井かほる

楽しみなドラマの時に長電話
題名を知らぬが耳になじむ歌
見舞うたび子供にかえる母の顔
まご正座夫婦げんかを聞いている

西宮市　石野照代

梅の香をボストンの娘へ運ぶ風
新家庭不安吹き消す婿の顔
デジカメがしあわせ写す娘の笑顔
中国の微笑外交裏を読む

奈良県　辻内げんえい

人間の仕草に怒る大自然
スポーツに情熱今は遠く去り
情熱家人のおだてに乗りやすい
正しいと信じる前に裏さがす

生駒市　小西稔

さつき咲く朝露色に染めながら
いいわけとしか受けとれぬ目の動き
人の目をそらす話に情がない
一日の感謝気がかり捨ててから

岩出市　村中悦男

紀の川市　木村徑子

究極のデザイン日の丸が好きだ
まあまあと子も孫も言う蚊帳の外
もっと歩けもっと減らせの処方箋
ロボットじゃ地球の未来語れない

鳥取市　近藤秋星

故郷のロマン伝える流しびな
握手した人が入れると限らない
蒔かぬ種は生えぬたくさん蒔いとこう
ジェットコースター起こるべくして起きた事故

倉吉市　前田喜美子

様変り生徒敬語を使わない
宝くじもしも当れば青くなる
目の手術朝の散歩にサングラス
農作業パート頼めば高齢者

境港市　中井虎尾

下駄箱という名の箱に靴を置く
無視をした相手を俺も無視をする
三日月よお前を書いた漢字　月
服を着た凶器が住んでいる日本

境港市　遠藤トミ子

汁吸って嫁に感謝の朝明ける
八十路こえ連休の日はおるすばん
老いてからマンションぐらしままならぬ
おひな様今年も会えてありがとう

鳥取市　谷岡清子

星あおぐ宝石ですと良く光る
葉桜が風を味方によくなびく
さわやかな風一日の無事祈る
父に母しばし逢う瀬を夢の中

鳥取県　北村稔

枠がとれ普通の人で楽になる
離婚せぬ夫婦ルールを守ってる
暴力団親もあるだろ子もあろう
音譜などよめないくせに歌うまい

鳥取県　岡村孝明

青パトに子ども守らす世がこわい
パトロールゆるいと悪が目をさます
不都合な話に貝の真似をする
パズル解き日課に呆けを防いでる

鳥取県　飯野菖子

深呼吸腹の底まで春の風
春だから風を吸っても飛べそうだ
体にも休みあげたい春日和
デザインのない真心で生きている

鳥取県　松岡照美

二の腕で主支える人の字に
愚痴の相手感謝をしつつ共に住む
苦難去り太く座った腹の虫
朝一番値下げの品に車出す

絣見て幼きころを振り返る
子供の頃レンゲの花で首飾り
老人とゆるい話をして笑う
生きる力介護によって知らされる

鳥取県　坂本智子

こころ住むあなたこっそり語りかけ
母の海ざぶんざぶんと寄せてくる
ショーウインドウふと見た母はこの私
早起きをもてあましてる休刊日

鳥取県　斉尾くにこ

名を呼ばれ這う立つ歩く走り出す
天国に一番近い君の側
よく笑う心の涙見せぬよう
いちにちの日記こころに蓄える

松江市　相見柳歩

田植機の前と後を対比する
棚田植人海戦術ボランティア
田植機の母がさわれば静かなり
補植してハート満喫千の風

尾道市　木曽一徳

なごやかに老後を生きる道を撰る
セットした髪をためらうヘルメット
息子には聞きにくいこと嫁に聞く
自己チェックそろりそろりと冬の音

香南市　百田幸

のほほんと見えてポイント外さない
警告はこれで十分震度4
不仕合わせばかりでしょうか泥の舟
時々は本音を吐いて胃を厭う

高知県　いの静草

それぞれに息子夫婦が電話くれ
笑いなさい体にいいと妻が責め
憲法論丁丁発止と論じられ
帰ったね二人に戻る庭のバラ

唐津市　岩崎實

第101回
大阪川柳の会

日時　8月1日（水）17時開場　18時締切
会場　梅田駅前第2ビル5F生涯学習センター
宿題と選者　△影・濱邉稲佐嶽△ポーズ・上野多恵子△天使・太田扶美代△余分・磯野いさむ
会費　千円　欠席投句7月30日まで（会員のみ）
〒532-0025　大阪市淀川区新北野1―3―4―706
本田智彦宛

第11回 川柳展望全国大会

日時　8月3日　**会場**　ホテルアウィーナ
会費　2000円
題・選者他詳細は125頁に掲載。
主催　川柳展望社

第31回 全日本川柳二〇〇七年栃木大会

表記大会は、6月10日栃木県鬼怒川温泉あさやコンベンションホール華厳で開催、事前投句一七五六名、ジュニア五〇七三名、当日出席五三七名の中から選考され受賞句が次の通り決定した。（太字は本社同人）

〈一般の部〉

文部科学大臣賞

レシートへ一人暮らしを刻まれる
栃木 大澤 いさ子

参議院議長賞

焼き鳥の串にも絡みつくアジア
奈良 板垣 孝志

川柳大賞

発酵の蔵は明日を急がない
奈良 菱木 誠

大会賞

初恋のきれいなままのスクリーン
栃木 橋本 紀久子

蔵の町スローライフが往き来する
神奈川 堀井 勉

天と地の合間に冬の滝を置く
兵庫 山本 忠良

まっすぐに生きて来たんだ資産ゼロ
新潟 福田 柳太郎

蔵の風昔話を積み上げる
東京 齋藤 由紀子

忘却というシェルターに潜り込む
茨城 佐瀬 貴子

露ほどの疑い持たぬ友に負け
東京 鈴木 瑠女

輝いたあの日を辿る並木路
岡山 **大石 あすなろ**

ユニークなパッチワークになるアジア
奈良 ひとり 静

百選の滝奢りなく邪心なく
広島 桒田 かずえ

雄叫びを集めて滝は迸る
兵庫 種田 淑子

〈ジュニアの部〉

栃木県知事賞

がっこうはみんないるからすごいんだ
広島 岡崎 清弥

日光市長賞

フライング友がしたのにどっきどき
愛媛 大立 奈緒

教育新聞社賞

教科書をひらくとそこは春だった
東京 綿貫 佳奈

川柳つくばね200号記念誌上大会

19年8月号を以って200号となります「川柳つくばね」は感謝の意味をこめ記念誌上大会を開催致します。奮ってご参加下さい。

課題と選者 各題2句詠 用紙便箋可
「気張る」 大木 俊秀・西出 楓楽
伊豆丸竹仙・井原みつ子
「雑詠」 大野 風柳・斎藤 大雄
岩田 明子・近日 発表

投句料 1000円 **締切7月20日**（消印有効）
各選者秀句へ呈賞「川柳つくばね」9月号皇

投句先 〒300-1501 取手市双葉2-24-11
葛西 清 ☎0297-83-2410

第8回石原青竜刀賞募集

（川柳・明日香）

兼題と選者 5人共選 1句詠
「手」 佐藤岳俊・須田尚美・深町金鳥・津田 暹・成田孤舟

用紙自由（清記選）

参加費 一〇〇〇円（発表誌呈）

締切 七月三十一日消印有効

賞 石原青竜刀賞・正賞（楯と三万円）他

宛先 〒369-1102 深谷市瀬山21-9
明日香川柳社

愛染帖

新家　完司　選

空想もだんだん世帯じみて来る

弘前市　高橋　岳水

（評）美人と恋をしたり、世界を駆け巡ったり、空想ぐらい自由にすればよいのに…。賢くなって分別がついてくると、夢が失せる。

バラ満開老いの家とは言わせない

和歌山市　榎原　公子

（評）その心意気や良し。咲かせた花は我が子であり我が分身。ご近所の人や通りすがりの人がどれほど慰められていることであろう。

ゴキブリよ今日はお前の命日だ

東かがわ市　川崎ひかり

（評）一方的に通告されてしまった気の毒なゴキブリ。ひょっとしたら、私たちの最期もこのようにして決められているのかも。

メール打つ少しの嘘もないように

八王子市　播本　充子

（評）嘘には「すぐばれる嘘」と、「後からばれる嘘」しかない。顔色を読まれないメールなら後者。嘘はエネルギーの無駄遣いである。

落ち目だと思っていないけどひとり

和歌山県　森下よりこ

（評）こころが強くないと一人暮らしはできない。そして、こころが強い人は、どんな状況に陥っても「落ち目」などとは思わない。

親切なテレビ洗濯せよと言う

堺　市　矢倉　五月

（評）他には「危険ですから白線の内側でお待ち下さい」等など、かくして、指示を受けないと動かない「指示待ち人間」が生まれる。

木の芽どき喪服の多いターミナル

京都市　高島　啓子

（評）鋭い観察眼。言われて見れば多いような気もする。木の芽時は体調を崩し易い、というのは科学的に根拠があるのだろうか？

役満のチャンス逃してカップ麺

大阪市　伏見　雅明

（評）惜しかった！あれさえ上がっていれば、カップ麺など啜っていないのに…。運が大きく作用する麻雀。次はきっと勝てるだろう。

たましいのどこかに棲んでいる阿修羅

和歌山市　たむらあきこ

（評）ふだんはひっそり隠れて影も見えない激しいもの。暗闇で闘っていた時代の「原始の血」が誰の身体にも流れている。

吹田市　早泉　早人

去った恋噛みしめながら酒を飲む
滋養にと母に届けるとろろいも

ロボットは連れて行かない縄のれん

札幌市　三浦　強一

ボウフラの踊りピコピコ七五調

尼崎市　加川　靖鬼

体より大きな声で泣く赤子

豊中市　水野　黒兎

過去ばかり永くなるなりさくら散る

尼崎市　春城　年代

余所行きの言葉で喋り喉渇く

姫路市　古川　奮水

髪切って初夏の歩道を闊歩する

神戸市　山田婦美子

紫外線まだ気になって女です

西宮市　片山　忠

酔い醒めの水の旨さを知らぬ妻

唐津市　市丸　晴翠

肝心なとこほど老化して焦る

異常気象せめて心に歳時記を

西宮市　藤本　直

傘寿の宴主役の祖母は襷がけ

フーテンの寅になりたい木の芽時

鳥取市　有沢せつ子

野仏と並んで緑浴びている

よく歩く健康法で安上り

三田市　堀　正和

勝敗にふれず努力を褒めてやる

ヤル気だな赤いTシャツ干してある

三人で住み石鹸が三個ある

大阪市　前　たもつ
あせらない僕の居場所はここだけだ

尼崎市　小池　幸子
老眼鏡かけた上から虫眼鏡

和泉市　横山　捷也
春眠を遮る人のないくらし

和歌山市　木本　朱夏
品数は揃えて愛のないお皿

堺　市　奥　時雄
ポックリはいいが突然でも困る

和歌山市　楠見　章子
店の名を訊きたい髪とすれ違う

大阪市　谷口　義
出席にマルどんな自慢が聞けるやら

寝屋川市　冨山ルイ子
励ましは隣に坐るだけで良い

寝屋川市　籠島　恵子
卓袱台で本を読んでる母がいた

吹田市　穴吹　尚士
仲違いするどい痛みだけ残る

海南市　三宅　保州
叱られて宥めた痕のある日記

寝屋川市　籠島　恵子
子の帰省妻は丸ごと母になり

寝屋川市　冨山ルイ子
立法も司法も妻が取り仕切る

大阪市　谷口　義
この店は覚えておこうオムライス

尼崎市　小池　幸子
ドア閉めて酒の肴になっておく

和泉市　横山　捷也
サボテンは何にも無駄なものがない

和歌山市　木本　朱夏
ライトアップよりちょうどよい月明かり

枚方市　海老池　洋
前頭葉あたり叩くと思い出す

藤井寺市　若松　雅枝
一段ずつ上がれと書いてない梯子

鳥取県　竹信　照彦
診察券数えて今日が動き出す

神戸市　田中　章子
子供の日動物園へ老い二人

池田市　上嶋　幸雀
除草した草は穴掘り地に返す

立川市　柏野　遊花
孫育つのを楽しんで老けていく

東京都　岸野あやめ
初孫を寝かす根気は夫の勝ち

高槻市　植地　勇
会える時会いたい人に会っておく

堺　市　羽田野洋介
桜などあったかの如みどり愛で

池田市　栗田　久子
親離れさせてはやらぬ鯉のぼり

倉吉市　松本よしえ
早起きの雀朝から楽しそう

大阪市　奥村　五月
破れそうになるまで詰めるゴミ袋

寝屋川市　北田ただよし
同窓会酒も飲めない餓鬼大将

鳥取市　徳田ひろこ
今日もまた暗いニュースに起こされる

堺　市　加島　由一
存じ上げてはいませんと電話切る

三田市　阪本　藤朗
銃が増え死人が増えるのは事実

和歌山市　古久保和子
進化するメールの友に従いてゆく

高槻市　佐甲　昭二
緑陰でぼーとオゾンを補給中

大阪府　畑中　節子
酒の量少しで酔えるようになり

八尾市　梅原　荘治
縦列駐車不可と私の免許証

堺　市　村上　玄也
のらくろを胸に棲ませてまだ生きる

西脇市　七反田順子
山の色変れば風の香も変る

子供より親の躾は誰がする

継ぎ接ぎの知識駆使して受け答え

子育てに喜ぶツバメ駅に舞う

何らかのサイン母からきた手紙

藤井寺市　鴨谷瑠美子
ふる里の鏡に置いてきた細身

堺　市　志田　千代
つかみ取り手が大きくて恥ずかしい

大阪市　古今堂蕉子
二の腕の太さ袖なしあきらめる

三田市　北野　哲男
馬の尾の毛で嫋嫋と鳴る胡弓

鳥取市　土橋　螢
謎かけて西へ夕日が落ちてゆく

香芝市　大内　朝子
泣くことは恥じゃないんだそうだよね

横浜市　金森　徳三
老い二人昔引きずる昭和の日

大阪市　神夏磯典子
楽な方には誘われる老いの足

八尾市　高杉　千歩
コミュニティーバスでシネマへ翔んでいる

枚方市　伊達　郁夫
長風呂を心配してる猫のひげ

八尾市　中島　春江
呆けたのか今は判らん事ばかり

河内長野市　坂上　淳司
飽食を知った仕合せ不仕合せ

鳥取県　佐伯　やえ
鎌をとぐわたしに名刺などいらぬ

尾崎市　田辺　鹿太
自動車は運転出来ぬから嫌い

橿原市　居谷真理子
満員の電車をとめたポリ袋

松原市　玉置　重人
燃えるゴミ燃えないゴミと知るカラス

西宮市　牧渕富喜子
指はまだ覚えています糸電話

鳥取市　夏目　一粋
年々に生年月日言いづらい

藤井寺市　高田美代子
雨季に備えて点検しとく傘の骨

八尾市　田邊　浩三
スタートに並んだ時は友だった

和歌山市　根田よしこ
老母の背を流し肩揉む平和な日

豊中市　谷川　勇治
土曜日に洗濯にくる娘いる

富田林市　片岡智恵子
美しい夕陽悩みの小さいこと

米子市　木村富美子
ふる里の土を忘れぬ土踏まず

鳥取市　土橋はるお
SLに乗って筍掘りに来い

和歌山市　田中　みね
十人十色の鮓に出会う旅一夜

大阪市　井丸　昌紀
チャンス到来念入りに髭を剃る

紀の川市　宇野　幹子
終着駅へせっせと歩む万歩計

大阪市　小谷　集一
二礼二拍手神様に念を押す

倉吉市　野口　節子
病院で疲れ上乗せして帰る

鳥取市　中宇地秀四
子の自慢聞いた耳くそほじり出す

シドニー　坂上のり子
香水が線香よりも鼻を衝く

八尾市　吉村　一風
したたかに生きるてどないすればいい

藤井寺市　太田扶美代
雑菌の免疫力は持っている

吹田市　太田　昭
ライバルと思ってくれる人も無し

富田林市　中井　アキ
プライドの慰め方も知っている

松江市　松浦登志子
還暦を前に大志を語ろうか

大和郡山市　坊農　柳弘
ああ言えばこう言う倦怠期の枕

鳥取県　羽津川公乃
達筆でないから返事すぐに書く

シドニー　森本クックバラ
浮かぶ句が前頭葉を寝付かせず

河内長野市　村上　直樹
腹切った社長顧問で生きている

武蔵野市　亀井　円女
いい伝説きっとあるはず深い森

松江市　川本　畔
わたくしがしばらく止まる大ニュース
弘前市　福士　慕情
甘さ控えめ昔の味が消えてゆく
鹿児島市　五反田柾子
いっせいに電話通じぬ震度七
和歌山市　喜田　准一
息切れをするほど背負わない荷物
大阪市　柴本ばっは
えこひいき絶対しない秒針だ
唐津市　坂本　蜂朗
帰省した娘と妻の夜が更ける
鳥取市　倉益　一瑶
本当は仲良しになりたい無口
和歌山市　田中　すず
寂しいかい空缶一つ転がって
高槻市　瀧本きよし
二枚舌使いピンチを切り抜ける
紀の川市　辻内　次根
曲がり角後姿の消えるまで
高槻市　富田　美義
ケセラセラ活断層に我がねぐら
出雲市　園山多賀子
土の筆つくしと読むは意を得たり
四條畷市　吉岡　修
水だけは本家に負けぬ小京都
鳥取市　岸本　孝子
流行の服でカルチャーはじこする

倉吉市　糀谷　和郎
老いてなお妻のネットは増え続く
三田市　上垣キヨミ
ゴハンよの声は聞こえる老いの耳
尼崎市　山田　耕治
剪定の下から妻が指図する
大阪市　大川　桃花
こそこそとせんでも父は気付かない
唐津市　井上　勝視
欲が出て雑穀入りの老いの膳
大阪府　籾山　隆盛
プロポーズ一言一句覚えてる
吹田市　大谷　篤子
手のひらを開いて怒りやわらげる
鳥取市　岸本　宏章
省略の限界水着から学ぶ
大阪府　小栢こずえ
笑い声聞いて一人でする仕事
唐津市　久保　正剣
盆栽の隅まで今日は緑の日
米子市　小塩智加恵
ごめんねを一日延ばし出しそびれ
藤井寺市　鈴木いさお
キリストも仏陀もお酒飲んだろうか
大阪市　津村志華子
五月雨に羅漢ずらりとお身拭い
泉佐野市　稲葉　洋
灰色とグレー与野党いい勝負

岸和田市　中岡　香代
花びらの散るころばれた夫の嘘
鳥取市　吉田　弘子
脇役も主役もいない蟻の列
高知県　いの　静草
捨て猫が僕の顔見て寄ってくる
海南市　堂上　泰女
回復期ここで油断をせぬように
高槻市　傍島　克治
巣立つ子に送る一文字忍と書く
柏　市　河野　桃葉
枕木のずれを保線士見逃さず
豊中市　安藤寿美子
葬式はケチっておけと言ってある
唐津市　宗　水笑
空腹の眼には美人も只の人
倉吉市　米田　幸子
枠けって宇宙目指した竹トンボ
松江市　相見　柳歩
吸いつける君の笑顔は磁石だね
三田市　石原　歳子
休刊日借りてる本を読むつもり
大阪市　近藤　正
忘れ物思い出すのに暇かかる
寝屋川市　森　茜
温泉行きのバス老人の列つづく
羽曳野市　吉川　寿美
連休の疲れを癒やすウチの風呂

誹風柳多留一一篇研究 23

山口由昭・小栗清吾
伊吹和男・山田昭夫
増田忠彦
清　博美

152 **折釘へかけるがいなや早ィ事**

山口　江戸の辻駕篭、いわゆる四つ手駕篭には外側に折れ釘が付いていて、客の履き物をそこにかけたらしい。『守貞謾稿』には「江戸民間ノ専用ノカゴ也」とあってその略画が載っているが、折れ釘までは見えない。また、「吉原近クヨリ出ル四ツ手カゴニハ、窓ナキ也」ともある。ともかく竹と割竹を使って編んだ粗末な辻駕篭である。ちなみに料金は日本橋辺から吉原大門まで大略金二朱とある。

本句の場合も吉原通いの客を乗せたのであろう。履き物を折れ釘に掛けるやいなや脱兎の如く駆け出したのである。客に「酒手を弾むから急いでやってくれ」とでも言われたのであろう。

折釘へ下駄をかけるとかつぎあげ　一〇10
四ツ手かご隠居ゆる〳〵やれとのり　明五仁4

清　賛。竹に釘は打てぬから、縛り付けてあったか。

153 **四わりでも坪ハこわいと女房いひ**

山口　「解釈と鑑賞川柳江戸の遊び」のうち大村沙華氏の「賽賭博」によれば、「四割」とは賽を使ったチョボ一などの賭博で、当たった場合、戻りが賭け金の四倍になる賭け方らしい。「坪」は「壺」で、賽を壺で伏せてやる賭博、ここでは単に賭博と解してもよい。賭場から帰ってきた亭主に対して「例え四倍になっても博打は恐いものだ」と女房が言っているのである。この場合亭主が勝って戻ったのか、負けて戻ったのか明らかでない。

つよい事四わりてどふをとりの丁　宝八梅
こわそうに四わりをふせる恋の内　九23

清　賛。

154 **外に能キはかりことなく又もみぢ**

山口　男達は吉原や品川など悪所へ遊びに行くのに、家人の手前、謡講へ行くとか稽古事へ行くとか言って家を出たものである。他に寺社に参詣に行くとか、名所見物に行くことも理由になった。本句の場合は紅葉見物に行くと言って出るわけである。吉原に近い正燈寺と品川の海晏寺が紅葉の名所であり、川柳の世界ではここへの紅葉見物は即ち遊郭へ行くことと同様の意になっている。ほかにもっと良い言い訳はないのだろうか。

女房をかみふせて行く正とうじ　七12
紅葉見といつちや出さぬとむすこい、　明七義1

小栗　賛。「ほかにもっと良い言い訳はないのだろうか」と思いつつも、「ほかによき謀なく」また「紅葉見に……」といって出る。

紅葉見に母ハ去年のいけんをし　明二桜2

清　賛。「ほかによき謀なく」は文句取臭いが……。

155　**花よりも柳のわびハもつれたり**

山口　これも遊びに行く理由付けの状況を詠んだもので、場所は隅田川堤である。ここは飛鳥山と共に桜の名所で、花見の帰りに吉原に引っかかるのが常である。しかし、本句の場合は花見でなく、同所（墨田区堤通一丁目）にある木母寺の梅若塚へお参りに行くと言って出たのであろう。同所は三月十五日が忌日で、由緒ある「印の柳」が植えられている。遊んで帰ってから女房と一悶着あり、詫びが聞き入れられぬのを「もつれたり」と表現しているのである。柳の枝が風にもつれるのを掛けている。

梅若の柳狂女の乱れ髪　　新二10
梅若は女房のにくむ墓所なり　　明六桜2
むめわかに十も多イを母たつね　　天七寄1

小栗　賛。柳の枝がもつれるように、柳の詫びはもつれる、というのが本句の技巧のテーマで、花の方はつけたり。もちろん梅若忌の吉原行き。

清　賛。

156　**居つゝけに毎朝鼻をつまゝせる**

山口　吉原に居続けをしている客が、朝寝をしている花魁の鼻を毎朝摘んで起こしている図である。何とも怠惰で悩ましい風景である。

しかし、これは男が花魁に鼻を摘まませているともとれるのだが、どちらであろうか。それにしても何日居続けるのか。

看病されるやう な居続　　二42
居続の髪べつ甲で撫付ケる　　二六32

山田　吉原では毎朝糞尿を搬出していたから、その臭のせいでしょう。山東京伝の「錦之裏」の冒頭に、廓の朝の情景があり、その中に「ヲヤもふそふじがきたさふだ。いつそ匂ふよ」とあります。遊女たちは馴れたものでも、客はそうはいかない。

糞ひ取に込朝の大門　　ケイ一九7

清　山田氏御明解。客が自分の鼻をつまむ。

157　**飛ヒくに鉄漿をもらつて憎れる**

山口　鉄漿は酸化鉄の液で女性が歯を黒く染めることで、お歯黒ともいわれる。既婚女性の印として、嫁いだ後、子供のできた時などに付ける風習だが、未婚でも行われた。初めて鉄漿を付ける行事を「初鉄漿」といい、「鉄漿親」と呼ばれる女性が種々面倒を見た。七軒の家から鉄漿を少量ずつ分けて貰い、それを混ぜて付ける事になっている。また、貰った家へは「鉄漿の礼」をする。普通は隣近所の七軒からこれをもらうが、主題句の場合、何らかの理由で近所を飛び飛びにして貰ったため、貰わなかった家から何か含むところがあるのかと思われて、憎まれたというのである。

初がねハぱち〳〵とした顔に成　　六5

清　賛。

159　**六郷にとゞまつて居るはなれ馬**

山口　品川の在から東海道川崎宿の間に多摩川があり、ここに六郷の渡し場があった。当時橋はなかった。句意はそのままのもので、放れ馬も六郷まで走ってくると、そこが川だからそれ以上どこへも行けず止まっているというのである。

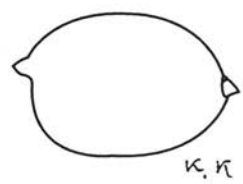
関札へ来てつき当ルはなれ馬　　安元85
はなれ馬草を喰てる行キとまり　　安六礼6

山田　賛。さしもの放れ馬も、川には勝てない、というのがミソなのでしょう。

清　賛。当時放れ馬は多かったに違いない。交通事故もあったのであろう。

共選欄 欅抄

（薫風書、カットとも）



「痒い」 川上大輪選

瘡蓋の痒みも嬉し回復期　富田林市　中崎　深雪
他人から見れば歯痒い事に見え　高槻市　乙倉　武史
言い足りぬ言葉が喉を痒くする　倉吉市　糀谷　和郎
ひと回りして来た噂むず痒い　西宮市　亀岡　哲子
負わされた傷はのちのちまで痒い　鳥取市　岸本　宏章
脳みその隙間が痒くなる加齢　和歌山市　古久保和子
築二十歯痒い家になってきた　京都市　高島　啓子
仮面を脱ぐとあちこちが痒くなる　鳥取市　夏目　一粋
会う度に歯痒い思いして別れ　和歌山市　喜田　准一
歯痒さを我慢している嫁の味　和泉市　横山　捷也
認知症それから痒くなる昨日　和歌山市　牛尾　緑良
大金を持つと背中がむず痒い　大洲市　中居　善信
本当に痒いところは教えない　枚方市　伊達　郁夫
隔靴掻痒心の中が伝わらず　弘前市　高橋　岳水
青空の痒いところに凧揚げる　海南市　小谷　小雪
ライバルの視線に背がむず痒い　岸和田市　雪本　珠子

「痒い」 松本文子選

痒くない頭も掻いてスミマセン　池田市　北出　北朗
連休が続き懐痒くなる　鳥取市　上田　俊路
一票へ痒いところを掻きに来る　羽曳野市　吉村久仁雄
仕方なく自分で背中掻いてます　大阪市　大川　桃花
ほめられてちょっと痒くて海に出る　和歌山県　小谷　小雪
むず痒くなったいのちの洗濯日　枚方市　海老池　洋
痒いとき痒いと言える人がいる　鳥取市　岸本　孝子
痒いとこみんな知ってるお母さん　倉吉市　山中　康子
痒いけどあなたのために小芋剥く　和歌山市　玉置　当代
痒いとこ掻けて生きてるナと思う　高槻市　瀧本きよし
もどかしい返事全身痒くなる　砂川市　大橋　政良
チャックした口がそろそろむず痒い　和歌山市　喜田　准一
大声で叫べば痒さ消え失せる　西宮市　秋元　てる
麦の穂につつかれ痒い青い空　寝屋川市　森　茜
虹色を溶かして痒いとこに塗る　鳥取県　小西　雄々
ＤＤＴ昔むかしの恩がある　大阪府　籾山　隆盛

ボランティア国が褒めるという痒さ　三田市　堀　正和
緊張をするとあちこち痒くなる　寝屋川市　籠島　恵子
右の手で掻かぬと痒さとまらない　大阪市　升成　好
脳味噌が痒いんですよ恋かなぁ　豊中市　谷川　勇治
むず痒くなったいのちの洗濯日　枚方市　海老池　洋
プロポーズ何度もされて痒くなる　和歌山市　柏原　夕胡
二階から背中掻いてと降りてくる　堺　市　奥　時雄
痒いのか時どき地球身を揺する　三田市　阪本　藤朗
孫の手を作った人はすごい人　東かがわ市　川崎ひかり
お互いの痒い話は止めましょう　尼崎市　田辺　鹿太
温暖化地球も痒くなってくる　奈良県　渡辺　富子
今にしてお墓を掻いてあげたとて　東大阪市　北村　賢子
痒いとき痒いと言える人がいる　鳥取市　岸本　孝子
痒いとこ掻いて貰ったことがない　和歌山県　森下よりこ
他人の手借りて余計に痒い背　鳥取市　福西　茶子
痒いとこみんな知ってるお母さん　倉吉市　山中　康子
水虫がおしゃべりしてる靴の中　横浜市　中尾　哲代
総理殿痒いところはそこじゃない　東広島市　福島　万年
痒くないところを掻きに来る他人　池田市　上嶋　幸雀

秀　句

痒いとこ自分でかけという福祉　大阪市　前　たもつ
地球儀を回せば痒いとこばかり　出雲市　竹治ちかし
他人には掻いて貰えぬ足の裏　鳥取市　徳田ひろこ

軸　吟

痒いのはあなたが噛んだ小指です

通帳の利息見ている胃が痒い　和歌山市　福本　英子
見たくないものを見てから目が痒い　藤井寺市　髙田美代子
痒くない頭もかいて仲直り　京都市　桝本　宏子
羽音きくだけで体が痒くなる　和歌山市　楠見　章子
手毬ころころ痒いところを通り越す　美作市　山本　玉恵
痒いとことこん掻いてから別れ　京都市　都倉　求芽
認知症それから痒くなる昨日　和歌山市　牛尾　緑良
気くばりを痒い所に届かせる　寝屋川市　冨山ルイ子
痒い虫おこりだしたら止まらない　境港市　遠藤那珂子
お互いに痒いところは知っている　川西市　西内　朋月
温暖化地球も痒くなってくる　奈良県　渡辺　富子
歯痒いがそっと見守る子の巣立ち　吹田市　穴吹　尚士
紙風船痒い黄砂に立ち向かう　西宮市　山本　義子
本当に痒いところは教えない　枚方市　伊達　郁夫
仮面を脱ぐとあちこちが痒くなる　鳥取市　夏目　一粋
うずうずと痒いあの日の軽い嘘　富田林市　中井　アキ
痒いとこたくさんあって病む地球　鳥取市　録沢　風花
むず痒い言葉の背で耐えている　松江市　川本　畔
五月晴痒いことなど忘れよう　出雲市　小豆澤歌子

秀　句

地球儀を回せば痒いとこばかり　出雲市　竹治ちかし
痛痒い場面早送りで回す　米子市　政岡日枝子
痒みに耐えているのですか仁王様　海南市　三宅　保州

軸　吟

痒いこともあったレモンの一年間

地球

濱野　奇童選



地球から追放したい神がいる　蜂朗
中東の神が地球に穴あける　修
異常気象地球がレッドカード出す　みつこ
震度七地球のうめきだと思う　(矢)五月
地球にはロボットだけが残るだろう　倫子
草に寝て心と響き合う地球　朝子
地震雷地球が割れるかも知れぬ　螢
地球にもこれが優しい布おしめ　深雪
ウルトラマン地球のピンチほっとけず　遠野
地球儀を回せば銃の音がする　遡行
地球儀のジャパン発光色に塗り　康子
落日の海は地球の絵の具皿　(畑)節子
走っても飛んでも地球抜けだせぬ　(花)順子
丸洗いしたい地球に住んでいる　鐘造
浄土とは地球のどこにあるだろう　雄々
日向ぼっこほどよい距離に棲む地球　隆盛
地球へと憧れていたかぐや姫　泰女
ストレスが溜り地球がクシャミする　慕情
地球儀に国境という傷があり　久仁雄
春の土手地球の温みありがとう　勇治
地球儀を回して終る夢旅行　(安)泰子
目を閉じて地球の回る音を聴く　明子

地球儀に乗ってぞろぞろ蟻の旅　照彦
わがままな神さまばかりいる地球　霜石
よく揉めるヒト科を地球もて余し　淳
もめ事の地球を嘆くお星さま　孝一
地球儀の端で平和の声を上げ　洛酔
老いふたり地球の隅を借りて住む　昌鼓
地球にやさしく畑仕事をしています　扶美代
青かった地球を月は忘れない　哲代
満身創痍それでも地球回ります　幸雀
地球儀を緑と青にぬってみる　蕉子
地球儀を回して探す子の任地　哲男
落日に地球の丸さ見て帰る　不二
正座して聞いた地球の余命論　四郎
逆立ちをすれば地球も軽くなる　勝
植樹して少し地球へ恩返し　いさお
佳
蕗わらび蓬地球の春を食べ　茶子
花柄の布で地球を拭いてみる　宇乃子
地球儀を回し少年夢に酔う　志洋
どの国も笑顔は同じ地球人　かつ子
美しい地球に優しい君がいる　秀四
人
宇宙から見れば地球は青いだけ　典子
地
炎抱き核抱き地球生きている　一風
天
永劫に悠悠自転する地球　加藤権悟
軸
子の画布で明日の地球が唄ってる

脱ぐ

志田　千代選



春気分セーター脱いだだけなのに　ヒサ子
春脱いで日々に緑が深くなる　みつこ
脱いだ服掻き集めての洗濯機　百合
抜け殻を蹴って風呂場へ孫走る　時雄
脱ぎ捨ててみてもメシフロまだできぬ　淳
靴下を脱ぎつつ留守電きいている　俶子
パンストを脱いで平常心になる　桃葉
大根を引き抜くようにブーツ脱ぐ　(安)泰子
エプロンを脱ぐとゆっくり食べられる　日の出
紙兜脱げばやさしい女の子　幸子
着てる服うまく脱いだらたためるよ　柳歩
燃え尽きて未練なく脱ぐユニホーム　一知
服脱いでお金もうける人もいる　喜子
脱け殻になって可愛い二度童子　道子
リハビリの靴脱げる日がきっと来る　かおり
ありがとう脱ぎ着にまでも助けられ　ルイ子
マネキンの下着脱がすのも仕事　正剣
着て脱いで鏡に首尾を見て貰う　茂代
床の間に脱いだかつらが置いてある　志洋
卒業と一緒に脱いだ正義感　くにこ
働いた形に脱いである軍手　劦
ほろ酔いが一枚いちまい脱ぎ出した　智加恵

逃げやすい形に靴が脱いである　哲男
ベレー帽脱がずトレードマークとす　クックバラ
靴脱いで背広を脱げばトム・ソーヤ　霜石
お父上背広を脱ぐとホラが出る　四郎
作業服脱げば外車のキーが待ち　かつ子
真夏日も脱がせてはやれない遺影　幸雀
羽織脱ぐ仕草も芸の高座かな　徳三
あっさりと脱いで舞台を白けさせ　遠野
脱衣場お前が呑んだお乳だよ　典子
マネキンでも脱げばやっぱり恥かしい　章久
羞恥心少しずつ脱ぐケアハウス　(矢)五月
旗上げへ一肌脱いでくれる友　修
刷毛の先ベールを脱がす考古学　高明
はっきりと言ってきました靴を脱ぐ　一壺
長袖を脱ぐとすだれが欲しくなる　宣子
　佳
マネキンが脱ぐと季節が早くなる　とし子
鍵かけて少女が脱皮する構え　岳水
老女だって脱ぐには勇気要るのです　ひかり
靴脱いだとたん大阪弁戻る　明子
殻を脱ぎ人のうしろについてゆく　柾子
　人
一肌を脱ぎ返り血を浴びている　充子
　地
靴脱いで夏の地球をかけてみる　蕉子
　天
思い切って脱いでしまえば温い風　中崎深雪
　軸
女湯のスッポンポンが闊歩する　登美代

ひたすら

鈴木　公弘選



ご先祖にひたすら感謝する五体　修
マージャンと囲碁とゴルフをひたすらに　たん吉
ひたすらにプールを歩く喜寿の腰　浩三
産声へ父はひたすら待つばかり　(安)泰子
巣立たせて照る日曇る日子を思う　岳水
ひたすらがこんこん諭す邪の道よ　照美
夢の中ひたすら亡母に詫びている　淳司
拉致の子をひたすらに待つ老いの坂　哲男
今もまだひたすら思う遠い人　一壺
脇役に徹しいつもの斬られ役　政勝
タテ縞に惚れてひたすら野球バカ　北朗
ひたすらに腰低くして客を呼ぶ　克治
寝た切りにさせぬ介護をひたすらに　かおり
子の試練親はひたすら祈るのみ　玄也
大丈夫ひたすら母のペンライト　くにこ
出来たよりただひたすらをほめてやり　直
ひたすらに待つ身切ない午前さま　喜子
カップメンばかり啜っていた白夜　霜石
ひたすらに泳ぐほかなし赤い爪　(花)順子
九条を只ひたすらに守るのみ　鐘造
ひたすらに愛して素っ気なく振られ　登美代
披露宴ひたすら父は飲んでいた　弘風
ひたすらに自由自由という孤独　螢
走れメロスひたすら走れ時間まで　順風
直情も単細胞も愛される　充子
ひたすらに尽くしポックリ逝きはった　典子
色即是空ただひたすらに飯を食う　淞丘
定年へひたすらという距離がある　すず
長生きの家系ひたすらする散歩　ルイ子
感謝状ひたすら生きて来た父へ　茂代
ひたすらに逃れて来たよ消去法　一粋
墓地まではひたすら走り切る覚悟　久仁雄
老後とはひたすら耐えることと知り　遡行
子のためにひたすら生きて孤独の死　深雪
ひたすらに祈る手術がのびている　四郎
苦情処理係ひたすら詫びる技　みつこ
千の風ひたすら聞いて立ち直り　(矢)五月
　佳
いただいた寿命ひたすら生きている　賢子
捨てきれぬ農具ひたすらこしひかり　とし子
ひたすらに奇跡信じてきた再起　扶美代
腕白にひたすら頭下げまわり　(長)康子
ひたすらに母を待つ子は母が好き　(七)順子
　人
おにぎりをひたすら握るボランティア　劦
　地
ひたすらに水やりすぎて枯れた花　シマ子
　天
短命にただひたすらの蝉しぐれ　藤井正雄
　軸
今日までのことをひたすら考える

初歩教室

題 ― 浴衣

三宅保州

私の川柳観から（五）

☆作句の対象は正面から見るだけでなく、縦・横・斜め・表・裏・上・下から観察してヒントを得るように心掛けたい。また「見る」だけでなく「観察」「考察」するべきである。

☆非凡な発想をして、平易に表現することを心掛けたい。

☆「氷が溶けたら水になる」という発想は平凡。「氷が溶けたら春になる」は非凡な発想。

☆作句の要素の発想→表現→リズム→推こうの一つもおろそかにしてはいけない。

☆「て・に・を・は」等の助詞の使い方一つが句の良否を左右する。

☆惰性や無自覚による字余り、字足らずは慎むべきである。

☆作者だけしか句意のわからぬひとりよがりの句になってないか留意すべきである。

【添削・批評句】

次の三句は浴衣に似合わぬ履き物の句です。

原 下駄こわい浴衣着たのにサンダルよ　綾乃

原 サンダルに浴衣もミニで闊歩するヒロ

原 花火見るユカタに靴のアメリカン　たん吉

作者はそれをどう思うか等を詠みましょう。

添 ニューモードですか浴衣にスニーカー

原 宿浴衣妻の姿に目を覆う　紀雄

目を覆うはひどい。「惚れ直す」が無難。

原 天神祭ナウい浴衣が花を添え　實

ナウい浴衣では天神祭が「動き」ます。

原 おみやげに浴衣一枚入れ渡米　すみれ

一枚入れは不要。渡米もアメリカでなくてもよい。「おみやげに浴衣も持って外国へ」

原 浴衣着て他人行儀な顔ができ　㈼洋子

他人行儀より「ちょっとすました」などに。

原 のり利いた浴衣父さん涼しそう　㈰信子

涼しそうは詠まなくてもわかるように。

添 糊利いた浴衣が似合うおとうさん

原 温暖化浴衣一枚誂える　昇

三句切れでぎくしゃく。一枚も不要。

添 温暖化せめて浴衣を誂える

原 浴衣には疲れを癒す魔法あり　和

説明調で、口調も堅すぎるきらい。

添 一日の疲れが癒される浴衣

次の三句は、夏の風物詩等の詰め込みすぎ。

原 ヨーヨーと金魚と浴衣夏祭り　夢

添 浴衣着も金魚すくいのあどけなさ

原 夏の夜ゆかたにうちわ風物志　トミ子

添 夏の風物詩に欠かせない浴衣

原 浴衣着て団扇青い目日本人　孔一

添 青い目も浴衣を着ると日本人　賢治

原 湯上がりの浴衣ビールで今日も締め

添 湯上がりの浴衣に欠かせないビール

原 風呂上がり浴衣甚平着てわるさ　ミヨノ

添 風呂上がり浴衣も台無しの悪さ

原 盆踊り浴衣で輪になって　秋星

添 輪になって浴衣が似合う盆踊り

原 盆踊り浴衣が揃う過疎の町　利子

添 帰省客の浴衣も増えて盆踊り

原 夏一番浴衣の多い花火客　玲子

添 花火客の浴衣姿も風物詩

原 旅の宿親子揃いの浴衣着て　俊子

添 家族皆揃いの浴衣着てる宿

原 旅浴衣ホット一息肩を抜く　映子

添 浴衣着て一息をつく旅の宿

原 幹事役浴衣着てても忙しい　靖鬼

添 浴衣の裾からげて忙しい幹事

原 浴衣掛け一の湯二の湯はしごする　㈱節子

添 一の湯から二の湯と梯子する浴衣

原 膳出しも浴衣で変るお淑やか　㈱節子

添 膳出していた娘も浴衣板につき

原 浴衣消え膳出しルック湯の街へ　義章

添 浴衣脱ぎ膳出しルック湯の街へ

原 朝顔の浴衣の記憶幼き日　クックバラ
添 朝顔の柄の浴衣にある記憶
原 浴衣には昔の我を想い出す　みさと
添 浴衣着て昔々が甦る
原 子の浴衣ひと夏だけで寸足りず　章司
添 ひと夏で小さくなった子の浴衣
原 あんぱんまんの浴衣を縫って夏を待ち　麗
添 アンパンマンの浴衣は脱ぎたがらぬ孫
原 大好きな藍染め浴衣愛染会　千華
添 藍染めの浴衣今年も着ています
原 マネキンも衣替えしてゆかた着て　雅代
添 マネキンも浴衣姿に衣更え
原 無防備に膝をくずして浴衣がけ　萠
添 着慣れない浴衣に膝を崩してる
原 浴衣着たおんなが風を気にしている　柳歩
添 浴衣着て風を気にしているおんな
原 見てる程涼しくはない浴衣着て　わこ
添 見た目ほど涼しくなどはない浴衣
原 夫と子の浴衣タンスで寝ってる　美智代
添 着もしない浴衣タンスで眠らせる
原 箪笥の底おしめ逃れた浴衣在る　みち代
添 もったいない浴衣箪笥で眠らせる

【少し工夫すれば佳くなる句】

原 浴衣着て素足に下駄が美しい　きぬ子
添 浴衣着た下駄に素足が映えている
原 浴衣から脚がはみ出るお年頃　雅明
添 浴衣から足がはみ出る成長期
原 外股でカランカランと浴衣美人　道子
添 外股で浴衣美人が闊歩する
原 湯上がりの浴衣が話しもり上げる　孝明
添 湯上がりの浴衣に話盛り上がる
原 花柄の浴衣にはしゃぐ同期会　忠子
添 花柄の浴衣にはしゃぐクラス会
原 お揃いの浴衣で茶髪花火みる　宇乃子
添 お揃いの浴衣で花火みる茶髪
原 御転婆の着なれぬ浴衣畏まる　千恵子
添 御転婆も浴衣を着ると畏まる
原 願いごと吊しはしゃいでいた浴衣　徑子
添 願いごと吊しはしゃいでいる浴衣
原 浴衣着に団扇昭和の風になる　起世子
添 浴衣着に団扇レトロの風になる
原 浴衣着る心身ともにリフレッシュ　イセ
添 浴衣着て心身ともにリフレッシュ
原 8・15浴衣の孫は知らぬなり　勇治
添 浴衣の孫は知らぬ八月十五日
原 浴衣縫うことから和裁習得す　(村)信子
添 浴衣縫うことが和裁の第一歩
原 浴衣から羽根伸びてくる旅の宿　幸
添 浴衣から羽根伸びている旅の宿
原 旅立ちに宿の浴衣を畳み置く　藤朗
添 浴衣まできっちり畳み宿を立つ
原 なかなかの浴衣美人のいる鏡　(川)洋子
添 なかなかの浴衣美人になる鏡
原 モナリザに着せて笑わせたい浴衣　はじむ
「仁王様」ならなお良いのですが。
原 布ぞうり浴衣の金魚まだ元気　くにこ
浴衣にも金魚が泳ぐ夏祭り　みえこ

【佳　句】

浴衣なら私ひとりで着られます　こずえ
浴衣から着付け始まる入門者　智加恵
浴衣着て旅館宣伝してまわり　としお
宿浴衣着丈が合ったことがない　千代子
浴衣でも簡単で走る女の子　福世
輪を抜けた浴衣へついてゆく蛍　幹子
恋の花咲かせた浴衣捨てきれず　貞月
何よりも浴衣が似合う母の夏　(高)洋子
悲しみを浴衣に包み盆がゆく　孝子
浴衣着てはじめて知った鼻緒擦れ　かずみ
浴衣着て蚊遣りのなかの白い顔　次根

【今月の推せん句】

妹に譲ったはずの絽の浴衣　笠原乃りこ

「はず」からドラマがイメージされる佳句。発想、表現、機知、風刺ともに抜群。

左前の浴衣にまたもお節介　上垣キヨミ

【私の句】

うたかたの花火に映えている浴衣
浴衣着せくつろがせたい仁王様

（登載洩れの方には役員が添削等して返送します）

秀句鑑賞

同人吟　森　茂美
―6月号から

私がふとした縁で川柳を始めて二十年位になります。どうせやるからには、最初からもっとしっかり勉強すればよかったと悔やむ今日この頃です。でももう遅いようです。やり初めた頃は昔の狂歌の類いだと思っていました。それが月日を重ねるうち「川柳は社会を謳い人間を謳うもの」と聞いてだんだん恐ろしくなってきました。今頃になって心を入れ代えても、もう遅い。そこまでお迎えが来てる私です。今更愚痴は言うまい。これからは皆様のお邪魔にならぬようやらせて頂くつもりです。そんな訳で皆様のような立派な鑑賞眼はありませんので、ご勘弁をお願い致します。

村中が桟橋に出る島の嫁

加島由一

何処も同じでこの村も若者達は都会に出て、お年寄りが多い村なのでしょう。あそこの長男にお嫁さんが来る。早く見たいのとお祝いを言いたいのと両方で島の桟橋へ迎えに行く、皆さんの和やかな会話が聞えてくるようです。

枯れるまで咲く定年のない桜

軸丸勝巳

樹齢二千年と言われる桜の巨木の写真を見ました。ただただ感嘆するばかりです。

人間には幸か不幸か職場には定年があります。死の定年だって無いようで有ります。桜が羨ましく思い、皆さんと眺めたものでした。

アメリカの一国主義が掘る墓穴

坂上淳司

戦争に必要な資源物資は、ほとんど自給出来るアメリカだから、そう墓穴は掘らないだろうと思いますが、そのうちにどうなるか。政権が替れば少しおだやかになると思いますがどうでしょう。

平のままだんだん窓による机

関本かつ子

悲しいかな、サラリーマンには定年があります。役職を問わずだんだん肩叩きをされ、窓ぎわへ追いやられます。人生の節目であり、大きな縮図です。

骨董品扱いされる知恵袋

小谷集一

その土地の長老でしょう。揉めごとその他部落の行事や、しきたり何でも知っています。その人を立てて事を運べばスムーズにはかどります。そんな貴重な老人です。

美辞麗句百より響くぶっきらぼう

大川桃花

美しい言葉をいくら重ね合わせられても、馬鹿野郎、この野郎、あほんだらの方が親しみがあって聴きやすい。私の好きな句です。

味噌汁の朝餉に妻は愛を盛り

西岡洛酔

男が朝一歩外へ出る時は七人の敵が居ると申します。どんな職の人でも朝は大切な時間です。愛のこもった朝食を有難う。

良妻を半日演じ肩が凝り

西村りつえ

ご謙遜でしょう。半分はお惚気のように聴こえますが、いかがでしょう。ご円満を心からお祈り致します。

九条に何が言いたいのだろうか

岩佐ダン吉

九条が発効してから六十年。九条のおかげで日本はかろうじて戦争にも巻き込まれず、平和に暮らしていると私は思っています。戦

争の好きな人はやたらと九条を壊したがっています。昔、二年八ヶ月の軍歴がある私は、日本は絶対戦争してはいけないと思います。九条は守るべきだと憂えています。

形見分け臓器欲しがる奴もいる

富田美義

某医師が当人もその家族の了解もなしに、臓器を勝手に他の患者さんに移植手術していたことが大きなニュースになったことがあります。以ての外の行為ですがことほど左様に特権職の人達がこうした手術を行うこと、またそれを知らぬふりをしてきた人達の行為は許せないことです。日本社会の一断面を鋭く衝いた句だと思います。

男結びも出来ぬお方でほっとけぬ

吉川寿美

年下の男性かも知れない。ほんわかと女心のにじみ出るような、あたりの空気が暖かくなるような、七分咲きの桜の下で遊んでるような、心がほころぶような句だと思います。

手つかずの自然に触れた岩清水

左右田泰雄

私が数年前に下北の恐山に行ったとき、途中の林の中で岩清水を飲んだことがあります。あたりの森に囲まれて、ちょろちょろ流れ出る清水、それを竹の柄杓に受けて飲む。程よい冷たさ、恐山が霊場である感覚をより深く感じたことでした。左右田さんのおっしゃる岩清水とは少し違うかもしれませんがごめんなさい。

子供等に見られてるかも知れぬ背な

鈴木いさお

栄枯盛衰は背中が語ります。衰えた背だったら子供たちにはあまり見せたくないですね。親も辛いが子供もつらい。舞台では背なで芝居をする役者がいます。六億円の宝くじでも当ててバッとやりましょう。

モンゴルに勝つ益荒男がない国技

上田俊路

気の毒なはなしだが、今や国技大相撲はモンゴルはじめ外国力士が多士済済です。そのうち国旗も、モンゴルあたりの旗を揚げる時代が来るかもしれません。そうなれば女性知事も土俵に上がれるかもしれません。面白くなりそうです。

宍道湖の鼓動のような曲を聴く

松本知恵子

どんなリズムか分からないが、お神楽をオーケストラに組み込んだ曲のように私には聴えます。それとも宍道湖の夕日を神々しく曲にしたものなのか、作句者の耳になって聴いてみたいものです。

満天の星が案じている地球

亀岡哲子

この大宇宙に人間もしくはそれに近い動物が居るのは、この地球だけだそうです。その小さな地球の中で人と人とが殺し合う、なぜ仲よく住み分けていけないのか。万物の霊長と自負している人間としては恥ずかしい限りです。強国が力に任せて弱国を攻める、神様も手が出せない。地球以外の星に心配されるよりも、地球が先ず心配してなんとかしなければいけない。そう思うけれど作者も私もその道が分からない。要するに自分の欲を捨てることだろうと思っています。

気がつけば私提灯持ちでした

玉置当代

自分から提灯持ちを買って出たご当人が、いつの間にか恋人の気持ちになっていた。笑えない喜劇です。でも当初の通り早く結び付けて上げたいものです。

あらいやだ猫背になっている鏡

佐藤治代

作者はしばらく病気と闘ってきた人です。少し背中が丸くなっていることも鏡を見て気付かれたのでしょう。もともと闊達で朗らかな人だから、今に元気な声で走り回ってくれることを信じています。

秀句鑑賞

—水煙抄

—6月号から

福士慕情

何事があろうと桜咲いて散る

上嶋幸雀

人間社会の変動を尻目に自然界は時の流れに悠々と身を委ねている。時が来れば花は咲き散っていく。人間じたばたしても如何にもならないか。

ほどほどのつもりでいても花見酒

阪本藤朗

桜の樹の下で車座になって飲む酒は格別である。適量の酒で帰りはゆっくり花を眺めて帰るつもりが、つい度を越してしまう。特に昼からの酒は良く効く。

葉が繁り花の盛りはすぐ忘れ

尾畑なを江

私の住む弘前は、桜日本一を自負している。二百万人を超える人出も、花が散り終えると、あの喧騒が嘘のように思える。輝いた過去は忘れたくないものである。

薫風のこれも故人か千の風

稲葉洋

千の風のフレーズが氾濫しているが、これは見落せない。長身に紺のスーツの似合う、橘高薫風師を追慕している自分に気付く。千の風の一つは薫風師なのだから。

満足に気が付かないでいる私

遠藤那珂子

平凡な日常生活が実は、一番幸せだと気付く人は少ない。日本に生まれ育ち、最低限欲しい物は手に入る幸せを感じ始めている。

仕合せが次々来ると恐くなる

小沢淳

幸せが続いて恐くなるとは羨ましい。先のことはさておき、今の幸せを大事にしたい。幸せが本物かどうか頬を抓ってみたりして。

あの人がいるだけなのに座がなごむ

仲谷真一

いるいる。そんな人が政治家になれば、日本はもっともっと良くなる。暗くなりがちな雰囲気を明るくしてくれる存在感のある人。

病院に作ってほしい老人科

松葉君江

老人の基準が判らない。年金を受給する頃から心身の捻子が弛んでくる。心身の悩みをケアしてくれる老人科の早期開設を望む。

団塊退職老人会が若返る

森下よりこ

町内会もカルチャーも年々高齢化し、会員も減少し、存続の危機に瀕している会もある。この際、声を大にして入会者を募ろう。

颯爽と走ってみたい補助タイヤ

笹倉ひろし

自動車の性能が良くなり、タイヤの寿命も長くなった。磨耗することもなく、一人取り残されているタイヤ。

お隣の人もヴィトンで気を害す

太田としお

お隣ということは、作者も気を害している。私だけが持っていると思っていたヴィトンのバッグなのに、お互い値踏みをしている。

駆け込んだ大樹の下も雨が漏り

井上つよし

小企業より大企業、大企業より役所と、就職の流れが変ってきている。駆け込んだ大樹も不祥事が続き、身の振り方に苦慮する。

道迷うばかりで墓地はまだ遠い

吉村久仁雄

いずれは墓地へ巡り着く、急ぐことはない。五七五と指を折りながら、一句を残すまで温かい仲間と道草をするのもいいものだ。道に迷ったら原点に帰ってみる。

■各地句会だより

松露川柳会

小西雄々

松露川柳会は昭和三十年一月十五日、同人十五名、普通会員六十名で発足した。そして二月から月刊『川柳松露』を発刊、三月には川柳雑誌社主宰の麻生路郎先生をお迎えし、皆生温泉で「松露川柳会創立記念全山陰川柳大会」を開催した。同人の中核は三十歳代で体力・気力とも充実し活力が溢れていた。

以来、順調に発展しNo.100号まで一回の休刊も合併号も出さず、三十八年五月には「松露百号記念川柳大会」を再度皆生温泉で盛会裡に開催した。念願の3ケタ発行を祝い、兼題に「百」も入れた。

こわれ物のように百歳あつかわれ　日　満
百号に続く生命の句を残し　天邪鬼
お百度へ母は疲れを口にせず　雄々

そして、一〇一号は記念大会号とした。

しかし、「川柳松露」の推進役であった三名のうち、湯原一机、福代天邪鬼の両氏と私が相前後して管理職となり、鳥取・岡山および東京へ転勤したため、一時休刊とした。

そして一年半後の四十年二月、米子市公会堂で「再会句会」を参加者二十名で開催した。

再会の日まで都会の隅に生き　一　机
十年目課長と平で再会し　詩　郎
再会の言葉は胸にひっかかり　蛙眠子

以後、句会と大会を同じペースで繰り返していたが、本格的に月例句会と会報を発行したのは六十二年四月からで今年で二十年目になる。発足当時からの会員は殆ど鬼籍に入り、新人の十名前後で続けていたが、平成十二年から米子市にもグループができ、現在二十数名の会員である。



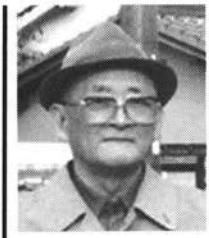
新人に対しては「川柳とは何か、川柳の作り方と推敲について」を主眼とし、作品の添削も行ってきた。高齢化の荒波を受けながら、「親睦と川柳作句で生き甲斐を」をモットーに、楽しいムードを作るよう努力している。

特に、句会の終了後は約三十分「憩の場」を設け、句会の緊張感から解放され、リラックスしながら茶菓で世間話と情報交換で、人間関係も最良の状態です。

川柳塔社の同人も誕生し、誌友を続ける会員もいて、心強く思っています。

足腰は負けると知るが気はたしか　正　光
五十年夫婦で蒔いた花を見る　静　江
露草も情けが欲しい野辺の道　和代代

現在、発足当時のような馬力と派手やかさは無いが、一歩ずつ足元を確認しながら日日の精進を忘れず、更なる川柳の醍醐味を追究したいと、考えている昨今です。



田中正坊氏を悼む

平成19年5月8日没　釋　正　坊

享年八十六歳

正坊さんを偲ぶ

本　田　智　彦

何と言っても法名が洒落ている。川柳雅号そのものを法名に用い「釋正坊」と霊前に祀られている。その正坊さん、㈳全日本川柳協会（日川協）の常任幹事として長年尽くされ、その功によって平成十八年度の八十歳以上の功労顕彰を受けた。

日川協の常任幹事会では自分の意見を率直に述べ、納得するまで自分の考えを曲げないという意思の強さをもっていた。

あかつき川柳会が中心となって鶴彬の句碑を大阪城内に建立する計画には積極的に参加、その完成を見ずに去ったことは残念である。

大阪川柳人クラブの役員、川柳塔の参与などその活動は多岐にわたり、豊中もくせい川柳会のリーダーとして、長年川柳人の育成、指導にもかかわった。

日川協の発行する出版物の編集の核として、そのレイアウトについては経験を生かして、こだわりの編集をしてその正確さは今でも語りつがれている。

とにかく正坊さんは異色の存在だっただけに惜しまれる。私もそうだが七、八十歳という年齢の年代の人は安保闘争を経験し、政治・経済に不満をぶっつけて若さを注ぎこんだものだ。その運動に深くのめりこんだか、遠まきにして見ていたかの差は、その人の性格にもよるが正坊さんはのめり込んだ方だろう。そのことが川柳の中にも詠まれている。

風の女に今日も手紙を書いている
子どもとの約束だから守らねば
投げつけてやりたい時に石がない
大義なき戦を決めたのは誰か
侵略にふれると風が騒ぎだす
送る人送られる人南無阿弥陀

この6句に正坊さんの真髄が詠まれているような気がする。

合　掌

（㈳全日本川柳協会常務理事・事務局長）

赤ペンの魔術師

西　出　楓　楽

平成十二年、奥田みつ子さんがご主人の病気により任期半ばで編集長を退かれ、後を私が急遽引き継ぐことになった。ところが私は当時気楽な立場で手伝っていただけで、いわゆる編集という仕事については無知に等しかった。そこで、正坊さんは一年間編集部をみっちり助けて下さった。

『川柳塔』平成五年五月号目次下に標榜しておられたように、「生涯一編集者」の正坊さんの訂正の赤ペンは実に見事というほかなかった。

字の間違いは逃すことなくキャッチ、てにをはの使い方、副詞をひらがなに、〝より〟と〝から〟の使い分けなどなど、傍で見ていて小気味よく赤ペンを入れられる。文章に関しても、書き手の文体は生かしたままで、ちょっと手を入れられると全体が生き生きしてくる。まるで赤ペンを持った魔術師のようで、プロの編集者の力量を目のあたりにし、感じ入ったものである。

ペンだこの指が私の勲章だ　正　坊

正坊さんの手の赤ペンは命持つ　楓　楽

個人的な思い出としては、何度か旅行をご

一緒したことである。周知の通り正坊さんは、大の旅行好き。世界のあちこちを回っておられる。八十五歳の昨年も中国に行かれたと聞く。平成十二年のイタリアは正坊ご夫妻ほか五人、計七人でツアーに参加した。折からキリスト生誕二千年、ミレニアムの年でそれに関連した遺跡の多いイタリアは大盛況、メンバーが迷子になることが何度か起きるという珍道中であった。当時、正坊さんは既に八十歳近かったから、夫人にすっかり頼っておられた様子をほほえましく眺めたものである。

聞くところによると、病床でこれまでの旅行記を上梓すべく、準備を整えておられたとのこと、いつか読ませてもらえる日が来るのを楽しみに待っている。

五月十日、悲しみと空虚感で通夜式場に入って、戒名が雅号と同じで「釋正坊」であることに驚いたが、あとで僧侶の法話を聴いて納得した。「正」はちょうどとか、ぴったりの意、「坊」は僧坊や宿坊のように位置を示す意。つまり正坊さんは彼岸で居るべき正しい位置を得られたという意味の浄土真宗では位の高いということであった。ただし、読みは此岸での「しょうぼん」でなく、「しょうぼう」となる。幼い頃の愛称を雅号にし、そのまま戒名として永遠に生き続ける——なんという幸せだろう、と心の中を温かいものが流れた。

赤えんぴつに学び

川端一歩

三月二十日過ぎ仕事の一つを引継ぐためにお邪魔したのが最後となりました。

正坊さんには本当に多くの事を教えて頂きました。川柳のいろはから文学書の紹介までしていただき、川柳の師というより人生の師匠でした。

二〇〇一年新春だったと思いますが「一歩さん。短歌や俳句では反戦平和を願う全国組織があるが川柳はそれがない。ひとつ大阪から礎を創ったらどうだろう」という提案が正坊さんからあり、それが具体化されてあかつき川柳会が誕生しました。規約の素案、入会の呼びかけ、鶴彬の句碑めぐりの旅などすべて正坊さんの発議提案でした。

特に「鶴彬顕彰全国誌上川柳大会」の取り組みでは、選者の要請から企画、編集、校正と大奮闘していただきました。

今にして思えば、正坊さんが長年胸に温めていた夢をちゃんと組み立ててしめした道筋でありました。

すごい人だと思った思い出が一つ今も脳裏に残っています。それは役員会の一泊研修会塩田温泉での正坊さんの話です。

鶴彬のことはもちろん剣花坊や六大家など著名な川柳人一人ひとりについてどんな句を詠んだか、その時代との係わりでどんな姿勢であったかと滔々と述べられたことです。

その博学と研究熱心さにみんなただ聞き惚れました。

私たちは『赤えんぴつ』を更に学びながら進んで参ります。

こころ残りは鶴彬顕彰句碑建立がいよいよ場所も大阪城内の一角と決まり、今秋は植樹、来年秋は句碑建立という運びとなり、その除幕式典にご出席願えないのが返すがえすも残念でなりません。

どうか正坊さん。黄泉からも句碑建立に祝杯をあげて下さい。

あかつきの夢立ち上げたペンの人　一歩

（あかつき川柳会会長）

正坊さんと もくせい川柳会

江見見清

正坊さんは、もくせい川柳会創設以来二十三年間、会長としても十五年もの長い間お世話下さり、ありがとうございました。三年前

会長を退かれてからも、元気に句会に出席されていて諸々の相談や助言を頂ける先輩として頼りにさせて頂きました。勉強会でのご指導はいつも皆に感銘を与えたものでした。

しかし一年ほど前から酸素ボンベが必要となり「酸素がきれるので近いもくせいにだけ来ます」と、それでも元気にご出席頂きました。昨年十月までは奥様ご同伴で句会に出席されていましたが、以後投句となり今年三月が最後の投句となってしまいました。奥様は「主人は頑固でわがままで」とおっしゃっていましたが、私たち後輩にとっては簡潔、言葉文字の正確さ、信念を貫くこと、同時に人への優しさを教えて頂いたかけがえのない大先輩でありました。

もう少し生きよう花が美しい
（昨年七月のもくせい句会で）
戦記読む遠い日まざまざよみがえる
（昨年十月もくせい句会最後の出席）
大義なき戦を決めたのは誰か
何もせぬ一日ヒゲがよく伸びる
（今年三月もくせい句会への最後の投句）

つい先日三月十九日にご自宅でお会い出来た時には元気にお話をして頂けたのに…、残念です。ご冥福をお祈りいたします。

弔吟

句読点しっかり打って召されゆく　見清

遺句抄

明日もまた無事の日つづけ茜雲
二坪の書庫あり僕はリッチマン
裏話書いて乱れた世を稼ぎ
一寸の虫たらんとす多喜二の忌
万年青の実　日中友好二千年
正論もよいが傷つく人がいる
信念は曲げない父のモンブラン
戦場に行かぬ男が吹くラッパ
新世紀生きる十年日記買う
盃で打つ一日の句読点
近道はせぬ父さんのちびた靴
たのしみは校了のペン摑んだ時
父はまだ軍隊手帳持っている
振った手が帰らなかった雲の果て
編集者冥利につきる八〇〇号
権力と戦ってきた過去がある
時流には遠く一人の舟を漕ぐ
泣き笑いペンシル抱いて五十年
脇役で終わった父のベレー帽
タンポポの綿毛も僕も旅が好き
差し引きをすれば妻には借りがある

川柳塔社受賞作

昭和60年度　各地柳壇賞
　どのペンにかえてもやっぱり僕の文
昭和62年度　各地柳壇賞
　来年も生きるつもりの花の種
平成元年度　路郎賞準優秀作二席
　女郎花やわいおとこが多すぎる
平成2年度　一路賞
　幸せはじっくりがよし豆を煮る

略　歴

大正11年8月30日　大阪生まれ
昭和17年　大阪外国語学校中国語部卒業
　大阪毎日新聞社入社
昭和26年　教育タイムズ社入社
　日本中国友好協会
　大阪府連合会理事長
昭和57年　川柳塔社誌友
昭和58年　川柳塔社同人
昭和60年　川柳塔社常任理事
平成2年～8年　川柳塔社編集長　後参与
平成3年　㈳全日本川柳協会常任幹事
平成4年　『なにわ川柳－私の百句』刊行
平成11年　編者『川柳カタカナ語辞典』刊行
　共著『川柳入門事典』刊行
　川柳句文集『ペンシル』刊行
平成17年　川柳句文集『赤えんぴつ』刊行

追悼

石川侃流洞氏

4月13日没　享年91歳

法名　香誉宗春詠風信士

大正6年山口県小野田市生まれの侃流洞氏は川柳雑誌社の頃からの会員である。

昭和21年、海軍生活を経て旧国鉄下関駅に就職した際、助役の国弘半休氏が川雑下関支部を結成し会員に誘われたのをきっかけに、川柳を始めた。

昭和26年地元に「一杯水川柳会」が誕生、世話役となり、1年後には会長をつとめる。一杯水の意味は、「末期の水を飲むまで川柳を続けるという決意」を表しているという。

定年後、二つの川柳教室で教えていた。指導上の心がけは〈諸流派にこだわることなく川柳を愛し、自己の陶冶に努め、生命ある句を作ろう〉と、路郎師の教えを伝承するものであった。

遺句抄の初めの4句は初合同句集『私達』路郎選集におさめられているものである。

遺句抄

うれしい日父は明治の唄を出し
悪友を自認し合って縄のれん
俺の影ゴウゴウ轢いて列車過ぎ
急流をさえぎる岩のたのもしく
松茸が出るのに時価が騰らない
笛の音へ踊り疲れた蛇となる
男ならどうする妻へ愚問だな
裸木が月にささっている寒さ
幸せは傘寿へ孫が提げてくる
傘寿まだ母が元気で酌いでくれ
波乱万丈したたか生きた束ね髪
負け癖のパチンコだけどやめられぬ
蟠りとけて筧の音を聞く
陽が落ちるとても淋しい休肝日
勿体ないCMビールの泡を飛ばし合い
一本提げて今宵は友と酔うつもり
空豆の塩茹で地ビール美味すぎる
お年玉ありがと孫が酌いでくれ
盃でチビチビ飲んでる暇がない
余命表神に任せて独り酌む
やさしくしよう骨を拾ってくれる嫁
原発嫌い太陽があり風がある
夫婦病み庭に仏の花がない
てふてふと書いた頃僕も紅顔美少年
優れもののペンです誤字は書きません
カタカナ語読めるが意味が分からない
風向きで聞こえなくなるいい耳だ
禁煙奮闘もう飴玉に飽きて来た
デュエットがうま過ぎ仲を疑われ
洋傘没落百円ショップの棚に住み
我が町の銀座淋しい空店舗
犬掻きで渡る世間の助け合い
どの部屋にも時計があって皆違い
相槌を打てば収まる妻の愚痴
種明かしして手品師の腕が冴え
玄関の三つ指本では読んだことがある
春宵一刻　家族気にする隠居部屋
ゆっくりはいいが世間のめまぐるし
当たったことないくじが当たったので不安
縁は異なもの神のゲームに違いない
鬼門にも増築しがない街に住み
年金減額　禁酒禁煙いい機会
無礼講社長が酌をしてまわる
まだ生きていたかと悪たれ手を握り
不作の夫婦いつしか来てたダイア婚
鯛だって腐ればボイと捨てられる
近づけばそれだけ逃げる虹の橋
我が家系母百六歳の新記録
点滴のしずくへ命乗せられる
卒寿まだ叱ってくれる妻がいる

（文責　編集部）

第59回西日本川柳大会

とき　9月2日①1日夜川柳まつり
ところ　久米南町文化センター
第1部　7月14日㈯締切　各2句
投句先　〒709-3614 岡山県久米郡久米南町下弓削
弓削川柳社
（投句料1000円郵便小為替同封）
「棘」松本　藍　選
「耕す」広畑　耕滋　選
「叩く」生駒　聖天　選
第2部　大会当日　午前11時締切　各2句
「外」石部　明　選
「遊ぶ」河内　月子　選
「美」土橋　螢　選
「火」村上　氷筆　選
「コンビニ」大森　一甲　選
特別課題　恒弘　衛山　選
参加費　2000円（昼食・発表誌呈）
表彰　第1部・第2部ともに
総合成績10位まで
宿泊　津山「ホテル・アルファー・ワン」
（申し込み、7月14日まで）
主催　弓削川柳社

平成19年度相生市文化祭
第15回 もみじまつり川柳大会

日時　10月21日㈰10時開場　13時開会
会場　相生市総合福祉会館
TEL0791-22-7125（相生駅下車バス相生市役所前　徒歩3分）
事前投句の部　応募料千円（小為替）発表誌送
課題と選者　（8月31日必着、便箋大用紙に1題1句　住所・姓雅号・電話大会出欠明記）
「指」岡田　玖美　選（姫路）
「風」前　たもつ　選（大阪）
「鍵」斎藤　功　選（神戸）
「運」坊農　柳弘　選（郡山）
大会の部（出句料千円）　**締切**　11時40分
課題と選者（各題2句）
「鏡」沼尾美智子　選（明石）
「夢」木本　朱夏　選（和歌山）
「柱」木下　草風　選（岡山）
「自由吟」平山　繁夫　選（神戸）
事前投句先　〒678-0031
相生市旭2-18-17　中本三桂宛
TEL0791-22-7299
主催　相生市・相生市教育委員会・相生市文化協会
企画　相生市川柳協会
後援　兵庫県川柳協会

北見川柳社創立55年記念
第44回東北海道川柳大会

日時　9月9日　**会場**　北見市民会館
事前投句「守る」岡崎　守・五十嵐万依共選
（2句詠）「結ぶ」酒井麗水・中橋花泉共選
投句用紙　便箋大、大会・懇親会出欠明記
投句料　1000円　**締切**　7月31日
投句先　〒090-0033　北見市番場町4-10
北見川柳社　東北海道川柳大会事務局
宿題（出席者のみ）各2句詠
「押す」三浦強一・佐藤芳行共選
「雑詠」池さとし・加藤かずこ共選
大会費2500円　**懇親会費**3000円

神戸川柳祭　07事前応募作品募集

課題「パン」「光る」「凄い」各題1句
便箋使用　作品と〒・住所・氏名・電話番号
締切　7月31日　**応募料**　1,000円
投句先　〒665-0873 神戸ジェームス山 郵便局止
神戸川柳協会　山本芳男宛
選者　神戸川柳協会常任理事・理事
選考　平抜き2点、佳作3点、秀句4点の総合点
発表誌　「神戸川柳祭　07」当日配布
（当日欠席者には後日送付）
「神戸川柳祭 07」は10月21日㈰開催
詳細は後日掲載　**主催**　神戸川柳協会

エッセー

敬語の新分類

井上桂作

敬語は一般的に書き手（話し手）が、話題の中の人物や読み手（聞き手）などに敬意を表すために、普通とは違った言葉づかいをする時、その言葉を敬語と呼んでいます。敬語は次の三種類に分けられていました。

話題の中の人物について、動作の主体（為手）を敬う……1　尊敬語

話題の中の人物について動作の客体（受けて）を敬う……2　謙譲語

読み手（聞き手）を敬う……3　丁寧語

このように尊敬語・謙譲語・丁寧語の三分類が一般的とされていた敬語について文化審議会（阿刀田高会長）は、謙譲語を二つに分け、更に美化語を新設して、五分類に改める指針を文部科学相に答申しました。

自由と平等を最高の基本理念としてやってきた教育現場では、人間関係が変様し国民の多くが敬語の使用に困難を感じていました。今後は「よりどころのよりどころ」としての活用が期待されると、文化審議会では述べています。従来より「敬語の使い方が難しい」との声を踏まえて、その性質ごとに再整理することによって敬語への理解を深めようとするのが今回の狙いのようです。

さらに文化審議会が答申した敬語の指針は、「敬語は人と人との間の関係を表現するもの」として、その重要性を強調する一方で、考え方の基本は〝相互尊重〟と〝自己表現〟の二点をあげています。

文化庁国語課においては、敬語が五分類化が多数意見となっていると述べているが、定着するかどうか極めて不透明です。現に昨年十一月の意見募集では約3分の1が「混乱する」と答えており、五分類する理由がわからないとする意見を寄せています。

国語学者の間では教育現場を考えると、心配との声も出ているようです。しかし三分類では見えてないものが五分類では見えてくるのではないかと考えます。学生に敬語を教えるときグレーゾーンの幅がたしかに減らせるのではないかと思います。

新分類では謙譲語を説明する際に使われていた〝へりくだり〟などの表現が消え、〝立てる〟という用語が用いられたのが特徴です。この立てるを用いた理由について、敬語の働きを端的に表す用語を選んだためと力説しています。

この謙譲語を二つに分類して、伺う・差し上げるなどの敬意表現を〝自分側から相手側〟に、第三者に向かう行為などについて伺う人物を立てる言葉として、これらを謙譲1と定義しています。また参る・申すなどは、自分の行為などの話や文章の相手にたいして丁重に述べるとして謙譲語2と定め、丁重語と整理区別しました。例えば「バスが参りました」という文は、バスがへり下っている訳ではなく、たんに丁重に表現したもので謙譲語2となっています。

一方これまで丁寧語として位置づけられていたお酒・お料理・御祝儀などの表現は、物事を美化して述べる美化語として分離独立させました。しかし美化語は、食べ物などへの尊敬の念を一切否定しているとして異論が相次いだといいます。

国語学で有名な学習院大学名誉教授の大野晋先生は、「全体に文章が難解だ。一読して頭に入るようでなければ、よい指針とは言えない」と述べておられます。また〝へりくだり〟といった用語よりも「〝立てる〟を採用したのは、評価したい」と付け加えておられます。へりくだりと言うような用語は、今日の敬語意識のあり様にはもちろん、そぐいません。

本社六月句会

六月七日（木）午後五時半
アウィーナ大阪

六月七日の本社句会は、93名の出席を得て定刻通り開催。

はじめに去る五月八日死去された参与の田中正坊氏に黙祷をささげた。

お話は板尾岳人氏。麻生路郎主幹から薫風主幹まで、今まで接してこられた方々との交流と懐古録であった。なかでも葭乃さんを交え、薫風先生達と月ヶ瀬へ行った時の事を懐かしむ。さらに、生々庵さんの引っ越しを手伝った事、寺尾俊平氏、田中好啓氏等と四国をはじめ、いっぱい旅をした事、等々。

竹中肖二さんとか綾女さんとか、故人の名前が次々と出て来て、奥深い、楽しいお話は興味の尽きぬまま、あっという間に終った。

（扶美代記）

初出席は大阪市の長井善純さん。

月間賞は吹田市の山本希久子さんに輝く。

（司会―昭・美籠）（脇取り―月子・㈦千代）

（受付―倫子・冨美子）

席題「脇役」　岩佐　ダン吉選

脇役が似合い友達たんと居る　潤子
脇役の根回し効いている会議　准一
脇役を心得ている紅しょうが　朱夏
条件を付けて脇役引き受ける　鐘造
青ねぎが持つ脇役の存在感　篤子
脇役が誰もおらない村芝居　笑司
脇役の妻が上手に背なを押す　一風
子や孫が来て脇役を捨てる妻　見清
脇役でにっこり笑うプチトマト　朝子
ピリオドの先で脇役のあくび　柳弘
脇役のサラダがメインよりうまい　瑠美子
ご近所に妻の亭主でデビューする　尚士
ジエラシーを感じドレスの裾を持つ　欣子
ここ一番刺身のツマの自己主張　柳弘
脇役がでかい顔して席に着く　昭
いつか主役側で力を溜めている　たもつ
脇役が主役を怒鳴る舞台裏　准一
脇役も主役も食っている子役　楓楽
脇役に徹して今日も死んでいく　千里
祝辞言う方が主役のような顔　耕治
脇役の妻が後ろで糸を引く　寿美
控え目に主役立てる大物だ　順子
大根も達者な脇がいて主役　淳司
いぶし銀の脇で主役がよく光る　いわゑ
肩の荷をおろして酔った披露宴　直樹
飲めぬから光らぬ役をかって出る　月子
脇役が転んで主役くっている　哲子
寝返りを打つと主役になっていた　義寿子
一本足の案山子で耐えたワンシーン　冨美子
脇役の仮面をかぶっている野心　憲太郎
いさぎよく派手に倒れる斬られ役　扶美代
脇役としてつらい話を聞いている　佳
脇役の瞳きらきら空のいろ　義子
村民が総出演のエキストラ　保州
脇役に徹し残り火抱いている　萬的
実直に生きて生涯斬られ役　楓楽
九条が脇役なんて言わせない　弘風
人
損得を言わず主役を盛り立てる　㈦千代
地
脇役に徹して溜息はつかぬ　扶美代
天
国民は脇役なんかではないぞ　保州
軸
脇役でとても終わらぬ目の光

兼題「そこそこ」　志田　千代選

父母へ今もそこそこ元気です　賢子
さっぱりの服でそこそこ暮らす母　月子
そこそこの稼ぎじゃシャネル買えません　光久
そこそこの男になって子の帰郷　尚士
スピーチはそこそこにしてさあ乾杯　いさお
そこそこにうまあう人が独りいる　篤子
そこそこと指図されてる探し物　柳昌
反省はそこそこにして先ずビール　玄也

遠目には五十をちょっと出たところ　耕治
そこそこの美人嫁かずを不思議がり　憲太郎
このくらいにしとき財布も妻も言う　求芽
要領よくすべてそこそこ済ます妻　孝一
そこそこの地位で退き際心得る　楓楽
万札を手放すそこそこ楽しんで　扶美代
そこそこで断われと言う妻の目が　篤子
リハーサルもそこそこの芸達者なり　雅文
そこそこの顔見知りだが名は忘れ　公誠
拗ねているそこそこ俺が好きらしい　郁夫
自信ないままそこそこ添い遂げる　天笑
そこそこの仕事デートにまっしぐら　美智子
そこそこにおいとまをした奥座敷　潤子
そこそこの嫁と並んで特売日　欣子
はったりもそこそこ入れて自己紹介　修
そこそこの距離置く口の軽い人　正雄
粗食してそこそこに生き笑い皺　月子
番犬はそこそこ吠えて寝ています　瑠美子
二三人そこそこ集め町の声　たもつ
そこそこやってるが褒めたりはしない　天笑
そこそこにしとく妻への口答え　幸雀
社の代理焼香だけですぐ帰る　行兵衛
初詣でそこそこにしてデートする　桂作
会いたくて化粧そこそこことび出した　舞夢

佳

そこそこの人でもあんな箸使い　則彦
そこそこの人でも多分書けぬ薔薇　則彦
あの人が留守でそこそこ仕事出来　れんげ
そこそこの答出すから外せない　准一
うちも隣もそこそこだけどちと違う　シマ子
そこそこで済ませておけぬ苦労性　玄也

人

そこそこで済ます夫のお葬式　幸雀

地

そこそこの暮しへ水を差しにくる　房子

天

そこそこの後は神風待つばかり　可住

軸

頑張ってもそこそこまでを抜け出せず

兼題「骨」　谷口義選

歯の数が僕より多いしゃれこうべ　時雄
白骨の章をゆっくり読んでいる　螢
骨組が気になる九階日向ぼこ　欣子
肩書の鎧を脱いだあばら骨　尚士
骨折のベッドでしてる骨休め　希久子
胸の開くドレスで鎖骨ほめられる　瑠美子
あやまれば喉の小骨がとれるのに　千里
骨のある男の骨をつまむ箸　天笑
鮎の骨外科医のように抜く女将　保州
お詫びするトップに背骨ありません　美義
散骨は太平洋の晴れた朝　直樹
私小説終りの骨の入れどころ　れんげ
反論のチャンスを狙う顎の骨　求芽
年金だけで支えられている背骨　希久子
神頼みなどせぬ骨のある男　幸雀
気骨ある政治家待っているのだが　みつ子
傘の骨折れて待ち人もう居ない　扶美代
小骨いっぽん小言のなかに刺してある　寿子
鈍感力骨になるまでどっこいしょ　柳弘
土葬でいいよおれは化石になるつもり　弘一
生徒より骨折れるのはP・T・A　東吉
働いた倍ほどしてる骨休め　㈲五月
骨折り損矢鱈にお腹空いてくる　萬的
九条は骨の部分が大事です　美花
支えあった骨組だから軋まない　光久
反骨の男夜中に猫を抱く　哲子
カルシウム取って余生へ立ち向かう　楓楽

修

この髑髏が小野小町と思えない　シマ子
海賊の血が骨の髄まで流れてる　義子
しゃきっとおし私の背中が申します　見清
恐竜は骨でロマンをかき立てる　㈲五月
骨切りの鯵の花から京の夏

佳

ときどきは自分の骨をもて余す　楓楽
牛乳とジャコと太陽浴びてます　月子
かき捨てた恥の小骨が引っ掛かる　昌紀
絶世の美女と思った喉仏　賢子
肝っ玉縮んでからの骨粗鬆　柳昌

人

僕の骨チリメンジャコが詰まってる　たもつ

地

散骨は止めよう海が碧すぎる　鐘造

天

転ばぬよう骨折らぬよう生きている　房子

軸

好き嫌いせず食べてきた骨である

兼題　「マナー」　三宅　保州選

幼稚園ではできていたご挨拶　時雄
マナーのみ一人歩きの五ツ星　雅明
マナーでもプロ顔負けの十五歳　則彦
バンカーの足跡直すのもマナー　公誠
ギャラリーのマナー王子を手こずらす　求芽
いいマナーです佑ちゃんも遼ちゃんも　楓楽
これ見よがしのマナー見ておられない　天笑
ケータイは進化マナーは退化する　公誠
刃を向けたままで鋏を返される　准一
師の影を踏まぬマナーが死語となり　寿美
お嬢さまの仮面剥がした箸遣い　朱夏
通夜の席マナーモードがふるえてる　恭昌
最高のマナーしずしず霊柩車　希久子
叱られるので行儀よくしています　(志)千代
夫婦でも言うことここで止めておく　俶子
テーブルマナーお隣さんを下見する　光久
親の背に行儀作法が書いてある　満作
すみません素直に言えるのもマナー　たもつ
並んでるホークナイフにおじけづく　美智子
スパゲッティ箸でしずしず食べている　昌紀
読経済みマナー吹っ飛ぶ遺産分け　笑司
よその子の悪いマナーは気にかかる　見清
親孝行教えてくれと保護者会　淳司
先ず親の躾をしたい参観日　淳司
もうすこし膝つぼめろよお若けえの　直樹
髭面を擦り付け合うているアラブ　尚士
核だけはせめて持たないのがマナー　ダン吉
前をごめん手刀を切る茶髪の子　則彦
時々はマナーモードにしたい口　冨美子
バイキングおばちゃんマナー忘れたの　れんげ
串カツは二度漬けしないのがマナー　玄也
ありがとうだけは妻にも欠かさない　尚士
佳
愛してると毎日言っているマナー　楓楽
おしぼりで顔を拭いてはいけません　夕胡
新しいマナーと古いマナーがすれ違う　義
目立たない人が守っているマナー　和夫
究極のマナーはきっと思いやり　冨美子
人
人間の脆さを包み込むマナー　柳弘
地
マナーモード話し上手で聞き上手　柳弘
天
最高のマナーあなたの聞き上手　ダン吉
軸
仁丹をときどき噛んでいるマナー

兼題　「役立つ」　奥田　みつ子選

役立つもの無いので笑顔差し上げる　きよし
母親の着物スーツに生き返る　雅明
使われず役目を果す非常口　好
何時の日か役立つ本が積んである　鐘造
お年玉貯金をママに貸しました　見清
爺ちゃんも役立つ辻の通学路　章久
聞き役という役どころ性に合い　希久子
そのうちに役立つだろう縄を綯う　月子
悪友は辛辣ながら役に立つ　いわゑ
いつまでも役立つ脳でいてほしい　能子
役立っているうちが華うまい飯　朝子
回り道役立ってます忍と根　ふりこ
一本の木を植え温暖化を防ぐ　一歩
育児本よりも役立つ祖母の知恵　玄也
一円が足りないだけで断わられ　舞夢
思い出を消さないことが活きる種　哲男
心の闇へ蛍の灯り役に立つ　哲子
年金を受け取る役をしています　尚士
積み重ねた努力決して無駄じゃない　義純
保険金役立っている不幸せ　希久子
茶碗並べて母を手伝う一年生　一風
綻びていても間に合う知恵袋　朱夏
役立てずそのままがよい消火栓　武庫坊
百円のおみくじに知恵借りてます　可住
役立っていると自惚れながら生き　天笑
役立っていますあなたが側にいるだけで　美籠
崖っ縁に妻の細腕どっこいしょ　光久
一枚の紙があとあと役に立つ　能子
傘寿なお役立つ場所を捜してる　いさお
九条が役立っている戦ゼロ　ダン吉
ほんの少しだけど募金をしています　保州
今一度勿体無いを考える　東吉
佳
資格より機転が役に立つ現場　冨美子
役に立つ杭かも知れず叩くまい　(矢)五月
悪友と歩いた道がいま生きる　可住
役に立つ積りこつこつ生きている　(九)千代
家族の和孫の笑顔が役に立つ　哲子

人

反面教師そんな役立ち方もある　楓楽
地
入院に役立ちました辞書一つ　一歩
天
母さんは生きてるだけでよいのです　(志)千代
軸
真実より嘘が役立つこともある

兼題「流儀」　河内　天笑選

あのひとはいつも反対する流儀　螢
流儀などどっちゃらでもよい茶を淹れる　岳人
弔いに土地の流儀が生きている　たもつ
自分流通しあちこち傷だらけ　楓楽
ケイタイを持たぬ流儀で凧になる　郁夫
缶ビールコップに注がぬのが流儀　昌紀
勝つもよし負けも又よし私流　美智子
両成敗母ちゃん流でけり着ける　(矢)五月
どこへでも長靴履いて行く社長　保州
飾らずにわたくし流に生きてゆく　みつ子
勝ち馬に乗るのは潔しとせず　尚士
指先に流儀が染みている踊り　准一
両かいな返し白鵬せり上がる　淳司
自己流でメジャーリーグに花咲かす　いさお
のほほんとわたくし流に生きている　夕胡
河内音頭自己流ですが唄えます　義子
天然の流儀で回る自然界　求芽
お好み焼きこてで食べるのが流儀　昌紀
人間のわがまま神を畏れない　幸雀
雑煮だけ婚家流儀に合わす嫁　東吉
外国の流儀引きずる帰国子女　玄也
おばちゃんの流儀で値切る朝の市　朋月
祝祭日国旗忘れぬ老父がいる　憲太郎
人は人蛙泳ぎを押し通す　たもつ
私流ハンバーグですふっわふわ　美花
漬物は口伝ばあちゃん流である　哲男
自分流お箸で食べるフルコース　賢子
シンプルに生きるのが私の流儀　義
俺の流儀だマヨネーズかけるのだ　道夫
生涯にひとりを愛するのが流儀　扶美代
我流だが父さんの字は味がある　一風
頑に流儀を崩さない老舗　玄也
しっかりと目を見ることが私流　美花
お流儀に活けられ草木畏まり　潤子
飲み会は欠席しないのが流儀　好
佳
流儀など知らぬ一輪差しの花　シマ子
風当たり避けて二番につけてます　可住
少しずつ今流に馴れ子とくらす　修
ただ酒は飲まないことにしています　一歩
野の花は私流儀で活けましょう　(志)千代
人
盆踊りふうが直らぬジャズダンス　時雄
地
自己流の子育てしたがぐれもせず　淑子
天
振り向かぬわたくし流の歩き方　山本希久子
軸
この国の流儀いきなりハグをされ

第四十回　和歌山県民文化祭参加
第十五回　和歌山県川柳大会

とき　**9月2日**(日)　出句締切り12時30分
ところ　JAビル本館5階大ホール
参加費　千五百円（事前投句料千円・切手不可
当日五百円受付　軽食付き・発表誌呈）
事前投句（2句　事前投句のみ欠席投句可
専用紙にて8月4日必着）
「走　る」　玉置　当代　選
出　題（各題2句以内）
「癒　す」　堀　冨美子　選
「記　念」　三宅　保州　選
「濃　」　谷平こころ　選
「名　前」　山下　修子　選
「バランス」　西出　楓楽　選
賞　知事賞　県議会議長賞　市長賞　市議会
議長賞　日川協会長賞　産経新聞社賞
懇親宴　三千五百円　大会終了後開宴
投句・問合せ先　〒640―8111
和歌山市新通7―17　古久保和子
(TEL／FAX 073―423―8930)
主　催　和歌山県川柳協会
後　援　和歌山県　和歌山県議会　和歌山市
和歌山市議会　和歌山文化協会
(社)日川協　産経新聞社

第25回記念　夜市川柳大会

と　き　平成19年7月31日㈫10時30分開場
各題２句　出句締切12時30分
ところ　堺総合福祉会館 5階大研修室
会　費　2,000円（昼食・賞品多数）
優勝トロフィー授与・フラダンス・記念撮影
事前投句（ハガキに２句７月25日消印有効）
『五』（堺）　河内　天笑　選
宿　題
「鈍」（和歌山）　木本　朱夏　選
「お経」（寝屋川）　前田　咲二　選
「リスク」（鳥取）　倉益　一瑶　選
「自然」（鳥取）　岸本　宏章　選
「息子」（阪南）　日野　愿　選
「育てる」（河内長野）　山岡冨美子　選
「許す」（大阪）　山本希久子　選
「心配」（東大阪）　谷口　義　選
「サイン」（鳥取県）　新家　完司　選
「大変」（藤井寺）　髙田美代子　選
披講終了　4時30分

夜市川柳の規約

往年の堺大浜海岸で繰りひろげられた真夏の夜の風物詩「堺大魚夜市」を偲んで「夜市川柳」と名付ける。

「川柳堺」誌上で毎年６月末締切分を第１回とし、翌年５月20日締切分までの12か月に亘るマラソンゲームである。

毎回の題及び選者は主催者が決定する。

（出句ハガキに３句、月末締切、清記選）

入選句は、毎回40句とし、川柳堺の翌月号で発表し、毎回の得点を重ねて12か月の合計で、その年のベストテンを競う。

(同点の場合は入選句の多い方を上位とする。)

得点　前抜　32句……各１点
佳句　５句……各1.5点
人の句……２点
地の句……３点
天の句……４点
選者軸吟……1.5点

夜市川柳大会は、原則として毎年７月31日前後の土曜日若しくは日曜日に開催し、その年のベストテンの方々を選者にお迎えし、第１位に優勝杯を贈呈する。大会終了後、ベストテン入賞者をご招待して懇親宴を行なう。

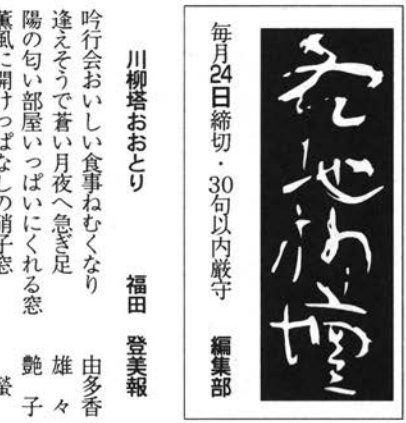
投句料は１年分3,000円とする。

第54回　八尾市民川柳大会

と　き　8月26日（日）　正　午
ところ　八尾文化会館　５Ｆ
レセプションホール
（プリズムホール）
かいひ　2,000円（作品集、鉢植花、軽食）
宿　題　［子］　太田扶美代　選
［異］　本田　洋子　選
［荷］　広嶋　英子　選
［世］　杉森　節子　選
［八］　森中惠美子　選
［家］　河内　天笑　選
［水］　宮西　弥生　選
締　切　午後１時（各題２句提出）
懇親会　4,000 円(希望者のみ当日受付)
主　催　八尾市民川柳会
後　援　川柳クラブ「わたの花」

第38回　奈良新聞川柳大会

日　時　7月29日（日）　10時開場
場　所　奈良県文化会館小ホール
バス(市内循環・ほか)「県庁前」下車
お　話　「巨樹にまつわる伝承」
グリーンあすなら理事長　森本喜與氏
席　題　「　」　吉川　卓　選
宿　題　「滴る」　福田　秋雄　選
「皿」　大村美千子　選
「姫」　牧浦　完次　選
「笛」　鶴本むねお　選
「賢い」　杉森　節子　選
「ひとすじ」　西川　国治　選
「変化」　田中　新一　選
各題２句　出句締切　11時30分
会　費　3,000円（昼食・発表誌含む）
出席申込　7月20日まで　〒630-8686
奈良市三条町606 奈良新聞社事業課
川柳係 (TEL0742-26-1335 FAX0742-27-7810)
欠席投句　〒680-8261　奈良市北市中町71
杉野　睦朗 宛（7月20日必着　500円）
主　催　奈良新聞社
後　援　奈良県市教育委員会



川柳塔おおとり　福田　登美報

吟行会おいしい食事ねむくなり　由多香
逢えそうで蒼い月夜へ急ぎ足　雄々
陽の匂い部屋いっぱいにくれる窓　艶子
薫風に開けっぱなしの硝子窓　螢
硝子窓みがく心の窓みがく　真一
蒼い刻一番鶏が鳴いた里　風花
新入生蒼い未来を進みたい　小生
初夏の気が蒼い海原越して来る　幸次郎
大山を逆さに映す蒼い海　以和万津
契約を結んで額に蒼くなる　ヒロ子
寝たきりへ硝子窓の陽ありがたい　清子
蒼い月花見の跡に顔を出す　道子
充電のつもり砂丘で深呼吸　登美

うぶみ川柳会　小谷美ッ千報

吊り皮に掴まっている春の飢え　美ッ千
花誉めて宿根までももらっちゃう　孔美子
表しか見たことのない月の顔　玲子
戦中派右向け右が上手かった　和枝
池の鯉ぴょこんぴょこんと寄って来る　くにお
一方の般若の顔は切り札だ　天人
一方の意見に押され貝になる　美知江
土蛙ぴょこんと出たが震えている　京子
熱くなる一方初心者の両手　尚子
あの人は掴まえ所なく困る　和子
平等にチャンスはあるが掴めない　かつみ
柔らかい言葉にぴょこん国訛　龍枝
手を離れ風を掴んだ竹とんぼ　よしえ
掴めない理想ばかりを持ち歩く　睦子
宮崎で知事さんぴょこんぴょこんだね　幸恵
デコボコが目立って困る丸坊主　芳江
お雛さんぴょこん正座で一人言　和
一方にかたよるまいと目をつむる　雄人
額打ちぴょこんと瘤がとび出した　重忠
ひとつだけぴょこんと現われたニキビ　あづま
来賓にABCを付けておく　ひろこ
東風に背を向けながらひとり旅する　螢
日本を掴んで投げ捨てる蒙古　石花菜
明日は飛ぶんだハンガーの主賓服　宣子

和歌山三幸川柳会　喜田　准一報

遊ぶ約束してから弾む野良仕事　イセ
ホーホケキョ遊びたいから鳴いてみる　登美代
遊ぶのも寝るのも一緒倦怠期　当代
久久に遊ぶ絵筆に山笑う　幸
均等法あなたと同じだけ遊ぶ　起世子
道連れは遊び上手なゆで玉子　朱夏
遊動円木ともだち一人振り落とす　和子
ボランティア花の咲く種播いておく　美子
菜の花が咲いてこの世が光り出す　かずみ
太陽を信じきってる三分咲き　次根
咲いている時には見えぬ土の愛　純子
徒花でいいのあなたの傍で咲く　昇
株の花咲かせてみたい低金利　一歩
咲いているのは自分の力だけでない　保州
幕引きは大きな花が咲いてから　みね
美しい嘘が造花にからみつく　碧
あした散る花でも今日を咲かせきる　幹子
遅咲きの娘めでたく嫁ぐ春　義雄
へそくりがにこにこしてる額の裏　八重子
冬眠から覚めてにこにこする五感　美枝子
にこにこと互いに腹を探り合い　准一
にこにこがウルウルきてる式次第　町子
メレンゲのような笑顔にのせられる　章子
お迎えへ満開になり飛んでくる　公子
春雨ににこにこしてる花粉症　桂香
寝たきりの母中心の日課表　武
尽し過ぎたために枯らしたチューリップ　宏夫
春愁に語り尽せぬ悔いばかり　徑子
燃え尽きて命ころがす落椿　さち子
プリマで立つ日まで尽したトーシューズ　孝子

すみよし川柳会　岩崎　公誠報

現在の音楽酔えぬ戦中派　定子
老いたのか賞味期限を足で知り　日の出
急ぎ足待っててくれる人がいる　かりん
よく歩く足に感謝のハイキング　幸子

年月が足早やに過ぎ老いを増す　ヒロ
足音が聞えたとたん話止む　明江
年忌にて親の足跡思う子ら　俊夫
一張羅一の足踏ます急な雨
性格が足に出ている電車内
足並を揃え元気に歩いてる　萠
短い足もつれる事もあるのです　文香
完走の足にはたんとありがとう　舞夢
かあさんのご飯ですよに駆けだす子　蕉子
フェロモンに弱い男の軽い足　ダン吉
取り敢えず足を投げ出す旅帰り　まさ子
足元がふらつき出してから五合　朝子
言わずともいいこと言って足が付く　桃花
言い訳の思案で覚めた千鳥足　公誠
足むけて寝られぬなどと口先で　裕之
裸足の猫を裸足で犬が追っかける　遠野
利昭

川柳塔おっぱこ吟社　木村あきら報

赤い糸褪せてつないだ喜寿の旅　伸子
一言を呑んで波紋を遠ざける　弘
陽の当る場所には何時も笑みがある　八重子
時どきは狸寝入りもして同居　はつ恵
断定に変わる恐さを持つ噂　かおり
無い袖は振らずに見栄を捨てて生き　ひかり
使わない介護保険がまた値上げ　賢
地蔵さん黄色い傘に笑い掛け　放任
春風に乗って黄砂が攻めてくる　貞月
グチを聞く夫の笑顔に癒やされる　あきら
感謝する事を忘れず我が余生　寿々女
無位無冠この世の華を燃えている　よしみ
いさむ

サークル棹様　吉田あずき報

策に溺れ自分が乗った泥の舟　美籠
おっとり育ち騙されたこと気づかない　みつ子
マジシャンに騙されこころ癒される　光久
素晴らしいどんでん返し待ってます　義子
騙されて性善説を否定する　あずき
騙された振りもたのしい四月バカ　いわゑ
歩き続けるつもり私の道である　希久子
失意濃い日なり昭和の唄耳に　清生
騙されてなるかと影が従いてくる　たもつ
騙されてやろう三歳児のたのみ　千代
お得ですその一言にサインをし　哲夫
愛想いいセールスマンの二枚舌　遠野
騙されて少し賢くなりました　楓楽
蛍光灯チカチカ男手が欲しい　房子
もどり寒何度もなんども騙される　扶美代
騙しよい母は何でも知っていた　昌紀
蝶々が去った我が家の隙間風　文子

川柳塔みぞくち　小西　雄々報

着飾ってルンルン気分軽い足　弘子
ブランドで飾り女の見栄を張り　和代
あきらめか悟りを飾る絵が書けぬ　智恵子
飾り気はないが古老の農談義　久子
飾っても飾らなくても俺は俺　信雄
着飾って私好みの鏡見る　公美枝
リハビリへ少し邪魔する耳飾り　鈴枝

佳句地十選（6月号から）

瀧本きよし

騙すよりだまされるのが性に合う　房子
よく弾む毬がときどき憎くなる　朱夏
がっくりの肩に無言の手が温い　公子
棄権して文句ばっかり言ってはる　ダン吉
ぼろかすに言いつつ本音惚れている　清信
絶筆の句が出来ません死ねません　勝視
造花まで春だ春だの顔をする　求芽
合格の日から日記は白いまま　一風
担任を選べないから塾流行る　烈
風になんかならないずっと君の側　利昭

髪飾りつけて可愛い七五三　静江
着飾って出たけど褒める人もない　雄々

高槻川柳サークル卯の花　瀧本きよし報

知事当選今朝の寝覚めはさぞよかろ　高栄
朝・昼・宵眠くてもしや認知症　宏章
明日ありと信じて眠る高いびき　義一
喪が明けて眠りがどっと深くなる　きよし
宇宙からメールが届く子供部屋　重人
嫁った娘の部屋の窓開け呼んでみる　照子
四畳半液晶テレビで広くする　勲弘
狭い部屋書籍に囲まれ落ちつける　治三郎
娘が来ると部屋の空気が若くなる　美籠
想い出を片付けぬまま父の部屋　昭
欲捨てた心の部屋が広くなる　郁夫

人間は暗い部屋から発芽する　美義
開くのがこわい小部屋が胸にある　葉子
出る時も帰ってからも部屋ひとり　求芽
芝居ならしっくりはまるいいセリフ　公子
しっくりとしない言い訳聞かされる　昭二
嬉嬉として雑音拾う妻の耳　かおり
母になる吾が子の鼓動聞きながら　乃りこ
饒舌が巧みに包み込む本音　秀夫
不協和音ばかりでもめている会議　泰雄
澄んだ空間こえてくるよ春の音　祐作
にんげんを鈍感にする電子音　幸雀
鈴の音が優しくひびく花遍路　活恵
もういち度表札を見てベルを押す　庸佑
スマートな発音嘘も混ざってる　典子
演技して流す涙はすぐ乾く　宏章
ひなたぼこ猫に欠伸をうつされる　萬的
マージャンで徹夜出社の生欠伸　武史
乾杯は一度でいいと紙コップ　孝一
廃船の舳先が海を恋しがる　酔虎

東大阪市川柳同好会　森下愛論報

母さんの温もり残る文机　良子
ビカビカの一年生を待つ机　和子
机上では見事なプランだったのに　ダン吉
初恋の手紙を燃やす薄けむり　八郎
美しい日本にしたいゴミを焼く　章久
ふくらんだ餅が笑っているようだ　太郎
盃をコップに変えて流す憂さ　風子
一杯の水に命が救われる　朝子
割るためのコップは百均で揃え　克己
きれい好きの夫の素質に肩がこる　緑
団塊の素質生かしたボランティア　あや子
素質の上に努力を積んで掴む夢　美弥子
涙腺の脆い女のイヤリング　柳弘
紺のれん女を捨てた母の意地　湖風
優しさを秤にかけている女　愛論

竹原川柳会　時広一路報

椅子をください神を座らせたいのです　蘭幸
椅子ひとつ守って今日も暮れて行く　房子
反省をする椅子なぜかよくきしむ　笑子
しがらみを切って覚悟の椅子に就く　敬子
また来るね上手に押せた車椅子　規代
針千本のんで椅子にはしがみつき　節夫
デカイなあ椅子が私につぶやいた　比呂子
結論を急ぐ男の固い椅子　力
ご自由にと聞けば尚更むつかしい　栄恵
ご自由にどうぞと書かれ花の苗　汎美
やっと自由笑う笑うぞ思い切り　幸子
御自由に手綱しっかり放さない　淑子
本当の自由人なら空を飛ぶ　節生
朧月ゆっくり解けてゆく呪縛　厚子
ペンペン草の中で自由を見つけたり　輝恵
楽園のりんご自由の味がする　あゆみ
乙武さんの自由とぼくの不自由と　静風
満願の水平線にある自由　万年
春だよと磯の誘いの声がする　慶子
春わびし緋桜色のうつになる　太虚
姉も母にやさしい顔になってくる　千枝
大地震に備え大きな机買う　史子
原点の朝日山でバンザイだ　千代美
竹の町竹はすくすく伸びてるに　笹舟
ここが竹原これが竹原竹並木　一路

川柳塔のぞみ　播本充子報

フランス語習いシャンソン連れ歩く　春雄
趣味ひとつ持って余生が彩られ　渓舟
トス上げる妻の呼吸を読み切れず　方子
おいそれと亡母の着物は手離せぬ　宣子
ライバルを離し気になる足の音　慕情
親元を離れて悪に手を染める　久峰
晩学の趣味に残り火揺らしてる　賀世子
趣味のいいカップを褒めるティータイム　哲代
新しいGパン古くする若さ　遊花
趣味嗜好預け十年妻介護　敏
わたくしとコンビを組んだ人が泣く　那珂子
秀才とビリのコンビが座をわかせ　桃葉
趣味の輪を広げたまには火傷する　康子
丸の内フレッシュマンの歯が白い　あやめ
書き写し芭蕉と趣味の旅をする　清
ネクタイに試されている妻の趣味　勝
旅先で出す絵手紙も板につき　つよし
新築の香りローンを忘れさせ　リッ
お互いの明日を信じてるコンビ　三喜夫
暖冬で趣味のスキーが泣き崩れ　順風
配球の手腕にまたも牛耳られ　権悟
趣味ですと言ってるうちはまだ青い　やすお

おーいお茶わかってくれる春をまつ　尚
半世紀名コンビにも出る亀裂　公誠
相方は恋女房でございます　由一
新しい風に飛び乗るのも勇気　充子
趣味三日やめると脳が欠伸する　朝子

はびきの市民川柳会　徳山みつこ報

市会議員一週間の舌で生き　真一
袖の下舌なめずりをして受ける　六点
牛タンを食べて私の舌増やす　みつこ
行きダブル帰り成田で右左　久仁子
孫はたちダブルの背広が良く似合い　敏
ダブルカフス今日は肩肘張っている　章司
金欠へダブルパンチの株下落　ヨシ枝
竹の子をもろた裏から向かいから　光男
ダブルのベッド夢は全く別だった　一壺
犬も寝てダブルベッドが狭くなる　喜久子
墓参り終えて土筆の首を刈る　一知
待ちわびて伸び切った首戻らない　アヤ子
ペコチャンが首を振りふり客を待つ　静子
難題へ首つっこんだお人好し　庸佑
首筋の老いスカーフに隠される　泰子
美徳とも言われ内気を胸に抱き　獏沓
平均を生きて余生に夢を抱く　かつみ
ふる里の山に抱かれてウツが溶け　恵勇
星に抱かれ疲れふっとぶ露天風呂　耕策
叛くかも知れないものを胸に抱く　扶美代
重荷にはならぬつもりの万歩計　重人
責任の重さ感じている無口　志洋

花の下重い話は明日にする　りつえ
重責を背負ってからの不整脈　いさお
新人の世慣れた論を聞いている　ダン吉
髪を撫で心うるおす千の風　フジ

ほたる川柳同好会　水野　黒兎報

停車する度駅弁と缶ビール　柳童
細工などないあけひろげ僕の肚　肋骨
匠の技茶筅に生きるお茶の味　幹治
妻のワナうまい細工でよくしまる　いさむ
竹細工トンボ作る子今どこに　長一
不細工な盛り付けだがと父の膳　見清
賑わいは遠くへ風の通る駅　桂子
温かった細工師祖父の分厚い手　勝
小細工やめお天道様と手をつなぐ　契子
上の句へ中八救う技教え　信男
叱られて心の傷が救われる　美智代
不細工な私にも来た春がきた　宇乃子
厄介な人肩書きを振りまわし　螢柳
赤ちゃんポスト命ひとつは救われる　久子
車道行く亀さん拾い飼ってます　勇治
救われぬ辛いイラクの戦渦まだ　禮子
肩書きが外れて雲と友になる　黒兎

川柳塔唐津　仁部　四郎報

大豆播く地球持ち上げ出る双葉　晴翠
願望の句を詠み鞭と拍車入れ　勝視
行かぬのにパチンコ山と広告し　實
アクセサリー無くてもきみは美しい　正剣

飽きもせず丸い地球で角を立て　蜂朗
叱っても甘えの因子へこたれず　水笑
新人へつかまえさせた言葉じり　四郎
歳の功科は要らぬ隠し味　輝夫
胎動を聴いてと妻が窓をしめ　高明

尼崎尾浜川柳会　山田　耕治報

すぐ壁にぶつかる一直線の癖　紀乃
壁掛けの裏に秘密の部屋がある　きよし
支えられ障害の壁越えて行く　まさえ
競り勝った椅子で居眠りする議員　桃花
クラス会昔の序列生きている　靖鬼
もうあかん言って白寿の祝い酒　五月
土砂降りも用足す犬のお供する　よし子
すねて見て女反応たしかめる　里江
トップにはお詫び上手な人を据え　美代子
善人を演じ続けてくたびれる　朋月
芽が出るも出ないも時の運次第　宏一
ブービーを競り合っているにが笑い　耕治
バラバラに来て母こき使い子等帰る　亀与子
ふる里の星空を見に帰るかな　孝一
なぜそこで一言が出ずあかんたれ　イサミ
イエス・ノー素直に言えた夜の月　正治
披講にも合えず今日も句のあくび　義芳
腕力はないがジャンケンには負けぬ　鹿太
泣き虫が自信をつけた徒競走　美籠

川柳花の輪　妻谷　重風報

もやもやが晴れて脳味噌みえわたり　薫

花粉去り気も晴々と花見行　隆盛
寺参り仁王の横に傘を立て　ミヨノ
沈黙が時には強く身を守る　泰子
気をつけやこの一言が子を守る　やすの
天神のお守り持たす入試の子　一笑
守られるはずの薬に裏切られ　隆子
脇道を母の優しい目が守る　勉一
伝統守る老舗に無情の震度六　一幸
肌守るお代年々高くつく　音成
荒療で飛鳥美人が守られる　重風

川柳クラブわたの花　山本　宏至報

どこにあるいざなぎ越えと聞くばかり　克美
漬け物をまだまだ噛める心地よさ　愛子
別腹へつい手が伸びるシメの品　孝子
バイキング浅漬けなすに救われる　和子
紅だけは死ぬまでさすと決めている　ますみ
辞書を引く脳もゆっくり目をさます　ミツ子
子の相談ときに鬼にも仏にも　君江
女心がまだ揺れてます挙式前　耀一
スタートに立ち思い切り飛ぶ勇気　民
スタートは六畳一間夢描く　知佐子
グルメ旅終えて我が家でお漬物　美代子
妻いつも夫の意見反対し　荘治
茶畑の萌ゆる新芽に風薫る　博子
何事も自分で決める生きる知恵　俊子
欧米じゃない日本ですよ銃の音　たえこ
春の風咲かせて散らし夏が来る　正春
それにしてもテレビCM多過ぎる　浩三
窓を開け今日も変らぬ朝の庭　幸枝
姑のいつもの話感嘆符　晴美
まだいける十年日記買う傘寿　宏
古伊万里を愛した亡夫と二人ぼち　美はる
一年中連休ですと疲れ顔　欣子
シーサーが日傘欲しいと叫んでる　ふりこ
青い目も混じる受験の百度石　義明
惜しまれつ最後を飾る花吹雪　いつふみ
晩学の友とも師とも言える辞書　宏至
どきどきがセピア色した初デート　はじむ
庭を打ちわくわく野菜の種を蒔く　妙子
聞きたくない話で腰が浮いてくる　八寿子
子の夢の弾む小さなシャボン玉　一風

岸和田川柳会　土橋　房枝報

まっさらの空気が旨い夜勤明け　尚士
水族館旨いと思うガラス越し　岳人
旨そうに食べて母さん喜ばす　(太)扶美代
煩悩の肩に一撃座禅堂　芳野
手抜きした仕事に油絞られる　准一
痛めた心歳月という自然治癒　希久子
旨いもの全て医者から止められる　楓楽
命とはたったひとつのオリジナル　夕胡
オリジナル守り通した頑固者　寿海
曲った胡瓜わが菜園のオリジナル　たもつ
母はまだ椿油の愛用者　保州
春眠の旨さ食べてる日曜日　シマ子
風邪引きも胃痛も母はどくだみ茶　潤子
浮世絵を油で描いたモネの技　昭
左利き散歩中にも油差し　幸子
川柳は心を癒す潤滑油　笑司
痛めてた心ジョークで生きかえり　香代
油売る合図の二人席を立ち　蛙城
転倒し友の膝痛やっと知る　(森)ふみよ
開幕の前に油断の痛い怪我　弘子
虎の子を旨い話に持ち去られ　珠子
旨いものやめられなくて通風に　楢代
農作業腰を痛めて過疎に住む　ゆい
ふろあがりビールの泡が踊り出す　泰弘
うちでしか売ってませんについ買った　和美
親心痛めつづける拉致の国　俊昭
かけがえのない子私のオリジナル　淳風
和を保つ酒という名の潤滑油　東吉
旨いもん食べてる時は心満つ　房枝
世界初九条正にオリジナル　ダン吉

川柳塔鹿野みか月　土橋　螢報

週刊誌結婚離婚にぎやかす　久枝
人生を狂わす記事の週刊誌　みさ子
貫いた意志へ厳しい週刊誌　八重
週刊誌もて遊ばれているこころ　永子
週刊誌旅の友して疲れ顔　みどり
週刊誌にのれば一応時の人　武子
言論の自由吐きだす週刊誌　公子
楽譜などいらぬ軍歌の大合唱　実満
満ちてくるものあり楽譜からもらう　宣子
人生も楽譜も音がずれたまま　盛桜
ピアノ弾く指へ流れてくる音譜　くに子

楽譜なし個性でうなる安木節　節子
敬老会楽譜なしでの無礼講　菊乃
しだれ藤春の楽譜で歌いだす　きみ子
花の昼千鳥の足もやってくる　幸枝
稲田ではおたまが楽譜奏でている　武彦
乗り継ぎの駅で迷子になっている　和子
生き様は死にざま余生犬掻きで　弘子
大切な軸が弱気になっている　睦子
尺八の楽譜チンプンカンプンじゃ　はるお
楽譜にはない半音も入れて生き　茶子
五線譜に人生という靴が鳴る　諷人
春がきてグリーン生きている畑地　保子
ごつごつと楽譜に焼芋を包む　孔美子
グリーンを添えたお膳が笑っている　汲香
グリーンに操られては花笑う　ひろこ
うれしい日ソプラノ響く心の譜　彩子
楽譜から飛びだす音に救われる　螢

川柳塔きゃらぼく　福代　天雀報

黄砂来る風の匂いがしなくなる　ゆき
目に見えぬ罠に時々ひっかかる　千春
旬の苺頬にふくむとあと幾度　千代
明日にも咲くと思っていた桜　繭
封印をときたい鍵がさびている　冨美子
その折の延命処置は要りません　初枝
調べてもあっさり白状しませんよ　亜弥
リハビリを教えていくと鳩が鳴く　てい子
カタカナ語しゃべる曽孫の伸び盛り　すみえ
春が来て今満足の桜咲く　雪江
聞いたウソ忘れなさいと風の私語　やえ
春の宵うれしい知らせやって来た　那珂子
花の下昔も今もくだをまく　天雀
落椿水面をゆらす風情あり　章江
今年また土筆佃煮生駒から　寿々子
思い出を神話のように抱いている　春枝
借り物のこの世の鍵もあと少し　恵子
風はやさしく春の童話を連れてくる　瑞枝
ぼんぼりがほしい私も夕桜　晶子
ひたすらに桜は咲いて散り際を　ふみ
それぞれの中で大正遠くなり　紫泉

川柳若葉の会　宮﨑シマ子報

行列に並び献立また変る　喜美子
タダならば並んでみよう暇だから　烈
ビルばかり並んで道も聞けぬ街　あずき
輪に並ぶみんなが見える和やかに　シマ子
山椒の葉蝶の蛹が食べつくし　弘直
花市の並んだ花に迷ってる　慶子
葉桜になって静かな木になった　ますみ
山椒の葉ポンとたたいて旬の椀　能子
新緑と五月の風が響き合う　加津子
葉の香りのこしてうまし桜餅　香住

川柳ふうもん吟社　夏目　一粋報

人生の錨降ろしてから無言　洋々
妖精の繭赤ちゃんを生みそうだ　忠良
富士山は日本一のイケメンだ　鬼桜
反抗期母は無言で抱きしめる　一瑶
妻からの定年離婚ままたえる　毅
玄関を無言で出ると淋しいな　はるお
イケメンの夫で年中落ち着けぬ　一京
四角四面叩かれ丸くなった石　美恵子
ままたえて我が子の名前全部言い　鍾旭
鏡見てからイケメンは追いなさい　公弘
無償だが返す笑顔に報われる　圭一郎
赤点に下駄を履かせてくれた母　無限
好きですと言われて歳がままたえる　螢
イケメンの顔した猫が今日も来る　茂登子
冗談を本気にされてままたえる　節子
春の雹人も桜もままたえる　雅女
待ちかねた雨で水増し田植え崩え　かをる
出来ちゃったポストに入れておきますか　あしび
喋りたい無言のままじゃ死にそうだ　孝子
ほころびた春に茶柱までが立つ　春名
真夜中の危篤電話にままたえる　孝男
死んだふり蟹にはさまれままたえる　蟹郎
妻の乱無言の裏が読み切れぬ　志げ緒
言い張った果てに無言がやってくる　富子
夢枕無言で笑う母に会う　義徳
ままたえて同じ言葉を重ねてる　菊香
ままたえてみてもどうにもならぬ足　善夫
ライバルの笑みがわたしを悩ませる　昌鼓
改革の大きな渦に逆らえぬ　金祥
み仏のような無言に怖くなる　一粋

川柳塔なら　坊農　柳弘報

呆けぬよう前頭葉を駆使してる　満作

ライト浴び出番待つ間の止まる針　カズ子
長老の乾杯出番多くなり　博一
夜桜が上気しながら出番待つ　ふりこ
本当の情けに触れる花へんろ　孝子
顔で怒り背中に情のある上司　章久
出番らしい千の風が吹いている　千梢
もうひと花咲かす出番を待っている　利昭
無理せずに担げる縁起だけ担ぐ　弘風
縁起いい茶柱過去を切り捨てる　恵美子
吉日を選ぶ暦にある迷い　義久
春野菜しっかり旬をたべてます　洋子
向かい風しっかり結ぶ靴の紐　恭昌
同情を重ねて愛に突き当たる　寿美
ただ一度シンバルがなるシンフォニー　真理子
子に還る母をしっかり抱きしめる　富子
寝たきりになって情けの字を覚え　一風
うたかたの命だしかと燃え尽きる　良一
青汁を飲んで出番を待つ河童　義
しっかりと汗敷きしめた父の道　隆盛
居酒屋の隅に煤けた招き猫　美千子
愛情に飢えていじめる子も哀れ　朝子
厄除けの鬼門南天凛として　秋雄
墨入れた縁起ダルマが笑わない　比呂志
末席で出番待ってる以下同文　柳弘
わたしの出番母と女を演じ切る　理恵
出番ない正論抱いて黄昏れる　和夫
しっかり目の塩で夫を茹で上げる　成子
木の芽和え人の情けをしみじみと　道子
茶柱に頼っておれぬ今日の運　六助

南大阪川柳会　吉川　寿美報

へたな字ですぐに飛びつくキーボード　ただよし
賞味期限切れていたのか変る味　雅文
銀行の栄枯盛衰見た公孫樹　弘風
栄転に単身赴任望む妻　更紗
繁栄の陰で氷河が溶けている　尚士
繁栄は真心を売る小商い　集一
絶頂の恐さを知っている寡黙　ダン吉
奔放な6B一本持っている　たもつ
4Bが僕を裸にしてしまう　栄子
鉛筆が滑らない日の物思い　志華子
どんどんと四季の知らない野菜ふえ　福世
命より先にどんどん減る貯金　郁夫
迷わずにどんどん進む蟻の列　洋
えらいこっちゃ残り少ない髪と金　ばっは
昭和史をどんどん遠くする平和　久乃
喪が明けてどんどん母が若返る　柳伸
呑むほどにどんどん加速する音痴　柳弘
悪法がどんどん通る国会で　勝弘
24億宇宙旅行も金次第　なぎさ
たくさんの未知を身体に生きている　直子
未知だから新入社員はたのもしい　弘泰
未知数の彼の前途に期待かけ　東吉
人間は未知の世界にあこがれる　太郎
未知数のわたしに賭けて呉れた妻　祥昭
未知数がいっぱい遊ぶ保育園　楓楽
幾つまで生きるか父母の年齢を越え　叡子
まずくても心こもっていた弔辞　(吉)修

百歳を柱栄える大家族　章久
鉛筆で書いた過去ならすぐ消せる　千里
一言が過ぎて気まずさだけ残し　寿美

川柳塔わかやま吟社　牛尾　緑良報

陽が昇る前に昨日を拭いておく　泰
地球儀も母もカーブは真んまるい　登美代
ポーカーフェイスお地蔵さんの爽やかさ　大輪
千の風きっとほどけた音がする　あきこ
青葉風封切る指にある電波　寿子
爽やかな緑の風にトラクター　よしこ
拭くまでは気付かなかった脛の傷　英子
仏壇を拭いてこころが凪いでくる　夕胡
落書きの相合傘を拭き回る　東吉
ひと言に拭いきれない傷を抱く　准一
朱肉拭く決意はとうにできている　精子
拳骨で涙を拭いている闘志　裕美
心まで写るようにと鏡拭く　三男
ほろ酔いになると無邪気が顔を出す　美羽
百歳の笑顔に邪心などはない　保州
やんわりと心にトゲを刺す無邪気　小雪
グーチョキパー無邪気に老母と活性化　怜
童心に帰る無邪気な母の老い　和子
歳重ね無邪気になっていく笑顔　紀久子
拗ねて甘えて女無邪気な演技力　輝子
金棒の鬼が無邪気な目に負ける　正博
百歳の無邪気握手をはなさない　稚代
無邪気さがみんなの心まるくする　順子
童心がわたし無邪気とコマーシャル　佐一

過疎の里無邪気な笑顔和やかに　和
直球もカーブも抜けてきた命　紀子
曲がらずに打たれ上手になる余生　和香
変化球キャッチする技探る日々　冨美子
なだらかなカーブ女の温い肩　克子
カーブでのスピード地獄見えてくる　三喜夫

川柳茶ばしら　板山まみ子報

時刻表見ると過疎地が消してあり　文男
マッサージほぐされていて夢うつつ　秀水
あこがれの海女へデビューの子をたたえ　幸子
バラの庭見ながらお茶もバラの味　かつ子
百本のバラ贈られた夢の中　百合
定年になっても減らぬ酒の量　盛夫
親の敷くレール拒んだいばら道　美千代
言うほどのことではないがボランティア　まみ子

大原川柳社　山本玉恵報

折半の話に欲がからみつく　あすなろ
まだ舞うています我が家の台所　たづ子
薬袋の話がはずむクラス会　みさえ
夕焼けを拝んで母は今日とじる　美佐子
友送る黒服ばかり干して春　真
極楽はどんなとこかと覗きたい　巴子
近親の思い届かず桜散る　喜美子
仮面脱ぎ母バーゲンに並んでる　悦子
まだ生きる覚悟で軽い靴さがす　妻子
あの頃は自然で大きくなる育児　辰江
気を引いて拗ねた背中を放っとかれ　地佳平
蹲いて人の情を肌で知る　南花
春出合見た事のない花が咲く　さちこ
惚けと言う使者に背中をさわられる　敏夫
母ひとり朝の味噌汁いい匂い　夏子
老いてなお花便りきき心浮く　あや子
病院の待合室で聞く噂　文代
谷間からウグイス春を告げてくれ　とめの
ふる里もオール電化の中に住む　恵潮
窓明けて百花が匂う里も春　己吉子
鶯の声きき たさに遠回り　エミ子
花見よりクラス会へと足が向く　静子
痛かった足が歩けたうれしさと　絹子
肩書きが取れて出番のない名刺　はじ芽
十戒を守り通したつもりでも　玉恵

西宮北口川柳会　黒田能子報

浅みどりやがて大器になる兆し　光久
みどりの芽支柱を添える母の夢　美代子
守らねばみどりの大地子や孫に　千代
みどり児の握り拳の無限大　嘉代子
みどりの絨毯翔べばできそな宙返り　わこ
画布一杯チューブのみどり初夏描く　孝一
食卓のグリーンサラダ夏を呼ぶ　紀乃
ハンモックみどりの風が子守する　歳子
ふる里を描けばみどりの里景色　比ろ志
みのもんた兎に角緑茶飲めと言う　忠
帰省列車棚の荷物は温かい　いたる
難問はひとまず棚に上げてみる　宏一
いやなことまるめて棚にあげたまま　耕治
藤棚の下で見上げる花模様　悦子
違い棚それぞれ欲に軋んでる　松煙
言うことも言ってすっきり仏間の灯　美籠
告白をすればこころは五月晴れ　能子
告白をして人間を取り戻す　曙蝶
少しだけこぼれ餡こが嬉しそう　晴美
大家族一人可愛い落ちこぼれ　直
思わずも笑いこぼれる児の仕種　江美
手抜きする訳ではないが無洗米　富喜子
やさしさを花に託して嫁の声　光子
藤の波蹴ってブランコ空へ飛ぶ　哲子
未来図にもう無いだろうどんど晴れ　房子
オーマイパパひとり聞いてる母の日に　正和
反省はしてるが口惜しあの苦言　二英
合性がいいので落ちる穴もある　てる
打ち明ける肚のきまった酒の味　哲男
百態の花百態の風と逢う　折杭

あかつき川柳会　山本柳昌報

あかつきに凍と輝く彬の碑　正
生きている限りかがやく夢をもつ　良知
明日こそかがやきたいと床に着く　利昭
いっぴきの金魚ときいた千の風　あかり
口紅が付いたコップが良く喋る　郁夫
乾杯のコップの底にある謀叛　孝一
初産の部屋のコップのスイートピー　シマ子
書き終えてコップ酒は甘露なり　一歩
返杯をコップで受ける心意気　紀雄
お隣の鳥肌が立つバイオリン　尚士

やがて来る日の音楽を選んどく　蕉子
ビートルズ聴いて青春カムバック　祥昭
音大を出ても仕送りしています　智彦
始まりは音楽仲間という絆　弥生
新生児にいい顔顔が映ってる　見清
美しい国が映らぬ未来像　朝子
彬の碑テレビに映る日も近い　東吉
浄玻璃に映る過去から逃げられぬ　修
夕映えの中に新子は逝きました　生枝
給食費払わぬ顔が子に映る　章久
保険庁企業がにぎるきざし見え　美智子
ランク付け学力テストああしんど　柳弘
遊園地遊ぶどころか命がけ　五月
疑わず並んで行けば戦になる　廣子
九条は平和を守る金字塔　勝弘
夜空にスバル地に九条の道しるべ　鈍甲
なぜ撃った長崎の鐘鳴りつづく　富美

八尾市民川柳会　宮西　弥生報

カタカナの花ばっかりが咲く花壇　耀一
腹の中二匹の鬼がせめぎ合い　ますみ
追ってきて追越してゆく孫の背　浩三
春うらら牛の尻っぽで蝿を追う　いさお
今の世は武士の一分が足りません　紀雄
花と心ひとつになって咲く花壇　宏至
てのひらは夢を咲かせている花壇　朝子
チョロチョロとついてくるのは母らしい　あかり
追うものがまだあり燃える手を包む　ダン吉
尾行されぬようにくねくね道を行く　扶美代
また一つ幸せくれる花が咲く　賢子
男から女尾行の罪作る　春蘭
気いつけや美人時どきつけられる　一風
花壇にはレンガのふちがよく似合う　由里
追う方も追われる方も命がけ　欣之
いつの間に追いつめられた土俵際　紀乃
身ひとつを制御しかねる花あらし　柳伸
冷え切ったスープは追わぬ日の別れ　弥生

川柳大阪　長井　善純報

腹立ててそない磨きな皿割れる　かよこ
産む機械そない子供は産めまへん　五月
車いすすがる母の手力なく　花笑
大臣の椅子にすがって嘘をつく　鉄心
海岸ですがる女を下駄でける　まつお
どん底へ友のさし出す手にすがる　一風
公園は雨だ小猫の目がすがる　ダン吉
南極の氷を溶かす温暖化　珠生
熱心に口説いてくれる人が好き　喜楽
胸熱くさせたあなたのひとり言　彦太
熱かんでひえた心をぬくめます　和
新婚のあつさ忘れた妻がいる　川童
熱練は山の気象を侮らぬ　東吉
熱年の歩幅と胸は迷いなし　信酔
熱睡の目覚め太陽の恵み知る　洛酔
ありがとう今日が終った熱いお茶　笑風
恋はまだ微熱を抱いたまま独り　柳弘
枯れ切れず熱女のまんまです心　朝子
派遣でも工夫こらして正社員　笑歩
使っても減らぬ財布を工夫する　青道
大輪がやっと工夫の彩で咲く　まつお
浮世には工夫と運のからみあい　福世
捨てる前工夫してみるお気に入り　ひろゑ
ノーベル賞苦し紛れの工夫から　孝一
人生を工夫楽しく明るくに　一風
目や耳を疑うほどの世の変化　功
政治家は玉虫色で国を塗り　隆司
熟れるもの熟れ満ち足りる雪月花　重人
座り直し妻の熟視が怖ろしい　章久
情熱がまた蘇える春の風　善純

長柳会　村上　直樹報

ほろ酔いの頬を夜風のお出迎え　直樹
旱魃で水車を踏んだ玉の汗　武男
好き嫌いどこが好きかと妻が聞く　ヒロ
千鳥足帰り着いたらバタンキュー　正博
中世のロマンがのこる水車小屋　輝子
水車小屋のどかな村の風物詩　靖子
夜桜を見ながら旨い酒に酔う　靖博
山村の水車で捏いた米最高　明子
就職に取った資格も役立たず　不二雄
健康で長寿勝ち取る戦です　正一
春雷に照る照る坊主腰抜かす　美代子
五月雨に水車と遊ぶ青蛙　英美
家庭より仕事を取って来た世代　芳野
簡単に取った免許で職がない　和代
青春の影を引きずる風の中　けい子
風波でネオンがゆれる戎橋　よしお

遠足で水車囲んで豆画伯　敬二
汗の日々静かに偲ぶ老水車　三和子
舵取りをしてるつもりがされている　もこ
風体は悪いが味のある亭主　マサ
親の脛かじって巣立つ雛の春　登美子
故郷の夢はモノクロ水ぐるま　正子
好物を取って置く癖母譲り　史
ふるさとに吹け子の風オールドブラックジョー　淳司
高嶺の花取るとみるみる色褪せる　正美
使い切って取り合いさせぬ親心　幸雄
もう無理はしない水車の音にのる　一慧
水車遠い故郷の子守唄　和子
格差など知らず水車は蕎麦を挽く　冨美子

川柳さんだ　北野　哲男報

千の風に乗せてあげたい茶の香り　婦美子
玉露よりわたしやっぱり玄米茶　光久
夫には絵葉書だけで茶を濁す　宣子
さざ波が消えて紅茶のうまいこと　歳子
偲び草テレホンカードたまってる　千代子
草餅の匂いが母を呼んで見せ　藤朗
千の風になって行くのか偲ぶ会　雅司
友が逝く青春の日の曲を聞く　章子
饒舌な男に変える酒の席　美紗子
我先に逃げる男が多すぎる　忠
米を磨ぐ男やもめの背が丸い　朋月
ゴハンよの声ははっきり聞えます　キヨミ
つくしんぼどの子も摘みに来てくれず　哲夫
肝臓に感謝こそすれ休ませず　好文
我が頬のヤブ蚊たたくに遠慮気味　一泉
美しい国にするため掃いている　二英
別嬪のくせに鼾がすごいらし　正和
陽と土のリズムに合うた旬野菜　哲男

翠洋会　谷口　義報

信念を貫く冴えたペンの跡　みつ子
彼岸からのエッセイお待ちしています　楓楽
我が道を粛粛と来たベレー帽　美籠
いぶし銀の詩人が独り旅に立つ　昭
ベレー帽ペンを片手に逝かれけり　久峰
足跡を沢山残し旅に立ち　千梢
奥深き才能ひめし星は逝く　叡子
師の名句宝となりし箸袋　桃花
ペンシルをみやげに浄土の句座楽し　千歩
お人柄惜しみ赤えんぴつ偲びつつ　捷也
一枚の葉書大事に持ってます　日の出
正坊の名のそのままで逝き給う　尚士
紀行句集届かず正坊巨星墜つ　さと美
赤えんぴつの教えは今も身に染みて　理恵
五月晴れ風になってもペンを執る　照子
万丈の句集を遺しペンをおく　満作
川柳の天に召されて逝き給う　水昇
翠洋会いらっしゃるだけパワー受け　舞夢
万の風吹かせた苦労にありがとう　春
赤えんぴつ左右において句をみがく　れんげ
召されても名句は永遠にここにあり　茶々
輝きをペンシルに乗せ逝き給う　蕉子
千の風ベレー帽の師笑みで受け　孝一
世を斬るペンしっかり握り千の風　富子
西方へ向い静かにただ合掌　すみ子
悲しみに五月雨煙る伏見町　正雄
慕われて蓮の台で句三昧　集一
ダンディーの遥か遥かにベレー帽　志華子
ベレー帽のほほえみ永久に雲の峰　清子
黄泉路いく赤えんぴつが口惜しい　恭昌

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

燃えつきた女が見つめる地平線　好栄
燃えるもの一つあったら生きられる　かつ子
どたん場で手をさしのべてくれた人　ちよえ
福耳の赤ちゃんですとはずむ声　伸子
古時計まだきざんでる形見です　聖子
どのときも時計は刻を打つでしょう　はるみ
燃えていたあの日の顔の美しさ　恵美子
ソ連兵に盗られて行った腕時計　博利
幸せは追うてもつかめぬものと知り　清泉

川柳塔まつえ吟社　三島　淞丘報

せせらぎを聞くと生れた里想う　叮紅
幸せと思うグラスが二つある　淞丘
淡々と詫びる思いの葉書かく　礼子
金粉の酒で思いが満たされる　ちえこ
反抗期思うつぼとは言いかねて　捷子
思うまい遠い昔の愚痴になる　茂美
岩田帯半分母の顔になる　桂子
男帯亡夫の匂いの染みたまま　多喜
帯解けば旅の重さがふと落ちる　紫晃

帯締めに彼のイニシャル秘めてます　幸子
母の帯辛酸なめたあとがある　蘭水
兵児帯はパジャマに城をあけわたす　たけし
予定表白紙のままに花が散り　薫
畔刈って田植えの予定表つくる　螢
子の予定私の予定カレンダー　繭
蹲いて番狂わせになる予定　治代
予定より盛況てんやわんやする　静恵
予定にはなかった検査気が揉める　政子
若草が誘う奈良の仏たち　日出子
電話口誘いに乗った夏の靴　知恵子
天国の一歩前まで誘われた　柳歩
薫風に誘われ足が走りだす　幸
お日様に誘われ布団顔を出す　たえこ
薫風に誘われ老いのペダル漕ぐ　昌枝
もたもたしたがまっすぐ生きてます　博子
孫たちの心まっすぐのばしたい　小生
まっすぐに歩けば打開の策がある　多賀子
まっすぐに歩けぬカニのひとり言　房子
まっすぐに伸ばした手には風がある　畔
まっすぐに伸びる竹の子未来見せ　注湖

尼崎いくしま川柳会　春城武庫坊報

あの山の向こうの父母と研する　宏一
光る子も光子と読めば普通の子　矢薫
指切りの約束光る風の中　紀乃
風光る丘葉ざくらの今が好き　年代
アルバムをめくると昭和光ってる　武庫坊
光るもの一つもないが子が二人　和子

飛行機の雲の上とぶ夢ここち　正子
老ゆるとも胸に育む小さい花　東園
モナリザは柔和な笑みのまま老いる　久子
鶴を折るきれいな指を持っている　芳子
戦争の怖さ薄れるほどに経ち　幸子
鵞の一声添えて昼ご飯　守弘
同期会反面教師の人に会う　寛之
愚痴ばかりきいてくれてる友がそばに居る　ゆき子
筍や旬と言う字を飲み込んで　半蔵門
子の許へ帰る友よよかったね　しづ子

むらくも川柳会　毛利　幸報

ふる里の小川に深い恩がある　恵美子
川の水悩み託され海に出る　幸
時流だと川の流れに乗ってみる　美保
ひと雨で川は大蛇の顔見せる　彰
川に来て何時もの姿取り戻す　かずこ
川の面に浮かぶ鴨らに餌を播く　定子
遠くした里の小川がうたいだす　秀夫
茶摘みする昔乙女の懐古談　愛子
同窓会しわの数だけ成長し　信夫
安眠の蛙に詫びます今日の鍬　ます美
桜花鬼一升瓶かくしてる　蘭水
布団に散る花占いのいち枚よ　瑞枝
無器用がとりえと妻に励まされ　俊夫
花が好き相性ぴったり影法師　喜美
気分だけいいが足腰ついて来ぬ　義良
転居通知ちゃんとくださる有難さ　秀子
春迎えもう芽を吹いてふきのとう　英男

喜寿となりめそめそすれば嫌われる　宣雄

京都塔の会（前月分）　都倉　求芽報

ご近所をひと回りしてランドセル　篤子
ばらの毒　篤と解剖してみます　ふりこ
残酷なニュース聞いてる九官鳥　和友
春つげるたんぽぽの種風に乗り　英子
おざなりな工事と見抜く青写真　庸佑
おざなりな授業生徒は気づいてる　福子
おざなりにせぬお薬よーく確かめる　春
おざなりの空気を破る人が来た　典子
おざなりにしてた罰だ畑痩せる　百合子
懸命とおざなりの日を繰返す　綾子
おざなりはあなたの方と引かぬ妻　ただよし
今となりなおざり出来ぬ人と住む　昌乃
なおざりに生きてあわてぬ蝸牛　集一
即答ができなく嘘も混ぜておく　きよし
混じり合い自分のカラー持てずいる　輝美
ハッタリもまぜて誇大な自己主張　萬的
老若男女混じり不思議なハーモニー　ルイ子
冬と春　混在しつつ開花待つ　満子
すんまへん田舎も混じる舞妓さん　宏子
人込みへ迷彩色でまぎれ込む　啓子
混じっても輝き続けてる北斗　葉子
母の日は敬語も混じるランドセル　美義
一言の暗示がまといつく昼夜　欣之
夕茜　西方浄土の暗示かも　高栄
手を尽くし医者は最後の暗示かけ　求芽
おみくじは引かぬ暗示に弱いから　益子

京都塔の会　　都倉　求芽報

夢ひとつ叶ったひよこよく喋り　美義
あなたしか見えないひよこついてゆく　葉子
裏表見なきゃ噂は噂です　ふりこ
君らしい哲学を持つ心意気　春
なるほどとわかったような顔しとく　益子
なるほどと歴史の謎にミステリー　輝美
掛け軸の達磨が穏やかに笑う　篤子
穏やかな海は私を諭すよう　典子
しっとりと客をもてなす京言葉　萬的
穏やかな笑顔の奥に棲む魔性　宏子
おだやかな人の膝には猫も乗る　敬子
穏やかな春だ告白してみよう　則彦
穏やかな今日の海なら甘えよう　求芽
人生の助走はじまる入園児　綾子
定年後一年は助走すると言う　福子
巣立つ雛飛び立つ助走繰り返す　庸佑
助走する力が無くて歩いてる　きよし
歓声を味方と思い込む助走　欣之
今度こその助走へ風が加勢する　昌乃
熟年離婚助走ばかりで踏み切れぬ　満子

川柳ねやがわ　　森茜報

新しい恋です老人ホームです　勇太郎
新人と何時も思って隅に居る　ルイ子
ランドセル期待を詰めて走り出す　博泉
こつこつと登る私の道だから　典子
この辺でいいなと思う坂登る　利昭
無になって六根清浄ただ登る　修
九合目ここで心を引き締める　庸佑
登山家にあこがれている漁師の子　日出子
柿の木に死ぬまでカニは登れない　洋
一段毎にライバルの位置見て登る　弘一
パソコンと悪戦苦闘する海馬　頂留子
文明の利器パソコンに追いつけぬ　高栄
パソコンは性に合わぬと筆で書き　寿男
パソコンにこの高鳴りは分かるまい　仁清
パソコンで記号になってゆくこころ　純甲
パソコンは鬼門そしらぬ振りをする　ただよし
パソコンが老人力へ鞭を打つ　弘風
パソコンのカルテに私打ちこまれ　恵子
彼女よりノートパソコン抱いて旅　かすみ
争点は日中友好温家宝　麗
ソファーに地位と名誉が反り返り　とし子
親権の争点子ども無いがしろ　朝子
争点は二つに分けたメロンから　賢子
老人ポスト要ると世論も言いはじめ　一風
予報士が天気以外を喋り過ぎ　さち子
裏切りの雨は斜めに降ってくる　郁夫
家系です嘘の書けない申告書　薫
苦労したことを包んでいい笑顔　たもつ

川柳塔おおとり　　福田　登美報

癒える身へたくさん夢をふくらます　雄々
生きているだけでたくさんかかる税　ヒロ子
たくさんの友からもらう愛と知恵　艶子
健康だ今朝もたくさん飯食べた　由多香
たくさんの秘密が指間から漏れる　以和万津
夫婦別姓財布はひとつ仲がよい　螢
べちゃんこの財布哀れや泣きもせず　清子
ケータイが財布のかわりしてくれる　真一
旅の友駅にむずかし地名呼ぶ　小生
子等を呼び老後のくらし話し合う　道子
拉致の子を呼ぶ声がする日本海　風花
緑萌え森林浴へ山が呼ぶ　登美

岩美川柳会　　石谷美恵子報

七十路まだ花も嵐も越えてゆく　一京
論客に理論武装し身構える　孝男
竹槍を構えてみたが突っ込めぬ　蟹郎
身構えることは見せないかたつむり　きみ子
注射器を見ただけなのに身構える　節子
次男坊一戸構えるその早さ　稔
はっけよい構える孫にえびす顔　幸安
どの子にも父と母とがひとりずつ　螢
母の知恵一たす一を三にする　一瑶
口数の少ない姑は背で語る　睦子
嬉しくて悲しくて行く母の杜　茶子
母の日のバッグは孫が選んだと　菖子
勲章の約束はない母の汗　忠良
暗黙のルール二人の城にある　たぬ
きめられたルールはずせば睨まれる　和子
別嬪の横にも一つ枠がある　はるお
残照に解体したい過去の枠　公子
黒枠の父が諭した人の道　圭一郎
腕白の枠にはまらぬ頼もしさ　公乃

わたくしの財布の枠で飲んでます　重忠
画用紙をはみ出す幼児ママの顔　和枝
老人の枠の中にも夢がある　一粋
人生は無限選択枠にいる　清帆
枠外で入れる門が裏にある　かつみ
年金の枠で飛ぶのは知れた距離　雅女
頑丈な枠が理屈を言わせない　幸枝
母達の祈りいくさのない平和　美恵子

岬川柳会　八十田洞庵報

楽し夢続きは明日も楽しまん　俶子
波乱越え阿吽で生きる共白髪　和香
バラバラの友がつどいて面白い　洋子
はっきりと言えばあんたは認知症　蛙城
よわい七十波乱の人生まだ続く　桜琴
マスコミは他人の波乱食って生き　茂平
内気だったあの子にゃ嫁も子もあるに　和美
幸せは波乱のりこえ家族の和　年子
空っぽも心ゆたかに支え合い　令子
はっきりと言ったがために左遷され　とみ
幸せが一杯積まるうさぎ小屋　富美子
学業は忘れまいぞよヴァイオリン　洞庵

川柳塔みちのく　小寺　花峯報

別居した友の其の後はきいてない　ヒサ子
君と僕別れ別れになる朧　あすなろ
忙しいうちが花よとおだてられ　美鈴
輝きが違う大願持った眼は　成柳
双子ちゃん来れば忙しまた楽し　てる
免許証持って早くも五十年　隼人
交渉がもつれ自宅で締め出され　順風
忙しく稼ぐ軍手に穴がある　銀波
別々の趣味でも話題弾む友　ふさゑ
春が来て森のいのちの忙しさ　花匠
花から花エンジンかかるマメコバチ　愁女
しっかりと杖を握って試歩の朝　井蛙
冬の絵を描く暇がないキリギリス　黙人
拍手して確かな負けを意識する　岳水
媚を売る猫には勝てぬ家族の輪　花峯
認知まで世界遺産のながい旅　慕情
生まれたらもう鉛筆を持っている　劦
隈取りを取ればやさしい父である　五楽庵

サークル樫様　吉田あずき報

ジベタリアン本人たちはご機嫌で　みつ子
貧乏神に力を貸すと言われても　光久
種も仕掛けもございませんのわたくしは　義子
DNA考えもせず子に期待　あずき
鏡の中の女の欲は果てしない　いわゑ
御迷惑でなければどうぞひとつ傘　希久子
戦争をコミックとみる世代増す　清生
迷惑条例執行したい　いびき　たもつ
夕べのことは言わず黙って卵割る　(久)千代
また妻がペアーの服を買ってくる　遠野
迷惑をかけ合い絆強くする　楓楽
先手打つ友あの世へも先手打つ　房子
母はまだ傘に名前を書きたがる　扶美代
推理小説犯人を口走る友　昌紀
迷惑と言えず寝たふり呆けたふり　美籠
正坊さん浄土の句集送ってや（弔吟）　哲夫

豊中もくせい川柳会　江見　見清報

お墓にもタイプがあって夫婦もめ　石舟
立場上言ってることと聞き分ける　庸佑
真似るより本音で仕事しています　春
本物を真似本物を越えられず　重人
筋道を通せばいずれ晴れてくる　慶子
ファッションを真似ても土台があきません　タミ
法衣替えいずれ戦争始める気　啓生
満腔に自由を孕み鯉のぼり　夢
鉢植えで屈託のない葱坊主　満寿巳
貧乏は父の真似ではありません　勇治
大変だピカソのような孫の絵よ　郁子
楚々とした風情で男とって食う　尚士
あの人の生き方ちょっと真似られぬ　肋骨
様づけで苦情封じる医療陣　佳恵
逆風が吹けば吹くほど湧く闘志　幸雀
いいとこを真似して訴えられている　求芽
稚魚放流いずれ釣られるとも知らず　寿美子
いずれまた酸素有料時代来る　黒兎
ふる里の風は私を子に還す　美智代
真っ直ぐに生きて布石はためらわず　隆
ジーンズに老いを隠して万歩計　知香子
立ち場立ち場でつかねばならぬ嘘がある　萬的
新緑に染まり私も芽吹きます　巴子
芽の出る日期待されてる柿の種　宇乃子
世の中の風を読みつつ投資する　早人

風采は気にせぬ人の横に立つ　寅次郎
真似てみてそれから個性光り出す　千代
駆けずとも何れ立派な岸に着く　美義
母眠るふる里いつも味方です　玲子
自分史にたらればを入れ二度生きる　則彦

富柳会　池森子報

人間の増長天と地の余白　欣之
気がつけば君の器の中に居た　未知
物好きは人の傷みにふれたがる　宏至
肉筆を重ねて偲ぶ白牡丹　哲史
ゆっくりと回し自虐を解いている　萩乃
山坂を越えた二人に芽吹くもの　彦次
挨拶へ女意識をしての声　信子
たんぽぽの黄色命の灯を点す　よりこ
株分けのすんだ花から嫁がせる　扶美代
ならやまの桜あたりを買うておく　晴美
スリーサイズ努力したのはどの辺り　アキ
追い風にのって着地は欲しいまま　浩子
とまり木で妻と二人の苦労酒　紅紫朗
美しい答えが欲しい絵のつまみ　登子
紅を引き妻は楚楚と桜見に　高鷲
迷っても明日の風はすりガラス　澄子
ローカルが見事に咲いた道の駅　淳司
別れよう女静かに鶴を折る　伸雄
人生の巣立ち四月と言う舞台　鐘造
にっこりと春は窓辺に腰をかけ　奏子
居心地が良くて大きな父の傘　千華
自分史を開けば深い水溜り　安希子

サイタサイタサクラが咲いたもう米寿　ひろし
手軽さに気が付きみれば置き忘れ　弘子
永遠の課題舞台の平常心　七朗
まな板の音で目覚まし妻の愛　武人
スローライフ心のリズム陽のリズム　巳代一
会話なく夫婦の欠伸聞く茶の間　隆彦
花の下手軽な嘘が乱舞する　和子
母と娘が棘を抜き合う日のサロン　森子

倉吉川柳会　竹信照彦報

さつき晴れ学期新たに子の笑顔　和子
憲法が危篤五月のつむじ風　石花菜
すったもんだが一つもなくて五月晴れ　玲子
皐月賞賭博でないと馬走り　次男
御無沙汰をわびる墓前にさつき咲く　賀寿恵
キューピッドよ来たれと青き風に立つ　克枝
百歳までは数えるだろう仏さま　螢
本物は時を超えてもよく光る　康子
雨音も心にしみる木の芽どき　美籠
この峠越したらきっと楽になる　幸子
人種 主義 宗教超えた平和来い　みちる
口結び越えた山坂振り返る　風露
団塊の肥満ドッコイ貫禄だ　(前)喜美子
春が来た老いも若きも花を恋う　日出子
美しい国が壊れる音がする　悠子
音立てて欲しいとピアノ淋しがる　和枝
打楽器が持って来ました薫る風　孝一
金婚のデュエットずれたままでいい　ひろこ
雨漏りの音がメロディ奏でてた　鬼一

立つたびに膝の関節ボキボキと　泰輔
快復の足音高くやって来る　萩江
朝四時のバイク新聞乗せて来る　よしえ
産湯からもう一流の面構え　節子
一流になれないけれど自分流　由紀子
無名のコーチ一流育てあげ　遠野
一流より味が良かった二流品　龍枝
指一本触れずに消えた恋もある　重忠
東大へ行くなら山を売ってやる　茶子
一流の宝石指輪覗くだけ　美津恵
窯元はみな一流の面構え　照彦

川柳藤井寺　髙田美代子報

白バイにもっと走れとしかられる　耕作
妻よりも三歩下がって歩くボク　登志子
逆立ちで脳をいきいきさせている　みつこ
病院へ行くのにスキのないオシャレ　真一
生真面目を逆さに責める春の陣　昭子
逆さまに見るとピカソの絵は立派　瑠美子
逆転はないがやさしい人といる　扶美代
熱燗は羊羹食べてから貰う　一筒
心棒がゆるみ初めた倦怠期　アヤ子
椿チョコのカケラは蟻の御神輿だ　ヨシ枝
気がつけば盾にされてたお先棒　恵勇
耳かきが無ければマッチ棒でいい　いさお
一瞬の迷い人生棒に振る　龍一
かみさんを突っ支棒にして生きる　鐘造
棒針で編んだベストがあたたかい　雅枝
如意棒で駄目代議士を懲らしたや　淳司

茶柱にひと時なごむ昼下がり　一知
老人会お菓子出てからなごみだす　東吉
あの人がいるだけなのに座がなごみ　真一
帰省した娘囲んだちらしずし　重人
山歩き掛け合う声になごむ風　喜代子
おばちゃんの飴配られて座が和む　六点
まあ一パイ男心にある和み　悦子
遺産ないから和やかに親送る　かつみ
二次会は音痴が多いほどなごみ　シルク
けったいな春で桜が立ちどまる　マサ子
春雨が句会にさそう梅だより　静子
重い荷へ今更後へ引けぬ意地　庸佑
酒飲めるうちが華だと梯子酒　志洋
とっておきの涙が紙コップの底に　公輔

城北川柳会　小谷集一報

谷谷の桜開いて美しい　春蘭
子を墜す谷で決断鈍る親　集一
細細と片づけ嫁に疎まれる　千歩
結局は細く長くの人がいい　睦子
細ぼそと溜めてキンキラ霊柩車　とし子
細い火でじっくり母の煮ころがし　志華子
細身でも図太く生きる知恵を持つ　東吉
欠点を補う妻の良い笑顔　ひさ乃
薄味に補う櫟櫟ひとしずく　明子
つぎはぎの補修で生きている命　朝子
兄弟で補い合って出る笑顔　ルイ子
あの腰の細さは食事抜いている　昭子
美容院女の欝を捨てに行く　あやめ
ばたばたと今日が始まる母元気　利昭
食欲を少し気づかう夏大根　求芽
運命と言う暗がりの昨日今日　髙栄
おにぎりが上手くなったら嫁に行く　千里
イージス艦一目で安保見えてくる　正
いつまでも戦にうつつ抜かす神　修
文明の都市に無いもの星と闇　美智子
試着室歳を忘れて春を着る　はじめ
わだかまり酒一杯で溶けました　一歩
ポケットのごみが昨日を語りだす　郁夫
結局は借りていました妻の知恵　萬的
体重計頑張ってるとほめてくれ　弘風
鼻柱折られたように諭される　麗
生れつき鈍感力は具えてる　倫子
グループの大風呂敷に花が咲き　達子
治る治る暗示をかけて生きている　典子
並ぶのが嫌で祝日出歩かぬ　順三

川柳塔打吹　野口節子報

長谷寺の絵馬と緑にあいに行く　善江
新緑が濃くなるまで窓を拭く　蛍
全身で緑を食べるこの季節　三津子
みどり児を抱くパパの手がもどかしい　美知江
山躍り緑が笑う青春ほんのり　克枝
五月晴れみんな燃えてる若緑　禎元
我が庭に詰め込む緑ぎゅうぎゅうと　勝誉
相合い傘シトシト肩を寄せて来る　よしえ
しとしとと明治大正昭和初期　石花菜
シトシトと土は流さぬように降れ　玲坊
シトシトは嫌いレモンの彩を着る　美ッ千
悲しみが胸にしみ込むように降る　芳光
シトシトは神の恵みの休息日　孝恵
冗談の通じぬ夫に怒られる　睦子
怒っても人は育たぬ捩れ松　滋
怒った顔をしているがぬくい言葉だな　やえ
怒り虫その顔鏡で見てごらん　公恵
松枯れに山は怒ってこだませぬ　玲子
身勝手なひと科へ天も地も怒る　照彦
屁理屈を並べ雲行き悪くなる　芙美子
雲に乗り久米の仙人今日も行く　みちる
むくむくと欲望の雲涌いてくる　重忠
雲行きが予先変えて体当り　京子
青いキャンバスうさぎとかめの雲が行く　龍枝
棚びいて裸婦像となるちぎれ雲　和枝
雲行きが悪くなったら穴掘くる　幸子
今日を包み私をつつむ茜雲　みち子
絨毯の雲に寝そべりふるさとへ　和子
入道雲今にも涙こぼしそう　紀美恵
ちぎれ雲君も熟年離婚かい　節子

ローズ川柳会　山崎君子報

子犬のワルツ犬も弾んでいるのだな　みつ子
軍備して弾む国有り過去思う　藍
父は父母は母の字古日記　哲子
山みどり五月の風に鯉泳ぐ　トミヱ
今更に希望という字追っている　孝一
ホップステップ今日はいい日になりそうだ　美籠
てのひらに時々昔聞いてみる　武庫坊
弾むわけ胸底に秘め朝を出る　年代
えんどう豆ぷちぷち弾む恋のいろ　義子
あのボールどこまで弾む三塁打　君子

柳界展望

○4月15日、第25回東北川柳連盟川柳大会兼第34回宮城県川柳大会は仙台市プラザアエルに於て196人の出席者により開催。同人特選句

五月晴れ朗々と読む第九条　佐藤　古拙

岩手県川柳連盟賞受賞　佐藤　古拙

○第35回濤明賞第一席に同人高瀬霜石（弘前市）の次の句が入賞

曲がってる臍はわたしの宝もの

神様がおまけをくれる尊厳死

○平成18年度川柳あきあじ賞

大仏のあぐらの中で眠りたい　大橋　政良

○5月28日、京都塔の会三十五周年記念大会は、ハートピア京都に於て73名の出席により開催。同人の天位条痕へ弥生文化を偲ぶ土器　小谷　集一

金婚まで織れば錦になる木綿　高島　啓子

外堀を埋めているのは河童です　谷口　義

▽出　版△

○波多野五楽庵相談役は、6月3日付で川柳句集『われも旅ゆく一人なり』を発刊（B6版60頁）

○同人米澤俶子さんは5月20日付、川柳句集『花の下』を発刊（A4版206頁）

○同人志田千代さんは朝日なにわ柳壇入選百句を記念して句集『わたしの百句』を発刊（A4版72頁）

▽同人動向△

○天笑主幹は5月19日、第8回井笠川柳会笠岡大会に出席のため岡山県笠岡市行。

○6月3日、川柳塔みちのく20周年記念大会出席のため西出楓楽理事長他12名青森県弘前市行。

○西出楓楽理事長（大阪市）の句集『天秤座』は5月11日付の山陽新聞と、上方芸能誌「関西芸能文化圏この人の日々」欄に紹介された。

○同人園山多賀子さんは、文芸誌季刊『山陰』№9にエッセイ「弄び弄ばれて五七五」を執筆。

○南大阪川柳会は7月号を以て500号を迎える。9月には記念吟行会を予定。

○5月9日関西テレビに、怒りの川柳に入賞した同人村上直樹氏がインタビューを受け自分と川柳の関わりについて話した。

○5月16日よみうりテレビ「笑ってこらえて」という番組で同人小島笑司氏が特技を披露した。

▽訂正とお詫び△

6月号＝119頁2段22行目、小島蘭幸副主幹→小島蘭幸副理事長特別常任理事会（参与以上出席）6月7日㈭出席者23名①同人・誌友の現状について②事務所の移転について③川柳塔まつりの件④定例確認事項⑤大阪川柳大会11月18日開催について⑥その他同人3名承認。次回常任理事会7月7日㈮13時30分～

新同人紹介

広島巴子（ひろしまともこ）

―見清・寿美子・則彦・尚士推薦

岩崎玲子（いわさきれいこ）

―見清・寿美子・則彦・尚士推薦

松川行男（まつかわゆきお）

―公弘・洋々・天笑推薦

暑中お見舞申し上げます

川柳塔社

主幹　河内天笑

理事長　西出楓楽

副主幹　奥田みつ子

副理事長　小島蘭幸

常任理事　穴吹尚士　籠島恵子　河内月子　木本朱夏　長浜美籠　坊農柳弘　松原寿子

前　井伊東吉　鴨谷瑠美子　川端一歩　鶴田遠野　西内朋月　たもつ

村上玄也　山本希久子

川柳塔社常任理事会

暑中お見舞い申し上げます

竹原川柳会

平成十九年　盛　夏

〒725-0022 広島県竹原市本町１丁目14―３

小　島　蘭　幸　方

会　監　会
計　査　長

山内房子　福島万年　三宅不朽　古田太虚　古谷節夫　石原淑子　森井菁子　岩本笑居　時広一路　小島蘭幸

ほか会員一同

暑中お見舞い申し上げます

平成十九年　盛夏

堺　川　柳　会

河内天笑　小寺竜之介　原　清晋
石堂潤子　齋藤さくら　樋口　冬虹
稲川恵勇　志田千代　日野　愿
岩崎公誠　高木世紀子　藤田泰子
榎本日の出　津守なぎさ　伏見雅明
榎本舞夢　遠山唯教　升成　好
大久保伸子　徳山みつこ　宮本かりん
太田としお　冨山ルイ子　村上玄也
太田扶美代　中井アキ　元永雅子
大谷篤子　中井崩　八木侑子
大橋鐘造　中川楓　矢倉五月
荻野像山　中崎深雪　矢野　梓
奥　時雄　中野健吾　山本半銭
柿花和夫　西内朋月　米澤俶子
河内月子　西村りつえ　和田つづや
神原　文　長谷川　彰
源田八千代　長谷川春蘭

暑中お見舞申し上げます

西宮北口川柳会

例会　毎月第２月曜日午後１時　西宮市立中央公民館
（阪急電鉄神戸線西宮北口下車南出口徒歩３分）
プレラにしのみや４F

事務局および投句先

〒662-0841 西宮市両度町2—19—515　山本義子

○

西口	いわゑ	神原	文	西内	朋月
奥田	みつ子	菊池	トミヱ	長谷川	春蘭
阿萬	萬的	北野	哲男	林	昭三
秋元	てる	木村	貴代子	春城	武庫坊
浅野	房子	久保田	千代	春城	年代
井上	松煙	蔵田	光子	藤本	直水
石原	歳子	黒田	能子	古川	奮水
岩倉	キク子	小林	わこ	堀	正和
臼井	二英	住谷	石舟	牧渕	富喜子
小熊	江美	田中	章子	松下	比ろ志
小倉	藍	田辺	鹿太	丸山	一之
片山	忠	辻	開子	山口	光久
亀岡	哲	坪井	孝一	山崎	君子
河井	庸佑	都倉	求芽	山田	婦美子
川島	諷云児	長浜	美籠	山本	義子
河原野	折杭	七反田	順子

いのちある句を創ろう

川柳塔のぞみ
川柳塔のぞみ八王子支部
丘の上川柳会

みんなでアタック

① 朝顔川柳句会（川柳発祥の地です）

7月8日(日)　台東区　生涯学習センター
大会終了後、浅草にて食事会予定

② さざなみ川柳40周年記念大会

10月28日(日)　名古屋市千種区　吹上ホール
大会翌日、犬山・明治村等観光予定

連絡先　〒193-0832　八王子市散田町2-31-3
播本充子
TEL 042-665-3172

暑中お見舞申し上げます

いずも川柳会

会長　竹治ちかし
会員一同

事務局　〒693-0052　出雲市松寄下町284
吉岡きみえ方
TEL 0853-22-1068

暑中お見舞申しあげます

川柳ふうもん吟社

会長　両川洋々

会員一同

事務局　〒680-0824 鳥取市行徳2丁目632
田中かをる方

月例会…毎月第4日曜日　13:00～
JR鳥取駅構内（シャミネ会議室）

第11回 川柳展望全国大会
第5回 現代川柳大賞表彰
第5回 展望賞表彰

日　時　8月3日(金)　10時30分開場
場　所　ホテルアウィーナ大阪
参加賞　2000円
お　話　「ユーモアとペーソス」　新家　完司
題と選者
「新しい」佐々木　裕　「逃げる」吉崎　柳歩
「　針　」高瀬　霜石　「肌」和泉　香
「開　く」久場　征子　「酒」鈴木　公弘
自由吟　笹田かなえ・津田　暹・門脇かずお
前田　咲二・久保田半蔵門・天根　夢草
締　切　12時　自由吟は各選者に違う句を出して下さい。
懇親宴　6000円・宿泊　6300円　要申込

主催　川柳展望社

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔きゃらぼく

会長　政　岡　日枝子

会　員　一　同

事務局　〒683-0845 米子市旗ヶ崎3-12-13
政　岡　日枝子
TEL 0859-34-1729

暑中お見舞い申し上げます

エイシス堺

講師　河内天笑

石堂　潤子　　中野　健吾
榎本日の出　　西村りつえ
榎本　舞夢　　原　清晋
大久保伸子　　樋口　冬虹
大谷　篤子　　升成　好
奥　時雄　　宮本かりん
荻野　像山　　村上　玄也
神原　文　　伏見　雅明
源田八千代　　元永　雅子
齋藤さくら　　矢倉　五月
高木世紀子　　矢野　梓
津守なぎさ　　米澤　俶子
冨山ルイ子　　山本加お里
中井　萠

暑中御伺い申しあげます

平成十九年　盛夏

香川県東かがわ市白鳥

川柳塔おっぱこ吟社

会長　成重　放任　　**会員**　角尾いさむ

会計　川崎ひかり　〃　辻上よしみ

顧問　木村あきら　〃　山崎はつ恵

同人　池内かおり　〃　赤沢　貞月

〃　原　賢　〃　中塚寿々女

〃　伊勢八重子　〃　田中　弘

暑中お見舞申し上げます

NHK川柳教室

河内天笑　安達忠央

藤井正雄　福田満州

指宿千枝子　山田耕治

鴨谷瑠美子　池上清治

志田千代　久保田千代

井上松煙　角谷克治

緒方美津子　藤井則彦

古今堂蕉子　西内朋月

江見見清　松村里江

大崎侑子　山本加お里

加川靖鬼　山口不動

医療法人社団

湯川胃腸病院

理事長　湯川紘未

大阪市天王寺区堂ヶ芝2丁目10番2号

TEL　06－6771－4861

暑中お見舞い申し上げます

翠洋会

安土理恵　穴吹尚士　阿部茶々　井上照子　榎本日の出　榎本舞夢　大川桃花　太田昭　岡本久峰　奥田みつ子　古今堂蕉子　小谷集一　佐々木満作　清水絹子　住谷石舟　髙杉千歩　(故)田中正坊

谷口義　津村志華子　坪井孝一　天正千梢　長浜美籠　中村叡子　中村れんげ　西出楓楽　原田すみ子　藤井正雄　安永春　山本希久子　横山捷也　米田水昇　米田恭昌　渡部さと美　渡辺富子

暑中お見舞申し上げます

川柳塔みちのく

主幹　斉藤　劦
副主幹　小寺　花峯
　　福士　慕情
相談役　工藤　甲吉
　　森中惠美子
顧問　波多野五楽庵
理事　岩渕　黙人
　　相馬　一花
　　櫻庭　順風
　　佐治氏加子
　　浅田　隆樹
　　肥後和香子
　　田中　叶
監事　相馬　銀波
　　小枝ふさゑ
　　福士　慕情
ほか同人一同

暑中お見舞申し上げます

川柳クラブ わたの花

平川幸枝　赤木妙子
松葉君江　西川義明
生嶋ますみ　寺川はじむ
吉村一風　笠井欣子
村上ミツ子　田邊浩三
山本宏司　松浦愛子
八倉知佐子　小西博子
乾美代子　上田和子
篠原いつふみ　飛永ふりこ
井尻民　土谷耀一
砂田八寿子　葭矢正春
馬場宏　梅原荘治
杉本晴美　梅原克美
脇俊子　今川孝子
本田たえこ　佐藤美はる

暑中お見舞い申し上げます

岸和田川柳会

井伊東吉　芳地狸村
長谷川呂万　岩佐ダン吉
宮野みつ江　寺田甚一
原さよ子　不破仁緑
山本蛙城　堂免路子
仲谷弘子　小島笑司
中島寿海　池田岩夫
永田守　児玉俊昭
沖泰弘　藤原昭
雪本珠子　土橋房枝
森元ふみよ　堤楢代
中岡香代　林春栄
助川和美　前田ゆい
小林淳子　佐藤幸子
松岡浅子　米富淳風
家路野添　稲葉洋
向井清

暑中お見舞
申し上げます

川柳塔
わかやま吟社

同人一同

事務局　〒641-0012
和歌山市紀三井寺
一一一―二
牛尾　緑良
電話〇七三―四四六―二八五五

暑中お見舞申し上げます

川柳若葉の会

黒田能子　辻川慶子　永浜加津子　生嶋ますみ　古川喜美子　宮﨑弘直　宮﨑シマ子　宮本欣史子　山内香住　吉田あずき

暑中お見舞申し上げます

南大阪川柳会

会員一同

住まいの情報センター（地下鉄谷町線・堺筋線 天神橋６丁目駅③出口）
原則として第４月曜日・６時から

暑中御見舞

川柳塔まつえ吟社

会長　小川注湖

同人一同

事務局　〒690-0015 松江市上乃木9－23－22

三島淞丘方

TEL 0852－21－2810

暑中御見舞

和歌山三幸川柳会

事務局　〒640～8111

和歌山市新通七―一七

TEL 073・423・8930

古久保和子

主幹　三宅保州

理事長　木本朱夏

相談役　桜井千秀

副主幹　古久保和子

副理事長　喜田准一

理事　榎原公子

〃　田中みね

〃　楠見章子

〃　川上智三

例会　毎月第四土曜日　午後一時

和歌山市勤労者総合センター

（和歌山市役所西側）

暑中御見舞申し上げます

東大阪市川柳同好会

会長　片岡湖風

会計　森下愛論

会員一同

暑中お見舞い申し上げます

鳥取県川柳作家連盟

会長　鈴木公弘
会員一同

事務局　〒680-0843　鳥取市南吉方３丁目364
安田方　春木圭一郎
TEL 0857—24—2834

暑中お見舞申し上げます

京都塔の会

三十五周年記念句会には多数のご出席
ありがとうございました
厚く御礼申し上げます

会員一同

暑中御見舞申し上げます

おたまじゃくし川柳会

助川和美
多田郁子
堤楢代
中岡香代
原みつよし
森元ふみよ
雪本珠子
土橋房枝
山本蛙城
林力子

〒596-0076
岸和田市野田町一—六—二
土橋方
電話　〇七二—四三八—三三〇八

暑中御見舞申し上げます

岩美川柳会

会員一同

〒681-0074 鳥取県岩美郡岩美町網代118-115

山下蟹郎

TEL 0857—72—0762

「この会は、鶴彬をはじめ先覚川柳人の反戦平和と社会諷刺の精神を現代に生かす」（会則）

あかつき川柳会

川端一歩　加山勝久
森村美花　前田紀男
岩佐ダン吉　森松まつお
山本柳昌
近藤正塩満敏
江島谷勝弘　宮崎シマ子

◆第26回句会
- 07・7・13（金）14時
- **大阪市立北区民センター**
  JR環状線「天満駅」3分
- 「太陽・時計・猫」

〈事務所〉〒596—0824
岸和田市葛城町891—22
岩佐ダン吉方
〇七二・四二八・〇三二五

暑中お見舞申し上げます

高槻川柳サークル卯の花 一同

月例句会は第三木曜日正午　　高槻現代劇場306号室

暑中お伺い
申し上げます

熊本川柳会

高野宵草
永田俊子
岩切康子

暑中御見舞申し上げます

川柳大阪

会員一同

大阪市交通局互助組合文化部・川柳部

暑中お見舞申し上げます

城北川柳会

会長　小谷集一
会員一同

暑中御見舞
申し上げます

川柳ささやま

会員一同

暑中お見舞申し上げます

八尾市民川柳会

会員一同

暑中御見舞
申し上げます

六甲川柳会

世話人
山口光久
伊勢田毅
両川無限
黒田能子
山口美穂

大阪川柳の会

句　会　毎偶数月上旬・大阪駅前第２ビル５階　第１研修室
事務局　〒532-0025　大阪市淀川区新北野1-3-4-706　本田智彦 方
TEL (06) 6303-7297

代表　礒野いさむ

世話人　足立淑子　碓氷立祥　岡良三　坂本和樹　竹森雀舎　内藤光枝　濱田良知　本田智彦　森口美羽　安井英華　吉村雅文

大阪川柳人クラブ　板尾岳人　坂本晴美

暑中お見舞申し上げます

はびきの市民川柳会

会員一同

暑中御伺い
申し上げます

河内長野

長柳会

水谷正子
村上直樹
山岡冨美子
坂上淳司

暑中御見舞申し上げます

大阪川柳人クラブ

会員一同

会長　礒野いさむ
副会長　板尾岳人
幹事長　坂本晴美
事務局　上村隆
会計　中川隆充

暑中お見舞い申し上げます

ほたる川柳同好会

水野黒兎　藤澤長一　小牧信男　田中蛍柳　田辺正三郎　高嶋勝　前田昭子　椋山祥風　藤原桂子　栗田久子　二ノ倉よしろう　出口セツ子　米原雪子　江見見清

寺井柳童　唐住實　宮田肋骨　多田契子　前田いさむ　宇山禮子　中山春代　谷川勇治　神野宇乃子　笠田幹治　松尾美智代　上田陽子　南賢次

ほか会員一同

暑中お見舞申し上げます

川柳塔なら

宮口笛生　中原比呂志　米田恭昌　坊農柳弘　大内朝子　吉川寿美　居谷真理子　渡辺富子　安土理恵　飛永ふりこ　森中博一

会員一同

盛　お見舞い申し上げます　夏

川柳藤井寺
川柳みささぎ

会員一同

サークル　檸檬

浅野房子
井丸昌紀
太田扶美代
大塚節子
奥田みつ子
片岡智恵子
久保田千代
鶴田遠野
長浜美籠
西口いわゑ
西出楓楽
西村哲夫
早川清生
前　たもつ
山口光久
山本希久子
山本義子
吉田あずき

暑中お見舞い申し上げます

エイシス東大阪

講師　河内天笑

生嶋ますみ
笠井欣子
吉川寿美
国見蘭香
熊代菜月
古手川光
佐々木満作
佐藤美はる
飛永ふりこ
中岡妙
西川更紗
星野きらり
堀富重
三宅健一
山本宏至
米田水昇

暑中お見舞申し上げます

平成十九年　**川柳塔唐津**

山口　樋口　仁部　宗　坂本　久保　市丸　岩崎　井上

高明　輝夫　四郎　水笑　蜂朗　正剣　晴翠　實　勝視

暑中お見舞申し上げます

西宮ローズ川柳会

山本義子　山崎君子　春城年代　春城武庫坊　西口いわゑ　長浜美籠　坪井孝一　木村貴代子　菊池トミヱ　亀岡哲子　小倉藍　奥田みつ子　岩倉キク子　飯西ミサヲ　秋元てる

暑中お見舞い申し上げます

尼崎尾浜川柳会

大川桃花　南全彦　小熊江美　坪井孝一　加川靖鬼　田原宏一　軸丸勝巳　西部イサミ　酢谷亀与子　村山よし子　松村里江　木村美代子　岩城義芳　奥村五月　松下比ろ志　林昭三　田辺鹿太　山田耕治　瀧本きよし　西内朋月　坂本晴美　河津正治　長浜美籠

他会員一同

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳 ねやがわ	15日(日)午後1時半締め切り 南極・今朝・例外・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9—9　高田博泉
川柳 藤井寺	15日(日)午後2時15分締め切り 夏・おんな	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	15日(日)午後1時半締め切り 缶ビール・自由・せっかく	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
南大阪 川柳会	16日(月)午後1時から 波紋・探す・うっかり・エゴ	住まい情報センター（大阪くらしの今昔館・5F） 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
もくせい 川柳会	16日(月)午後1時半締め切り 頼る・国・たまたま・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2—8—4　江見見清
川柳 さんだ	17日(火)午後1時から 指輪・氷・ジョッキ・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1515 三田市大原1553—12　北野哲男
高槻川柳 サークル 卯の花	19日(木)午後1時半締め切り 重い・屋根・さっぱり・時 自由吟	高槻現代劇場306号室　阪急高槻駅徒歩7分 〒569-0826 高槻市寿町3—28—13　神野節子
岸和田 川柳会	21日(土)午後2時締め切り 蟻・祈る・うらめしい・キムチ	岸和田市福祉センター 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
川柳 ふうもん 吟社	22日(日)午後2時締め切り ガセネタ・まだまだ・身内	JR鳥取駅構内　シャミネホール 〒680-0824 鳥取市行徳2—632　田中かをる
はびきの 市民 川柳会	22日(日)午後2時締め切り がぶがぶ・アロハ・指 「古い」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8—31—11　塩満　敏
川柳塔 みぞぐち	23日(月)午後8時から 暑い・音楽・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
川柳クラブ わたの花	27日(金)午前9時半から 海・一枚・ロボット・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16　吉村一風
東大阪市 川柳 同好会	28日(土)午後6時から 耐える・ヒロイン・権利・逆	東大阪市立社会教育センター3階 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3—3—21　片岡湖風
和歌山 三幸 川柳会	28日(土)午前11時から 百・場所	県民文化会館4F　中会議室 〒640-8111 和歌山市新通7—17　古久保和子
京都 塔の会	30日(月)午後2時締め切り やんちゃ・背く・野菜	ハートピア京都 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328—202　都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6779-3490）へご連絡ください。

7月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　ら	5日(木)午後1時から 盛る・腕・機敏	奈良市立中部公民館4F（近鉄奈良駅④出口歩5分） 〒639-0251 香芝市逢坂2—720—20 大内朝子
尼　崎 いくしま	6日(金)午後2時締め切り 山・曲がる・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富柳会	7日(土)午後2時締め切り 含む・カット・自由吟	富田林中央公民館 （近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m） 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池　森子
倉　吉 川柳会	7日(土)午後2時締め切り どうやら・自転車・あらゆる	倉吉市　明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 わかやま	8日(日)午後2時締め切り 平凡・灰汁・キャッチ・「下着」	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111—2 牛尾緑良
八尾市民 川柳会	8日(日)午後1時から 帽子・ねっとり・流れる・雑詠	山本コミュニティーセンター3F 学習室 （近鉄山本駅） 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
西宮北口 川柳会	9日(月)午後1時から 忘れる・落とす・粒・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2—19—515 山本義子
川柳塔 唐　津	9日(月)午後1時半から 玉・小さい・意外	唐津市　栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517—13 宗　水笑
尼　崎 尾　浜 川柳会	10日(火)午後2時締め切り 熱・こだわり・自由吟	尼崎市立立花公民館　尾浜分館 事務局 〒661-0976 尼崎市潮江5—2—47 田辺鹿太
ほたる 川　柳 同好会	10日(火)午後1時から 総理・拍手・握る	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール　蛍池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曽根2—4—1 水野黒兎
堺川柳会	14日(土)午後2時締め切り 石・親切 「タヒチ(折り句)」	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
城　北 川柳会	14日(土)午後1時半締め切り 免許・長い・しぶしぶ	旭区老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮駅3番出口左隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
川柳塔 みちのく	14日(土)午後5時半締め切り 支援・決まる・苦い	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53—1 小寺花峯
川柳塔 打　吹	14日(土)午後2時締め切り 留守・包む・サラサラ	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637—3 牧野芳光
川柳塔 ま つ え	14日(土)午後2時締め切り 夕日・足湯・地蔵・わいわい	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9—23—22 三島淞丘

編集後記

☆川柳塔事務所が移転しました。しばらくは事務所への通信に戸惑われることと思いますが、6月号にいれたチラシや今月号の表2面などでご確認下さい。

☆26年間お世話になったという旧事務所ですが、少し手狭になってきたことが、移転の主な理由です。

☆家の引越しも同じですが事務所移転には大変なエネルギーを要します。主に動いていただいた遠野さん、千里さんほか、たくさんの方のご苦労があって実現したと思います。

☆「ちょっとお立ち寄り下さい」と言えるほどのスペースもあります。

新事務所にて編集業務にも一層の力を注いでいきたいと思っています。

☆6月3日、みちのく20周年大会に出席をかねて、青森、函館の旅に参加させていただきました。

みちのく13人旅は、にぎやかな笑い声を乗せて夜行列車日本海3号の車中から始まりました。同車両には、他の乗客も少なく、一通り歓談のあとは、ゴトンゴトンと規則正しい線路の響きと適度の揺れに身を任せているうちに眠りに落ち、車内はまるで動くホテルとなって、朝を迎えた次第、15時間たっぷりの旅情を味わいました。

☆句会を終えた夜の津軽三味線ライブでは、太棹の力強いリズムと全身からほとばしる歌声に手拍子をとり演奏者と観客が一体となったひとときでした。句会ほか詳しい様子は次号にて紹介させて頂きます。（希）

ひととひと

歌舞伎座の隣り

四年目を迎えた「川柳塔のぞみ」は、銀座四丁目歌舞伎座の隣にある銀座区民館を会場に、句会とゲストを迎えての勉強会とを交互に開いている。

第一回勉強会に奥田みつ子副主幹にお願いして以来、十三回を数えている。ゲストには主として川柳塔社の先輩方に、作句の心得、川柳観をご披露いただいている。

第三回は、番傘の岸本吟一先生が「父、水府」を熱く、「母、十句」を涙で声をつまらせながら語って下さった。去る五月には田口麦彦先生をお迎えして「いまを詠む―時代への感受性」をテーマに講演いただき、東都他吟社のベテランも多数参加された。

ゲストを囲んでの「ランチを楽しむ会」もグルメ気分を味わいながら、サークルの和を図るものとして好評を博している。

皆様も一度、銀座勉強会を覗いて見てください。（野﨑 勝）

★路郎の忌　水蓮水の旅つづけ　薫風

★毎月19日、25日は編集日である。JR美章園駅に降りる。歩いて5分ばかり。古いビルの急な階段は縁が欠け、雨の日は滑りそうで怖い。事務所の階下はカラオケボックスである。昼過ぎには歌声が漏れてくる。

★事務所の鍛原千里さんが手際良く、美しく整理整頓してくださったお陰で「狭いながらも楽しい我が家」ならぬ事務所であった。昼食は車道を挟んで向かいのうどんやへ行く。

★時分時には手伝いの女性がくる以外は、おじさんが一人で切り盛りしている気のおけない、うどんやさんである。おじさんも疲れたのだろうか、「店を閉めたい」と言い出したころ、事務所移転が決まった。

★伝道書に言う。「天が下のすべてのことには季節があり、すべてのわざには時がある」と……。さすれば事務所移転も、うどんやのおじさんの「閉めたい」も天の配剤であろうか。

★5月25日、午前9時48分いつものように美章園駅に降り立つ。「行ってらっしゃい」駅員さんが、乗客の一人一人に声をかけてくれる。このさわやかな声をもう聞くことはない…。（朱）

川柳塔（同人）・水煙抄（誌友）投句用紙

種目「　　」発表（**9月号**）

地名

都県
道
府市

姓
雅号

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友　マルで囲んでください。

投句先　〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

きりとりせん

檸檬抄投句用紙

「長　い」　（7月15日締切）

9月号発表

西口いわゑ 選 ——共選—— 鈴木　公弘 選



左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

9月号発表（7月15日締切）

川柳塔（8句）　河内天笑選
水煙抄（8句）　西出楓楽選
愛染帖（3句）　新家完司選
檸檬抄（2句）　鈴木公弘共選
「長い」
「玉」
「小さい」
「意外」
（西口いわる共選）
一路集（3句）　古久保和子選
平田実男選
長浜美籠選
初歩教室「高い」（3句）　三宅保州担当

10月号

檸檬抄「ぼちぼち」
一路集「それから」「噛む」「引力」
初歩教室「音」

路郎忌　本社7月句会

とき　7月7日㈯ 午後5時半開場・6時半締切り
―開催時間、締切り時間に御注意下さい。
ところ　アウィーナ大阪　4階　金剛
天王寺区石ケ辻町19―12　電06・6772・1441
おはなし（対談）　阿萬　萬的・桒原　道夫
兼題「じっくり」　藤井則彦選
「　筋　」　木本朱夏選
「インテリ」　前　たもつ選
「通　う」　竹森雀舎選
「昼　寝」　河内天笑選
席題　1題　当日発表（各題2句以内）
会費　1000円　投句料　500円（切手可）

本社8月句会
7日（火）午後5時半から
兼題「狭　い」「　枠　」「チャンス」「止まる」「波　紋」

「川柳塔」への投句について

(1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
(2)愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
(3)各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
(4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

第26年度　夜市川柳募集

第2回「　森　」　木本朱夏選
ハガキに3句　**7月末日**締切
投句先　〒593-8305　堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方　**堺川柳会**

定価　八百円（送料92円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）
二〇〇七年（平成十九年）七月一日発行
発行人　河内權治
編集人　山本希久子
印刷所　美研アート
〒543-0052
大阪市天王寺区大道一―一四―一七
花野ビル201号室
発行所　**川柳塔社**
電話（〇六）六七七九―三四九〇番
振替　〇〇九八〇―四―二九八四七九番

ホームページアドレス　http://www.senryutou.join-us.jp/

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
平成十九年七月一日発行（毎月一日発行）

―路郎賞・川柳塔賞の応募は八月号の刷り込み用紙で―

① 川柳塔欄・水煙抄欄に6か月以上、出句した人に応募資格を認める。

② 平成18年9月号から平成19年8月号までの入選句（自分の句を出句する）

③ 8月号刷り込み用紙に5句を楷書で書き8月10日必着のこと。

昨年九月から今年八月の間に誌友から同人になられた方へ

「路郎賞」「川柳塔賞」のいずれか月数の多い方を選択して応募して下さい。

ただし「路郎賞」には川柳塔欄作品から、「川柳塔賞」には水煙抄欄作品からの応募となりますので、間違いのないようにお願いします。

